東九州自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— 21 —

福岡県豊前市所在遺跡の調査

鳥越下屋敷遺跡

大村湯福遺跡

鬼木鉾立遺跡

2015

九州歴史資料館

序

福岡県では、平成19年度から西日本高速道路株式会社の委託を受けて、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。本報告書は平成24年度に行った、豊前市鳥越・大村・鬼木に所在する鳥越下屋敷遺跡・大村湯福遺跡・鬼木鉾立遺跡の発掘調査の記録です。

これらの3遺跡の調査では、弥生時代から江戸時代までの集落跡を発見しました。それぞれの遺跡の近隣では現在も集落が営まれており、現代にまで受け継がれた住み良い土地柄と言えます。そういった意味で、今回の調査によって得られた資料は地域の歴史を考える上で貴重なものでしょう。

本書が教育、研究とともに、文化財愛護思想の普及の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書作成に至る間には、西日本高速道路株式会社および関係諸機関ならびに、地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに深く感謝いたします。

平成27年3月31日

九州歴史資料館
館長　杉光　誠

例　言

1．本書は、東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した福岡県豊前市に所在する鳥越下屋敷遺跡・大村湯福遺跡及び鬼木鉾立遺跡の記録である。東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第21集にあたる。
2．発掘調査は西日本高速道路株式会社の委託を受けて九州歴史資料館が実施し、整理報告も同社の委託を受けて九州歴史資料館が実施した。
3．鳥越下屋敷遺跡は東九州自動車道中津工事事務所管内の第19地点に、大村湯福遺跡は同第20地点に、鬼木鉾立遺跡は同32地点にあたる。
4．本書に掲載した遺構写真の撮影は吉村靖徳・小川泰樹・岡田諭・吉山弥生が、遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は東亜航空技研株式会社に委託した。
5．本書に掲載した遺構図の作成は、吉村・小川・岡田・大里が行い、発掘作業員が補助した。
6．出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、小川の指導の下に実施した。
7．出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
8．本書に使用した分布図は、国土交通省国土地理院発行の1/50,000地形図「中津」を改変したものである。本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。
9．本書のⅢは吉村が、Ⅵは岡田が執筆した。その他の執筆・編集は小川が行った。

目次

頁

Ⅰ　はじめに …… 1
　1　調査に至る経緯 …… 1
　2　調査の組織 …… 4
Ⅱ　位置と環境 …… 5
　1　地理的環境 …… 5
　2　歴史的環境 …… 5
Ⅲ　鳥越下屋敷遺跡 …… 8
　1　調査の経過 …… 8
　2　調査の概要 …… 8
　3　遺構と遺物 …… 10
　　土坑 …… 10
　4　まとめ …… 13
Ⅳ　大村湯福遺跡 …… 14
　1　調査の経過 …… 14
　2　調査の概要 …… 14
　3　遺構と遺物 …… 15
　　土坑 …… 15
　　溝 …… 17
　4　まとめ …… 23
Ⅴ　鬼木鉾立遺跡２次調査 …… 24
　1　調査の経過 …… 24
　2　調査の概要 …… 24
　3　遺構と遺物 …… 25
　　土坑 …… 25
　　溝 …… 28
　　その他出土の遺物 …… 28
　4　まとめ …… 28
Ⅵ　鬼木鉾立遺跡３次調査 …… 29
　1　調査の経過 …… 29
　2　調査の概要 …… 29
　　概要 …… 29
　　トレンチ …… 32
　3　遺構と遺物 …… 36
　　竪穴住居跡・土器棺墓 …… 36
　　掘立柱建物跡 …… 44

土坑墓・土坑・溝 …… 46
その他の遺構出土土器・遺構外出土土器（第 36 図） …… 50
4　まとめ …… 52

図版目次

図版 1　1．鳥越下屋敷遺跡遠景（空中写真、南から）
2．鳥越下屋敷遺跡全景（空中写真、西から）
図版 2　1．1～3号土坑（北から）　2．1号土坑（東から）
3．1号土坑土層（東から）
図版 3　1．3号土坑（東から）　2．4号土坑（東から）
3．1～4号溝（北から）
図版 4　鳥越下屋敷遺跡出土遺物
図版 5　1．大村湯福遺跡遠景（空中写真、北から）　2．大村湯福遺跡遠景（空中写真、南から）
図版 6　1．西半部全景（空中写真、東から）　2．西半部全景（空中写真）
3．東半部全景（空中写真、東から）
図版 7　1．東半部全景（空中写真）　2．1号土坑（検出状況、東から）
3．1号土坑（掘削状況、東から）
図版 8　1．2号土坑（検出状況、南から）　2．2号土坑（掘削状況、西から）
3．3号土坑（南から）
図版 9　1．1～3号溝（空中写真）　2．1号溝（南から）
3．3号溝（東から）
図版 10　大村湯福遺跡出土遺物①
図版 11　大村湯福遺跡出土遺物②
図版 12　大村湯福遺跡出土遺物③
図版 13　1．鬼木鉾立遺跡2次調査区遠景（空中写真、北東から）
2．鬼木鉾立遺跡2次調査区全景（空中写真）
図版 14　1．1号土坑（北東から）　2．2号土坑（南西から）
3．3号土坑（北西から）
図版 15　1．4号土坑（北西から）　2．5号土坑（西から）
3．6・7号土坑（東から）
図版 16　1．1号溝（東から）　2．1号溝（東から）
3．鬼木鉾立遺跡2次調査出土遺物
図版 17　1．鬼木鉾立遺跡3調査区西半部全景（右下が北）
2．鬼木鉾立遺跡3調査区東半部南側全景（左上が北）
3．鬼木鉾立遺跡3調査区遠景（東から）
図版 18　1．鬼木鉾立遺跡3調査区遠景（東から）　2．1号トレンチ土層断面（北から）

３．２号トレンチ土層断面（北東から）
図版 19　１．３号トレンチ土層断面（南から）　２．１号竪穴住居跡南北土層断面南側（東から）
３．１号竪穴住居跡完掘状況（西から）
図版 20　１．２号竪穴住居跡土層断面（南から）　２．２号竪穴住居跡検出状況（北西から）
３．１号土器棺墓（西から）
図版 21　１．２号竪穴住居跡と１号土器棺墓（西から）　２．１号掘立柱建物跡（東から）
３．２号掘立柱建物跡（南から）
図版 22　１．３号掘立柱建物跡（西から）　２．４号掘立柱建物跡（上が北西）
３．１号土坑墓土層断面（南から）
図版 23　１．１号土坑墓遺物出土状況（北から）　２．１号土坑土層断面（南から）
３．１号土坑完掘状況（南から）
図版 24　１．２号土坑検出状況（南から）　２．２号土坑・１号溝土層断面（南から）
３．調査区周辺地形（北東から）
図版 25　鬼木鉾立遺跡３次調査出土土器①
図版 26　鬼木鉾立遺跡３次調査出土土器②

挿図目次

頁
第１図　福岡県豊前市の位置 …… 1
第２図　東九州自動車道路線および調査地点位置（1/200,000） …… 3
第３図　周辺遺跡分布図（1/50,000）…… 6
第４図　鳥越下屋敷遺跡位置図（1/1,000） …… 8
第５図　鳥越下屋敷遺跡遺構配置図（1/200）…… 9
第６図　１～４号土坑実測図（1/40） …… 11
第７図　１～４号溝土層図（1/40） …… 12
第８図　鳥越下屋敷遺跡出土遺物実測図（1/3、1/2、2/3）…… 12
第９図　大村湯福遺跡位置図（1/1,000） …… 14
第 10 図　大村湯福遺跡遺構配置図（1/300）…… 15
第 11 図　１～３号土坑実測図（1/30） …… 16
第 12 図　１号土坑出土遺物実測図（1・2：1/3、3～8：1/4）…… 16
第 13 図　１～３号溝実測図（1/120、1/60）…… 18
第 14 図　１・２号溝出土遺物実測図（1・4～19：1/3、2・3・20～26：1/4） …… 19
第 15 図　２号溝出土遺物実測図（27：1/6、28～30：1/4、31・32：1/3） …… 20
第 16 図　３号溝出土遺物実測図①（1～16：1/3、17～29：1/4）…… 22
第 17 図　３号溝出土遺物実測図②（1/3）…… 23
第 18 図　鬼木鉾立遺跡２次調査位置図（1/3,000） …… 24
第 19 図　鬼木鉾立遺跡２次調査遺構配置図（1/300）…… 25

第 20 図　１～７号土坑実測図（1/40・1/60）…… 26
第 21 図　１号溝実測図（1/40）…… 27
第 22 図　鬼木鉾立遺跡２次調査出土遺物実測図（1/3）…… 28
第 23 図　鬼木鉾立遺跡調査区位置図（1/3,000、1/1,000）…… 30
第 24 図　鬼木鉾立遺跡３次調査遺構配置図（1/300）…… 31
第 25 図　１～３号トレンチ土層断面実測図（1/80）…… 33
第 26 図　１～３号トレンチ出土土器実測図（1/3）…… 35
第 27 図　１号竪穴住居跡実測図（1/60、1/30）…… 37
第 28 図　１号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）…… 39
第 29 図　１号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）…… 40
第 30 図　２号竪穴住居跡・１号土器棺墓実測図（1/60、1/30）…… 41
第 31 図　２号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）…… 43
第 32 図　２号竪穴住居跡出土土器実測図②・１号土器棺出土土器実測図（1/3）…… 45
第 33 図　１・２号掘立柱建物跡実測図（1/80）…… 46
第 34 図　３・４号掘立柱建物跡実測図（1/80）…… 47
第 35 図　１号土坑墓、１・２号土坑、１号溝実測図（1/40、1/80）…… 49
第 36 図　３号掘立柱建物跡、１号土坑墓、１・２号土坑、その他の遺構、遺構外出土土器、
瓦（1/3）・石器実測図（1/2）…… 51

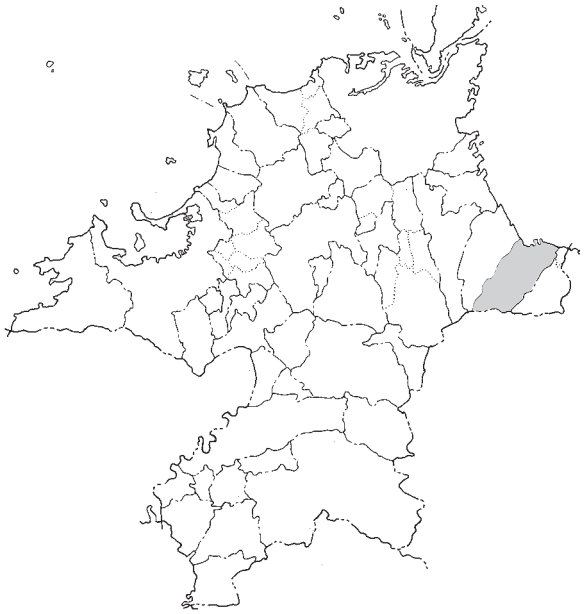
表目次

第１表　東九州自動車道関係発掘調査地点一覧 …… 2
第２表　１号トレンチ土層断面注記一覧 …… 32
第３表　２号トレンチ土層断面注記一覧 …… 34
第４表　３号トレンチ土層断面注記一覧 …… 34
第５表　１号竪穴住居跡土層断面注記一覧 …… 36
第６表　２号竪穴住居跡土層断面注記一覧 …… 40

Ⅰ　はじめに

1.　調査に至る経緯

東九州自動車道は、北九州市を起点として、福岡、大分、宮崎、鹿児島各間の東九州に点在する主要都市を結んで、鹿児島市に至る延長約436kmの高速道路である。既に高速道路整備が完了している西九州側と比較して、これまでの物流・移動時間の面での較差が、東九州自動車道が開通することによって解消し、東九州地域の経済、産業、医療、文化等の各方面での振興が見込まれている。また、九州道、大分道、宮崎道と接続することで、九州内の移動時間が大幅に短縮され、地域間交流が活発になるとともに、九州全体の発展も期待されている。



第１図　福岡県豊前市の位置

東九州自動車道の建設事業は、日本道路公団が平成19（2007）年10月に民営化して誕生した西日本高速道路株式会社（NEXCO西日本）九州支社の福岡工事事務所、中津工事事務所、延岡高速道路事務所が引き続いて担当し、平成25年度までに約277kmが部分的に開通している。福岡県内では、北九州JCT －苅田北九州IC間が平成18年２月、苅田北九州空港－行橋ICが平成26年３月、行橋IC －みやこ豊津ICが平成26年12月にそれぞれ開通しており、これで福岡工事事務所が担当してきた区間は全て供用されたこととなった。一方の中津工事事務所が担当している椎田南ICから県境までの区間については平成28年度末までに供用開始予定である。

埋蔵文化財の調査については、平成９年３月に福岡県教育委員会に対して出された「東九州自動車道計画ルートに係る埋蔵文化財について」の照会文書（苅田－豊津間）を受けて、58箇所の調査地点を回答したことに始まる。平成12年以降は、用地の取得状況に合わせて試掘・確認調査を実施し、埋蔵文化財の存在が確認された箇所について順次発掘調査を実施しており、詳細は第１表に示したとおりである。

今回報告する、鳥越下屋敷遺跡、大村湯福遺跡、鬼木鉾立遺跡については福岡県教育委員会および豊前市教育委員会がこれまで行なってきた分布調査では埋蔵文化財包蔵地として未確認であったが、西日本高速道路株式会社中津工事事務所からの依頼を受け平成23年10月18・19日および平成24年３月６・７日に実施した試掘調査によって発掘調査の必要な範囲を確定した。

発掘調査は、用地の取得状況ならびに建設工事の工程に合わせて、鳥越下屋敷遺跡は平成24年７月４日～８月28日、大村湯福遺跡は８月16日～11月20日、鬼木鉾立遺跡は４月26日～平成25年２月８日までの期間、それぞれ実施した。

第１表　東九州自動車道関係発掘調査地点一覧

地点	工事件名	遺跡名	所在地	対象面積（㎡）	試掘年度	調査面積（㎡）	調査年度	報告年度	既刊報告書番号	備考
2	中津	石堂大石ヶ丸遺跡	築上郡築上町石堂	9027	H21～23	200	H23	H25	15集	
3	中津	福間菜切古墳群	築上郡築上町石堂	16644	H21～23	1000	H22	H25	15集	
4	中津	頭無古墳群 西一町田遺跡	築上郡築上町上ノ河内	19420	H22					遺跡なし
5	中津		築上郡築上町上ノ河内	2840	H21					遺跡なし
6	中津	中村西峰尾遺跡	築上郡築上町上ノ河内 豊前市中村	26972	H22	15000	H23･24	H25	15集	
7	中津	中村山柿遺跡	豊前市中村	16579	H21･22	700	H22	H25	15集	
8	中津		豊前市中村・馬場	10354	H21					遺跡なし
9	中津		豊前市中村・松江	42434	H24					
10	中津		豊前市松江	9905	H23					遺跡なし
11	中津		豊前市松江	26570	H21･23					遺跡なし
12	中津	松江黒部遺跡	豊前市松江・四郎丸	14462	H21	600	H23	H25	15集	
13	中津		豊前市四郎丸	12986	H21･23					遺跡なし
14	中津		豊前市四郎丸	2390	H21					遺跡なし
15	中津		豊前市四郎丸	9735	H22					遺跡なし
16	中津		豊前市四郎丸	10432	H22					遺跡なし
17	中津	川内下野添遺跡	豊前市川内	15972	H21～23	3600	H22･23	H25	15集	
18	中津		豊前市川内	16040	H21～23					遺跡なし
19	中津	鳥越下屋敷遺跡	豊前市鳥越	4963	H23･24	760	H24	H26	21集（本冊）	
20	中津	大村湯福遺跡	豊前市大村	8762	H23･24	1100	H24	H26	21集（本冊）	
21	中津		豊前市大村	0						
22	中津		豊前市大村	0						
23	中津		豊前市大村	0						
24	中津	天地山遺跡	豊前市大村	6777	H20･22					遺跡なし
25	中津	大村上野地遺跡 大村シトキ田遺跡	豊前市大村・荒堀	10527	H20･22･23	2600	H23	H25	15集	一部豊前市により調査
26	中津	荒堀山田原遺跡	豊前市荒堀	21821	H21～24	1000	H22	H25	15集	
27	中津		豊前市荒堀	9823	H21･22					遺跡なし
28	中津		豊前市大西	23122	H21～23					遺跡なし
29	中津	塔田琵琶田遺跡 大西遺跡 西ノ原遺跡 時末遺跡	豊前市大西・永久 塔田・久路土	63733	H21～24	35000	H23～25	H26	22集	一部豊前市により調査
30	中津	久路土馬踏遺跡	豊前市久路土	9463	H23					遺跡なし
31	中津	鬼木溝添遺跡	豊前市鬼木	12636	H23					遺跡なし
32	中津	鬼木鉾立遺跡	豊前市鬼木	25256	H21･23	5500	H24	H26	21集（本冊）	
33	中津	緒方古墳群 七ッ枝遺跡 春屋敷遺跡 道ノ本遺跡	築上郡上毛町緒方	12456	H20～23	3500	H20～22	H24	8集	上毛町試掘
34	中津	龍毛遺跡	築上郡上毛町緒方	11732	H20･21･23･24	5000	H21･24	H24	8集	上毛町試掘
35	中津	下尻高遺跡 ハカノ本遺跡	築上郡上毛町緒方・尻高	11517	H20･21	7200	H20･21	H24	7集	
36	中津	安曇山田遺跡	築上郡上毛町安雲	10135	H20	9400	H20			一部上毛町により調査
37	中津	安曇山田遺跡	築上郡上毛町安雲・宇野	24970	H20･21		H20･21	H24	7集	〃
38	中津		築上郡上毛町土佐井	22252	H20					遺跡なし
39	中津	土佐井遺跡 2C-4 区	築上郡上毛町土佐井	21860	H20～22	4400	H22～23	H25	16集	一部上毛町により調査
40	中津	土佐井遺跡 2A-2 区	築上郡上毛町土佐井	13476	H20～22	600	H23	H25	16集	〃
41	中津	土佐井小迫遺跡 唐原山城跡	築上郡上毛町土佐井	7887	H21･22･24	1500	H22･24	H25	16集	
42	中津	ガサメキ遺跡 穴ヶ葉山南遺跡	築上郡上毛町下唐原	33002	H21･22･24	4000	H22･24	H25 H26	16集 23集	一部上毛町により調査
43	中津		築上郡上毛町下唐原	25215	H21･22･23					遺跡なし
44	中津	大久保楢迫遺跡 （新池南古墳）	築上郡上毛町下唐原	13452	H22	7500	H22	H25	16集	一部上毛町により調査
45	中津		築上郡上毛町下唐原	11997	H24					遺跡なし
46	中津	皿山古墳群	築上郡上毛町下唐原・上唐原	23977	H22～24	12000	H23･24	H26	23集	
47	中津	四ッ塚山古墳群	築上郡上毛町上唐原	7193	H22･23	6600	H23			
48	中津	鏡迫古墳群	築上郡上毛町上唐原	4577	H25	2000	H25			
49	中津	榎町遺跡	築上郡上毛町上唐原	14250	H24	8940	H24･25			
50	中津	榎町遺跡	築上郡上毛町上唐原	4735	H23	1050	H24･25			一部上毛町により調査

第２図　東九州自動車道路線および調査地点位置（1/200,000）

2. 調査の組織

発掘調査（平成 24 年度）および整理・報告書作成（平成 26 年度）の関係者は次のとおり。

	平成 24 年度	平成 26 年度
西日本高速道路株式会社九州支社		
支社長	本間清輔	本間清輔
西日本高速道路株式会社九州支社中津工事事務所		
所長	三瀬博敬	宗方鉄生
副所長（技術担当）	小島二郎	小島二郎
副所長（事務担当）	中村重俊	中村重俊
総務課長	宇都良典	門田憲明(～ 9.30)
		内田伸博(10.1～)
用地課長		和田　勝
用地第一課長	藤江　正	
工務課長	渡辺浩延	本田正和
豊前工事長	川畑一弘	川畑一弘
上毛工事長	荒平裕次	大岡慶巳
九州歴史資料館		
総括		
館長	西谷　正	杉光　誠
副館長	篠田隆行	伊崎俊秋
総務室長	圓城寺紀子	塩塚孝憲
文化財調査室長	飛野博文	飛野博文
文化財調査室長補佐	吉村靖徳	吉村靖徳
文化財調査班長	小川泰樹	秦　憲二
庶務		
総務班長	長野良博	山﨑　彰
事務主査	青木三保	南里成子
		宮崎奈巳
主任主事	近藤一崇	
主事	谷川賢治	秦　健太
調査・報告・整理		
企画主幹	吉村靖徳	吉村靖徳
技術主査	小川泰樹	小川泰樹
主任技師	岡田　諭	岡田　諭
臨時調査員	吉山弥生	

Ⅱ　位置と環境

１.地理的環境

豊前市は、福岡県東部に位置し、北は周防灘に面する。明治 22（1889）年の町村制施行に際して、上毛郡の２町７村、築城郡の１村が発足し、明治 29（1896）年に両郡が合併して築上郡に、昭和 10（1935）年には八屋町と宇島町が合併して八屋町となり、昭和 30（1955）年に１町８村（八屋町・山田村・千束村・三毛門村・黒土村・合河村・岩屋村・横武村・角田村）が合併して宇島市としたが、同年名称変更により豊前市となって今日に至っている。面積は 111.17㎢、人口は平成 26 年時点で約 26,000 人である。

市域南西には英彦山（1,199 m）から派生した一ノ岳（1,124 m）、犬ヶ岳（1,131 m）、経読岳（992 m）、雁股山（807 m）、また求菩提山（782 m）、国見山（638 m）と連なる山稜は分水嶺ともなり、それらに源を発する佐井川、岩岳川、中川やその支流などの大小の河川は、浸食によって北東に延びる多くの谷底平野をつくり、中流で大きく開けて豊前平野を形成して北面する周防灘へと注ぐ。鳥越下屋敷遺跡と大村湯福遺跡は国見山から北東に延びる丘陵の先端部付近の西麓と東麓に、鬼木鉾立遺跡は佐井川・岩岳川によって開析された扇状地上にそれぞれ立地する。

２.歴史的環境

この地域の歴史研究、ことに考古学的調査は、これまで他地域の比較すると進展していなかったが、1990 年代以降の圃場整備事業や国道 10 号バイパス建設事業などの大規模発掘調査によって、徐々に明らかになりつつある。

豊前市域の旧石器時代についても同様で、この時代の資料の存在が知られるようになったのは青畑向原遺跡の調査で旧石器群が出土して以降で、その後荒堀大保遺跡、薬師寺塚原遺跡、小石原泉遺跡などからも相次いで旧石器が出土している。

縄文時代では、後期に遺構・遺物が集中してみられ、中村石丸遺跡、挟間宮ノ下遺跡、川内楠木遺跡、松江炭山遺跡等で集落跡が検出されているほか、小石原泉遺跡では堅果類が出土する低湿地型貯蔵穴群を調査している。その他の時期については、吉木遺跡などで早期の土器が比較的まとまって出土していて遺構が存在した可能性が指摘されているほか、久路土樋掛遺跡で検出した落とし穴群等もこの時期のものである可能性があり、また河原田塔田遺跡で晩期の竪穴住居跡が１軒発見されているが、それ以外はいずれも遺物が散発的に出土する程度であり、調査が充分に進展している状況ではない。

この傾向は弥生時代に入っても継続し、現在のところ前期初頭に溯る資料は発見されておらず、前期中葉以降の久路土芝掛遺跡の集落跡のほか昭和町遺跡の壺棺が知られる。前期末から中期になると、佐井川、岩岳川の中流域に集中的に集落が展開し、ことに佐井川沿いの河原田塔田遺跡、鬼木四反田遺跡、鬼木鉾立遺跡では青銅器が出土しており（市指定考古資料）、それは豊前市域ではこの地区に限られている。また、後期になると、小石原泉遺跡など河川下流域へと展開している様子が窺える。

古墳時代では、隣接する山国川沿いに西方古墳、能満寺３号墳（ともに上毛町）、楡生山古墳（吉富町、町指定史跡）と、近年になって前方後円墳が相次いで確認されたのとは対照的に、豊前市

1	中村西峰尾遺跡	2	中村石丸遺跡	3	中村団後遺跡	4	馬場植田遺跡	5	松江炭山遺跡
6	黒部古墳群	7	黒峰尾古墳群	8	松江黒部遺跡	9	川内下野添遺跡	10	川内楠木遺跡
11	平原横穴墓群	**12**	**鳥越下屋敷遺跡**	**13**	**大村湯福遺跡**	14	大村天神林遺跡	15	大村石畑遺跡
16	青畑向原遺跡	17	荒堀大保遺跡	18	荒堀雨久保遺跡	19	今市向野遺跡	20	吉木遺跡
21	吉木常末遺跡	22	吉木芦町遺跡	23	久路土芝掛遺跡	24	大西遺跡	25	西ノ原遺跡
26	塔田琵琶田遺跡	27	時末遺跡	28	久路土六田遺跡	29	久路土鐘鐔田遺跡	30	久路土樋掛遺跡
31	**鬼木鉾立遺跡**	32	永久遺跡	33	鬼木四反田遺跡	34	河原田塔田遺跡	35	河原田善丸遺跡
36	河原田四ノ坪遺跡	37	薬師寺塚原遺跡	38	狭間宮ノ下遺跡	39	下河内桃ノ木遺跡	40	三毛門放生田遺跡
41	鈴熊山遺跡	42	楡生山古墳	43	小石原泉遺跡	44	皆毛高屋代遺跡	45	日熊山古墳群
46	大ノ瀬官衙遺跡	47	緒方古墳群	48	龍毛遺跡	49	ハカノ本遺跡	50	山田窯跡群
51	安雲山田遺跡	52	照日窯跡群	53	友枝瓦窯跡	54	池ノ口遺跡	55	垂水廃寺
56	宇野代遺跡	57	唐原山城跡	58	土佐井遺跡	59	土佐井ミソンデ遺跡	60	東友枝曽根遺跡

第３図　周辺遺跡分布図（1/50,000）

内では現在まで前・中期の古墳の存在は知られておらず、後期になって黒部古墳群（県指定史跡、考古資料）、黒峰尾古墳群（市指定史跡）、横穴墓として平原横穴墓群（市指定史跡）が現存する程度である。集落跡としては、小石原泉遺跡で弥生時代から古墳時代後期まで継続する集落跡を検出しており、中後期のカマドに付設するオンドル状遺構の比率が高いことが特徴的である。同様に古墳時代の大規模集落として塔田琵琶田遺跡が最近の調査で明らかになりつつあるが、やはりオンドル状遺構を持つものが多い。

古代では、正倉院文書中の大宝２（702）年の戸籍帳にある上三毛郡加目久也里は『和名類聚鈔』によれば上毛郡炊江郷とされ、八屋、荒堀、大村付近に比定されている。この地の荒堀大保遺跡、荒堀雨久保遺跡、大村石畑遺跡などから奈良時代の遺物が出土しているほか、官道推定線沿いとその周囲の荒堀大保遺跡、皆毛高野台遺跡、小石原泉遺跡等で道路状遺構が確認されている。また、官道に沿う佐井川右岸には大ノ瀬官衙遺跡（上毛町、国指定史跡）があり、上毛郡衙と推定されている。

求菩提山（国指定史跡）は古代以来の山岳霊場遺跡である。12 世紀中頃に頼厳によって再興され、この時期の遺物として銅板法華経･銅筥（国宝）、経塚出土品（重要文化財）等の遺物が知られるほか、市内でも同時期の遺跡が多いのは必ずしも偶然ではなかろう。求菩提山はもと彦山六峰にも数えられたが、彦山の影響力が圧倒的な豊前にあって、ほぼ唯一の本山派修験道の拠点として明治まで存続し、有形・無形の多数の文化財を今日にまで伝える（県指定有形民俗文化財、無形民俗文化財など）。

また、平安時代には宇佐八幡宮の発展と荘園領主化がみられ、豊前市域では角田荘、黒土荘、山田荘が知られるが、前者は宇佐八幡宮の、後二者は神宮寺の弥勒寺の荘園であった。

中世になると、平氏滅亡後に地頭として豊前に下向した下野出身の宇都宮氏が徐々に勢力を伸ばし、仲津郡、築城郡、上毛郡、下毛郡に次々と一族を配置していった。市内に残る山城跡のほとんども、宇都宮氏一族の築城によるものであるという。大村石畑遺跡、大村天神林遺跡、馬場植田遺跡等、城跡推定地とその周辺での発掘調査によって、居館跡や柵列、堀跡等、これに関連する遺構・遺物が確認されている。

中世後半期、この地は大内氏、大友氏の勢力争いの舞台となり、後に毛利氏、秋月氏も加わって、たびたび戦乱に巻き込まれている。最終的にそれらは秀吉の九州征伐によって一掃され、豊前国のうち京都郡、仲津郡、築城郡、上毛郡、下毛郡、宇佐郡を黒田孝高が知行することで決着した。

関ヶ原合戦後、転封によって細川氏が入国し、のち寛永９（1632）年に小笠原氏が入封して幕末まで続いている。関門海峡を擁した九州の要衝地である豊前に譜代大名を配置したことで、徳川幕府の支配体制は確立したともいえる。

寛文 11（1671）年、二代藩主忠雄の弟真方（長高）に築城郡内 22 か村一万石を分封して新田藩が創設された。これはのち貞亨 2（1685）年に豊前市域を含む上毛郡内の 26 か村（黒土手永－黒土、鬼木、下大西、塔田、野田、荒堀、今市、吉木、清水町、恒富、小犬丸、久松、三楽、岸井手永－安雲、緒方、成恒、広瀬、岸井、堀立、梶屋、市丸、森久、六郎、小石原、皆毛、高田）と交換されている。

Ⅲ　鳥越下屋敷遺跡

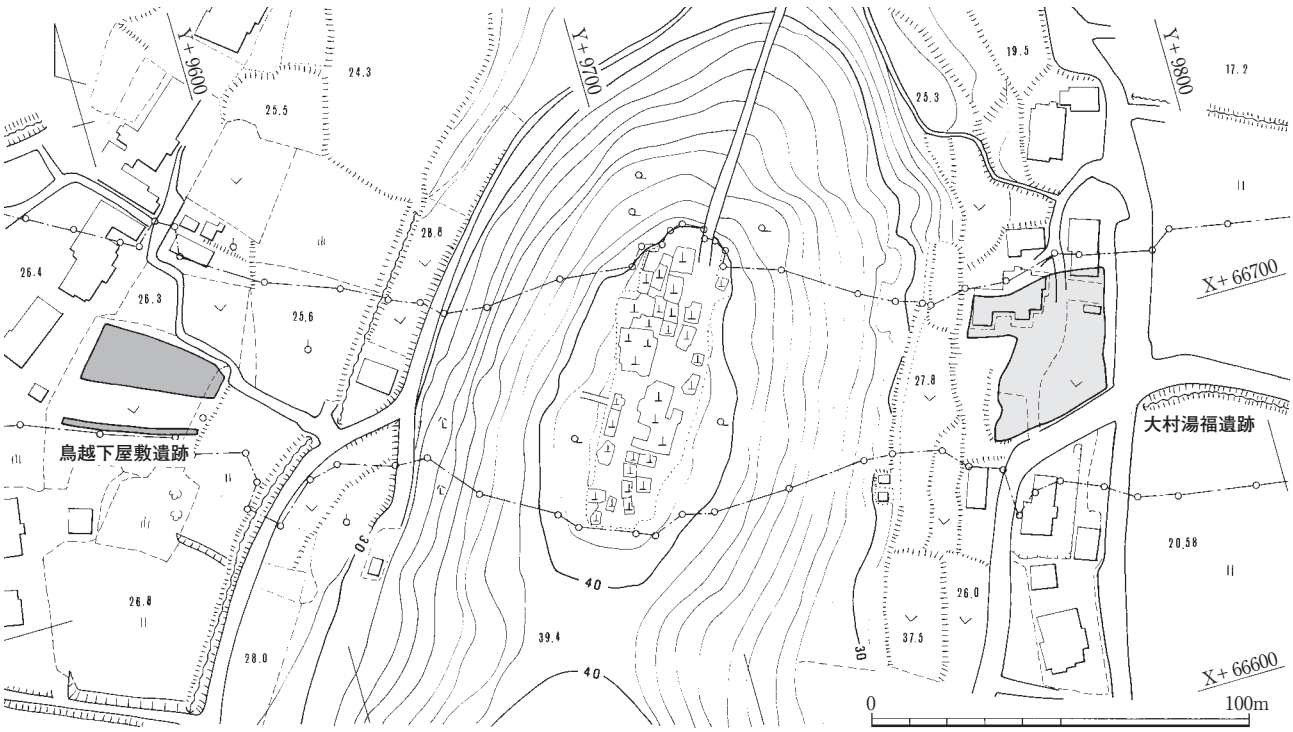
1　調査の経過

平成24年３月６日に西日本高速道路株式会社中津工事事務所からの依頼を受け、調査対象地の試掘調査を行った。その結果、遺構が存在する可能性が高かった台地の中央部において、遺構密度は低いものの遺跡の存在が確認された。その西側は削平を受け、また、東側は丘陵との間に入る小さな谷に向かって旧地形も傾斜しており、遺構は確認されなかった。調査着手時には、すでに対象地西側を北に流れる中川の橋脚をかける工事が進捗しており、９月からは当該地の工事に着手する予定が組まれていた。そのため、担当が進めていた上毛町龍毛遺跡第３次調査の完了を待たずに、調査に着手することとなった。対象地に至るには工事側で施工する付け替え道路を横切る必要があったが、施工が梅雨時期の悪天候で遅延し、目途が立たない状況となっていた。

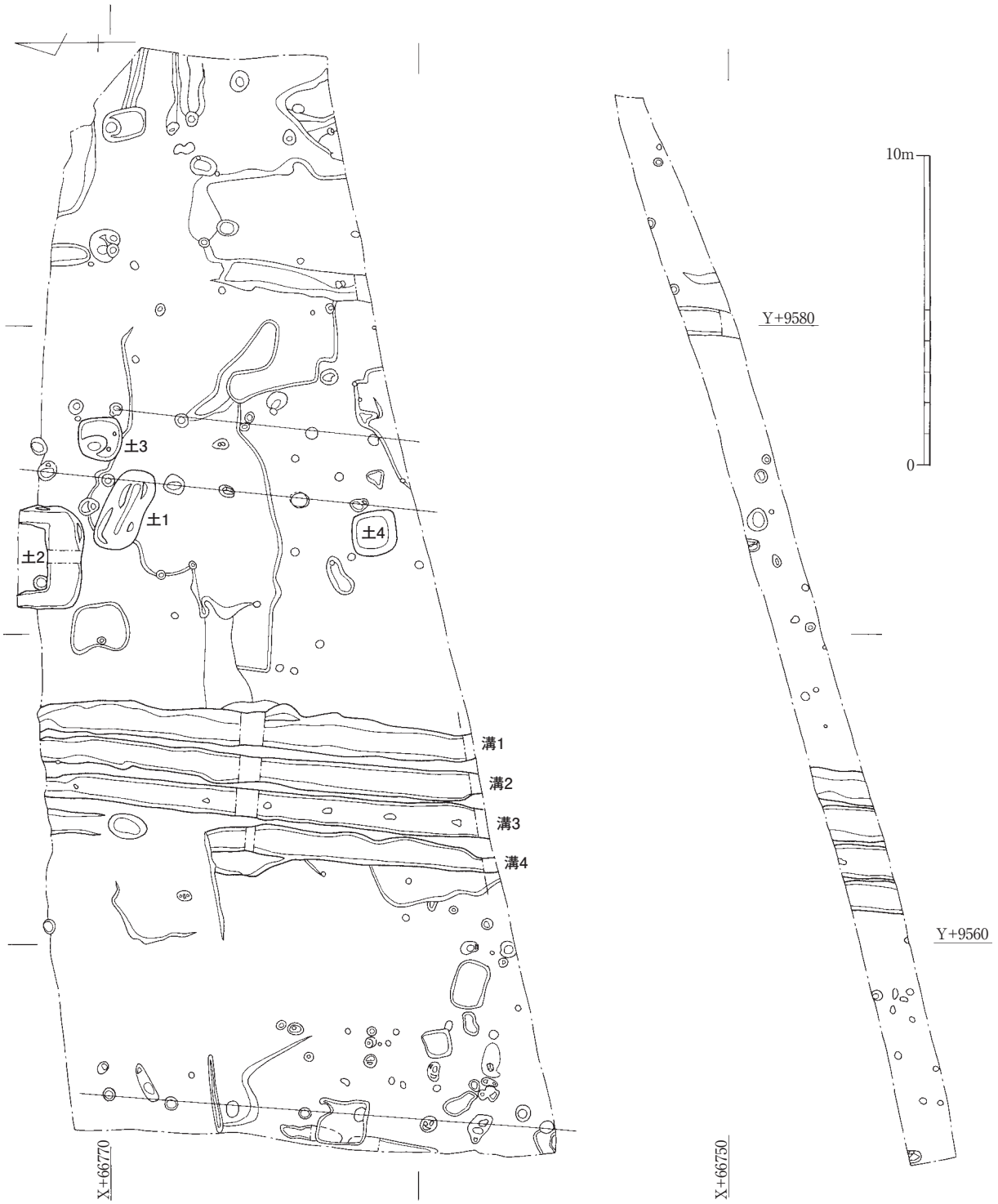
上記のように作業所や作業員駐車場を当面設置できない懸念もあったが、取り急ぎ７月４日から当該発掘調査対象地について重機による表土剥ぎを開始した。なお、調査を必要とする箇所のうち、南側の約10ｍ幅の限定協議範囲を除いた暫定供用部分760m^{2}と南側水路部分について発掘調査を実施した。７月10日には進入路の問題も解決したため12日に建機を搬入、翌13日に発掘機材搬入を行い、作業員の確保・手配が完了した７月20日から現地作業を開始した。その後、８月20日にラジコンヘリによる空中写真撮影を行い、８月23日までに実測作業を終えた。８月28日に建機を搬出し、調査を完了した。（埋蔵文化財発掘調査の報告：平成24年７月８日　24九歴第308号の13、埋蔵物の発見届：平成24年８月20日　24九歴160号の８）

2　調査の概要

調査地周辺は、標高1199ｍの英彦山から東に連なる山系のうち、国見山から派生する八つ手状



第４図　鳥越下屋敷遺跡遺構配置図（1/2,000）



第５図　鳥越下屋敷遺跡遺構配置図（1/200）

の小丘陵とそれら小丘陵で挟まれる谷によって形成される地形が連なる。遺跡は、その小丘陵の先端近く、北流する中川が形成する谷に面した台地上に立地する。隣接する丘陵頂部と調査地との標高差は13ｍほどある。

今回の調査において検出した遺構は、土坑４基、溝６条、ピット多数である。検出した遺構のうち、南北方向の溝５条と、同じく南北方向に筋を通すピットは、畑地の棚を支えるために掘られたものである。出土遺物には弥生時代の土器と鎌倉時代の瓦器があるが、いずれも小破片で、その他、石鏃が出土した。

発掘区の基本的な層序は、暗灰色土（表土・約15cm）の下層に茶灰色粘質土（約５cm～30cm、西から東に向けて厚くなる）が堆積し、これを除去した黄褐色土層面が遺構検出面となる。なお、新期遺構は表土下から掘り込まれている。遺構検出面は南西側がもっとも高く標高27.5ｍを測り、北東方向に向かって緩く傾斜する。北東部での検出面の標高は26.5ｍである。

３　遺構と遺物

土坑

１号土坑（図版２、第６図）

発掘区の北東部で検出した。平面プランは長円形で、規模は長さ3.0ｍ、幅1.35ｍ、深さ1.1ｍを測る。４～９層は一気に埋め戻しをおこなっており、その後に掘りなおしをしている（１～３層）。壁面には内側に傾斜するテラスがあるものの、規模や横断面の形状がＶ字状となることなどから、落とし穴として機能した可能性もある。ただ、１～３層がこの土坑の掘りなおしであるならば落とし穴とするには疑問も残る。

２号土坑（図版２、第６図）

１号土坑の北側で検出し、北側は後世の段造成によって削平されている。平面プランはコの字形を呈する。規模は東西長3.35ｍ（下端幅は0.9ｍ）、南北長2.2ｍ、深さ0.5ｍを測る。北側に張り出した部分の幅は0.6～0.7ｍ（下端幅は0.35～0.4ｍ）を測る。底面は北側に向かってわずかに傾斜する。埋土は南壁際の５層とそれ以外の層が区別される。１～４層は掘りなおしと考えられる。

３号土坑（図版２・３、第６図）

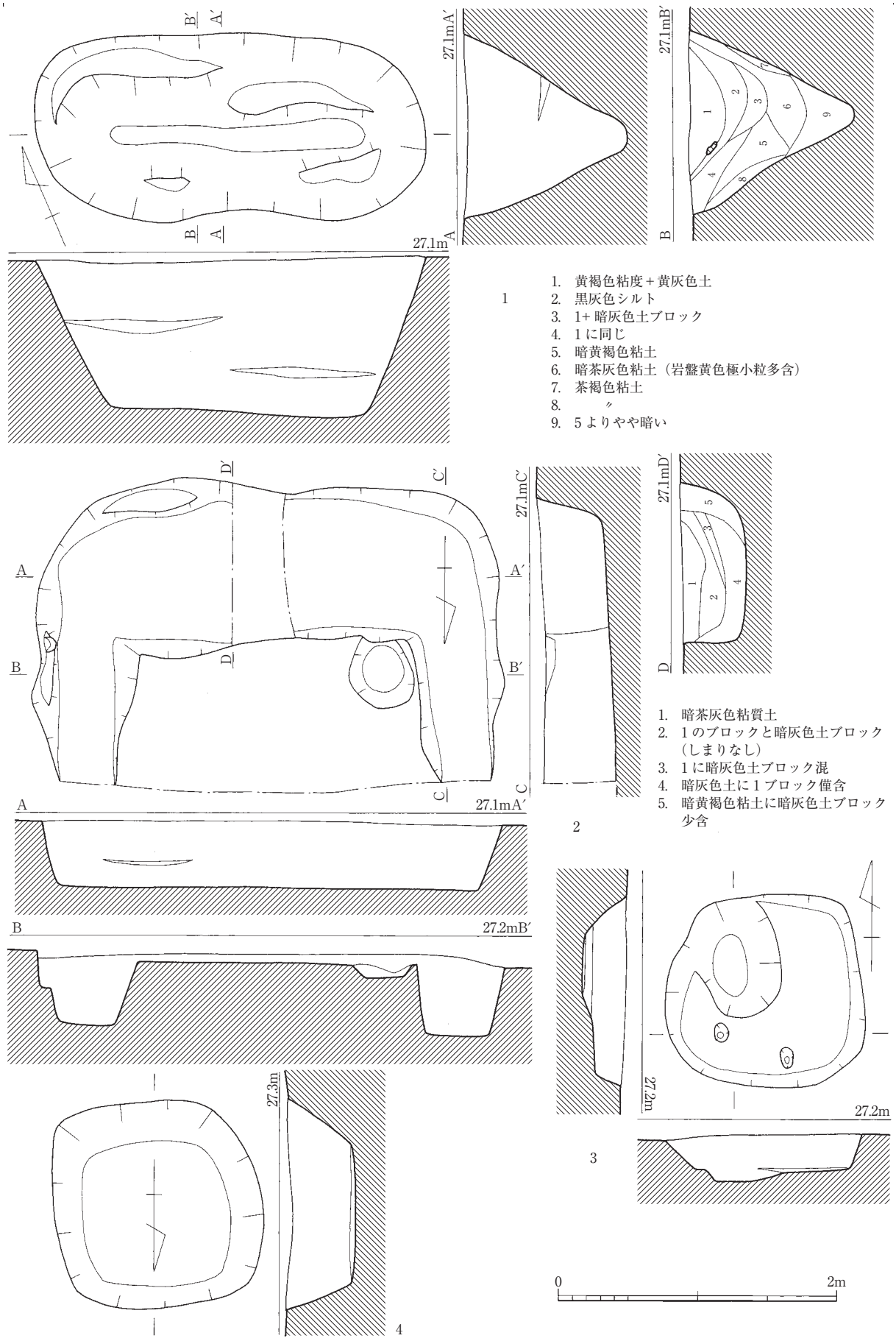
１号土坑の西で検出した。平面プランは隅丸方形を呈する。底面はフラットで北東側は長円形状に一段深くなる。規模は長さ･幅とも1.4ｍを測る。深さは0.3ｍを測る。埋土は暗灰色粘質土。

４号土坑（図版３、第６図）

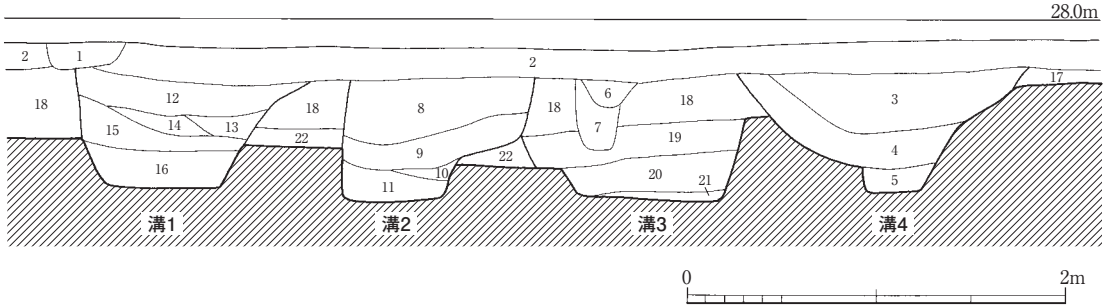
発掘区の中央南壁寄りで検出した。平面プランは隅丸長方形を呈する。底面はフラットである。規模は1.5ｍ×1.5ｍ、深さ0.45ｍを測る。

出土遺物（図版４、第８図）

１～３は弥生土器である。１は高杯。口縁端部を内側に屈曲させ、端部をまるく収める。２も高杯の脚部と考えられる。３は鉢の口縁部。端部を外方に屈曲させる。調整は内外面とも横方向



第6図　1～4号土坑実測図（1/40）



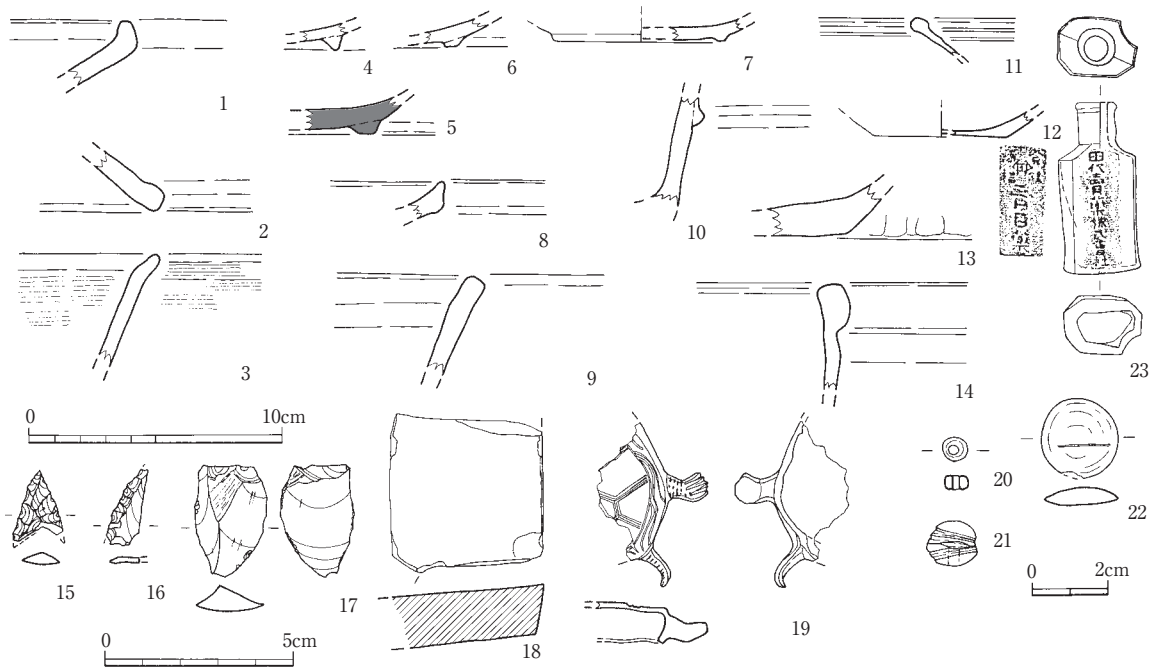
第７図　１～４号溝土層図（1/40）

1　黒灰色土(ピット)
2　暗灰色土(表土)
3　暗黄褐色粘土と暗灰色土ブロック(前者多)
4　〃　(後者多)
5　3に同じ(しまりなし)
6　1と同じ(籾殻を埋める)
7　1に暗黄褐色ブロック少含
8　4に同じ
9　暗灰色土
10　暗黄褐色粘土
11　3に同じ
12　3に同じ
13　9に同じ
14　4に同じ
15　9に暗黄褐色粘土ブロック少含
16　3に同じ
17　茶灰色粘質土
18　17に同じ
19　3に同じ
20　4に同じ
21　暗灰色粘土
22　3に同じ

のハケ。１・２は４号土坑、３は３号土坑から出土した。

４は土師器椀。断面三角形の高台を貼付する。調整は不明。５は須恵器の高台部分である。色調は灰白色を呈し、焼きがあまい。調整は内面がナデ、外面はヘラケズリか。６・７は瓦器椀の高台部。ともに内面はミガキを施す。８・９は瓦質土器の鉢の口縁部。８は口縁端部をつまみあげる。10は瓦質土器の火鉢。体部下半から底部にかけての破片で、体部に断面三角形の突帯を貼付する。８は２号土坑から、９・10は溝３、その他は包含層から出土した。

11～14は陶器である。11・12は土瓶。11は口縁部で端部は玉縁状に肥厚する。外面には三条の線が白色釉で描かれる。胎は灰色で口縁部から内面にかけては露胎となる。釉は緑味を帯びた灰色である。12は底部で外面は露胎となる。胎は淡茶褐色で、内面に透明釉を施す。内面には細かな貫入がみられる。14は片口鉢の口縁部。口縁部を玉縁状に肥厚させる。胎は淡茶褐色で、透明釉を施す。12が２号土坑から出土したほかは包含層からの出土。



第８図　鳥越下屋敷遺跡出土遺物実測図（1/3、1/2、2/3）

15・16は石鏃。1は長さ1.8cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重量0.5ｇを測る。16は剥片鏃の側縁部と考えられる。裏面も素材となる剥片面を残して縁部に加工を施す。17は縦長剥片の周縁部に使用のためと思われる刃こぼれが残る使用痕剥片である。長さ3.0cmを測る。いずれも姫島産の黒曜石製品。遺構検出面から出土した。

18は瓦質の製品。調整はナデ。色調は黄褐色を呈する。全形は知れない。

19は亀形の銅製品。右半身が残る。体部には亀甲がある。前脚には水掻きを持つ。皮膚の質感もあり、写実的に表現されている。後脚は泳いでいる姿を現したものか。裏面には煤状の黒色粒子が付着する。飾り金具の一種と思われる。長さ6.4cm。3号溝から出土した。

20は径3mmのガラス玉。わずかに緑味がかった薄いブルーを呈する。2号土坑から出土した。

21はガラスの玉に径3mmの心棒が中央部付近まで挿入されている。ガラスは風化し、黄白色を呈する。3号溝から出土した。22は円盤状のガラス製品。3号溝から出土した。23はガラス製の薬瓶である。口径1.6cm、幅3.0cm、高さ6.7cmを測る。体部は横断面が八角形になるが、一辺にはスポイドを装着するための凹みが造りつけられる。体部下半は部分的に歪む。色調は薄い青色を呈する。表面には会社のエンブレムの下に製品名の「三日目薬」の文字がある。裏面に型押しされた「田代賣薬株式會社」は、1847年（弘化4）創業の久光製薬に引き継がれる。表土から出土した。

4　まとめ

これまで、鳥越下屋敷遺跡が立地する中川の谷筋の上流域では、圃場整備や道路整備に伴ういくつかの発掘調査が実施されている。そのうち、鳥越園田遺跡では中世の溝状遺構やピットが、鳥越今井野遺跡では中世期の小規模な掘立柱建物や溝状遺構などが確認されている。今回の調査では、弥生時代後期から現代に至る遺物が出土しているが、3号土坑が弥生時代と考えられるほかは現代の遺構であった。後世の削平が著しいものの、出土遺物からみると弥生時代、奈良時代、鎌倉時代の小規模な集落が存在していたとみられる。

また、当該地の一帯には740年（天平12）に起きた藤原広嗣の乱を平定したとされる「上毛郡擬大領紀宇麻呂」の館が存在したとの伝承があるが、関連する遺構等については今後の調査の進展のなかで明らかになっていくであろう。

Ⅳ　大村湯福遺跡

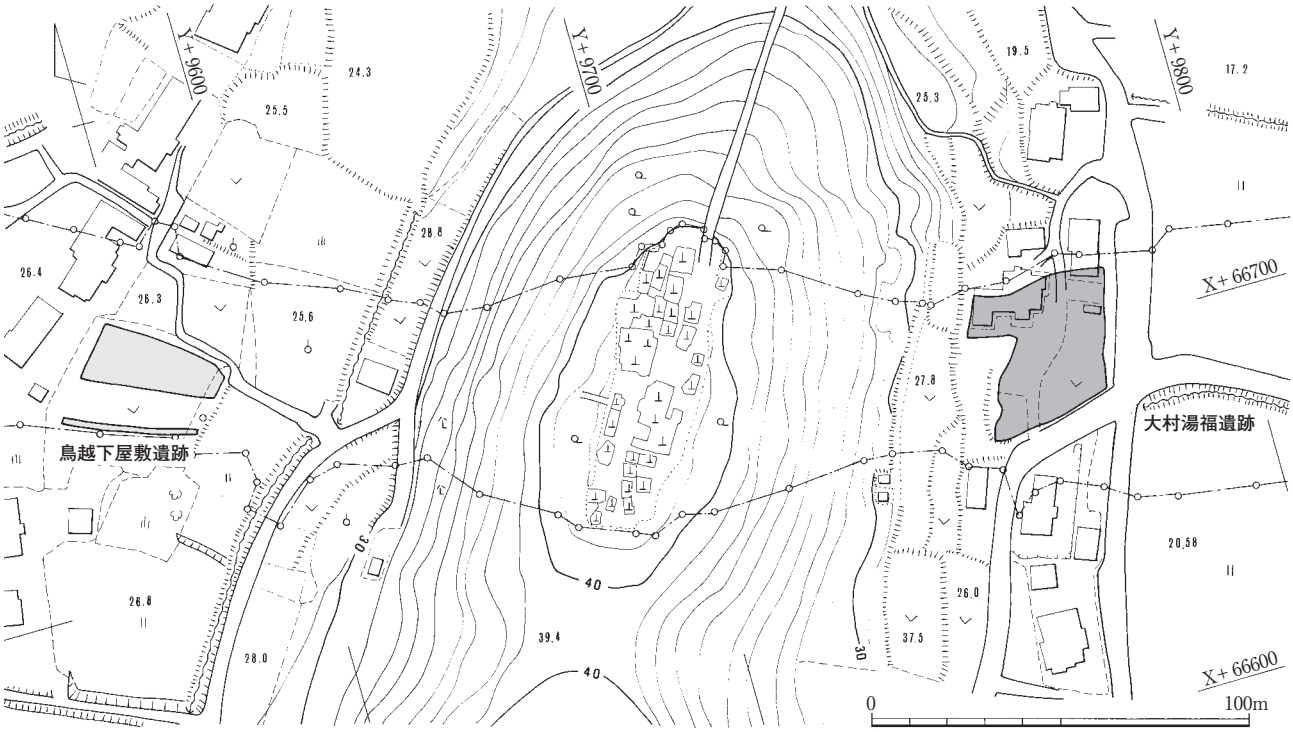
1　調査の経過

大村湯福遺跡は、国見山（637.8 m）から北東に延びる丘陵の先端部付近の東麓に立地する。中津工事事務所第 20 地点にあたり、豊前市大村 205-1、216、217-1、220-2 に所在し、現状は宅地および耕作地として利用されてきた。現地は鈴木谷の地名で呼ばれており、天平 12（740）年の藤原広嗣の乱にも関わった上毛郡擬大領の紀宇麿の屋敷があったとの伝承が残っている。しかしながら、これまで福岡県教育委員会および豊前市教育委員会が行なった分布調査の結果では埋蔵文化財包蔵地としては認識されていなかった。

西日本高速道路株式会社中津工事事務所からの依頼を受け、平成 24 年 3 月 7 日に九州歴史資料館が実施した試掘調査の結果、時期は不明ながらも遺構の存在が確認されたため、1,100m^2 について今回発掘調査を実施することとなった。地形的には丘陵東麓にあたり、調査区西側には急傾斜で丘陵が迫り、逆に東側の水田よりは一段高いが、遺構面自体は比較的平坦であり西側の一部を除いて標高 20.0 ～ 21.0 m間に納まる。

2　調査の概要

調査は、地形的な制約から高速道路用地内で排土を移動することが困難であったため、調査対象地を東西に二分して排土を移動しながら二工程で実施した。西半部は平成 24 年 8 月 16 日から重機による表土掘削作業を開始し、9 月 4 日から作業員による手作業での遺構検出および掘削作業を行なった。9 月 10 日には座標に基づいて杭を設定し、測量・実測作業を開始した。遺構の掘



第 9 図　大村湯福遺跡遺構配置図（1/2,000）

削がほぼ終了するのを待って、9月27日にラジコンヘリによる空中写真撮影、10月3日には残りの実測作業も終了している。翌10月4日から再び重機を投入して西半部の埋め戻しを行ないながら東半部の表土掘削作業を行ない、10月10日から手作業による検出・掘削作業、11月15日に空中写真撮影、11月20日に記録類を含めた現地での全ての作業を終了し、その後機材類の撤収等を行なった。

今回の調査で検出した主な遺構は、中世の井戸状の土坑1基、時期不明の土坑10基以上、近世の溝3条以上などである。

3　遺構と遺物

土坑

今回の調査で検出した土坑状の掘り込みは10基以上検出した。このうち明らかに現代のものは攪乱として除外したが、それ以外にも近現代に属すると思えるものは多い。ここでは出土遺物や埋土の状況から近世以前に属することが確実と考えられる3基について記述する。

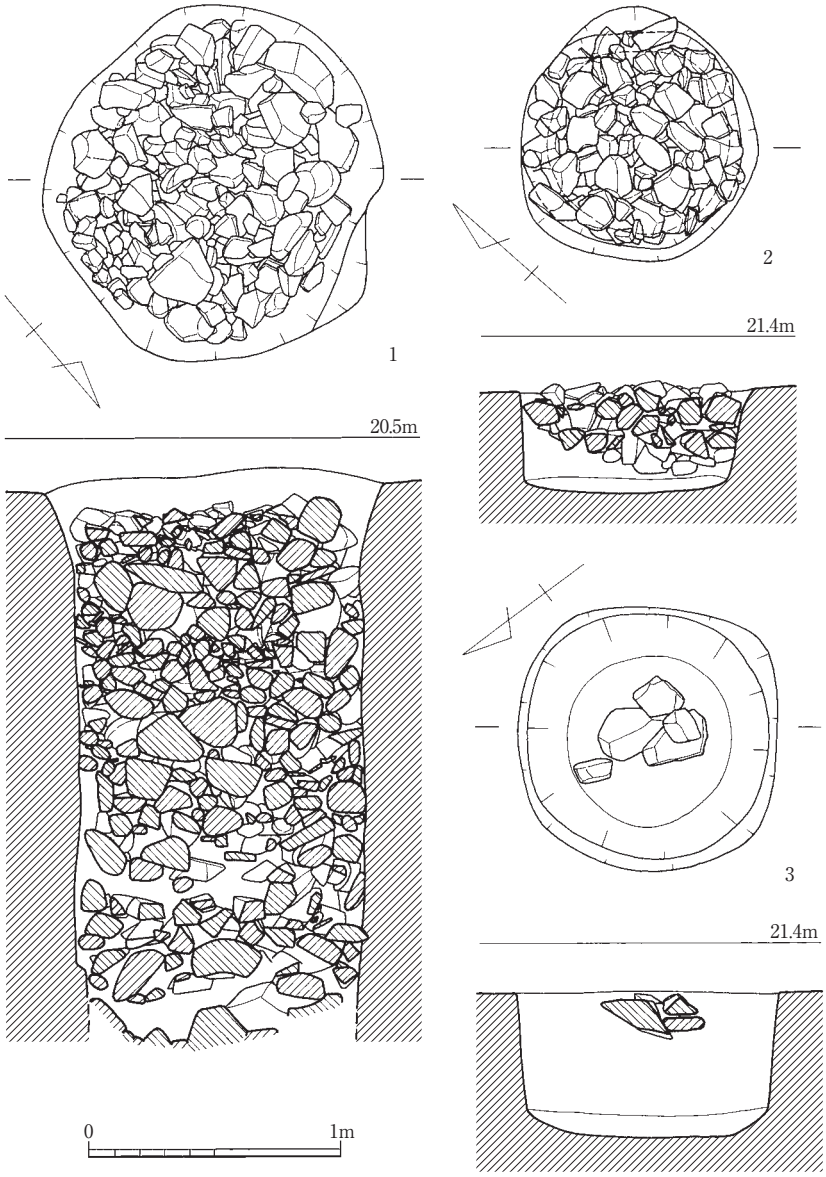
第10図　大村湯福遺跡遺構配置図（1/300）

1号土坑（図版7、第11図）

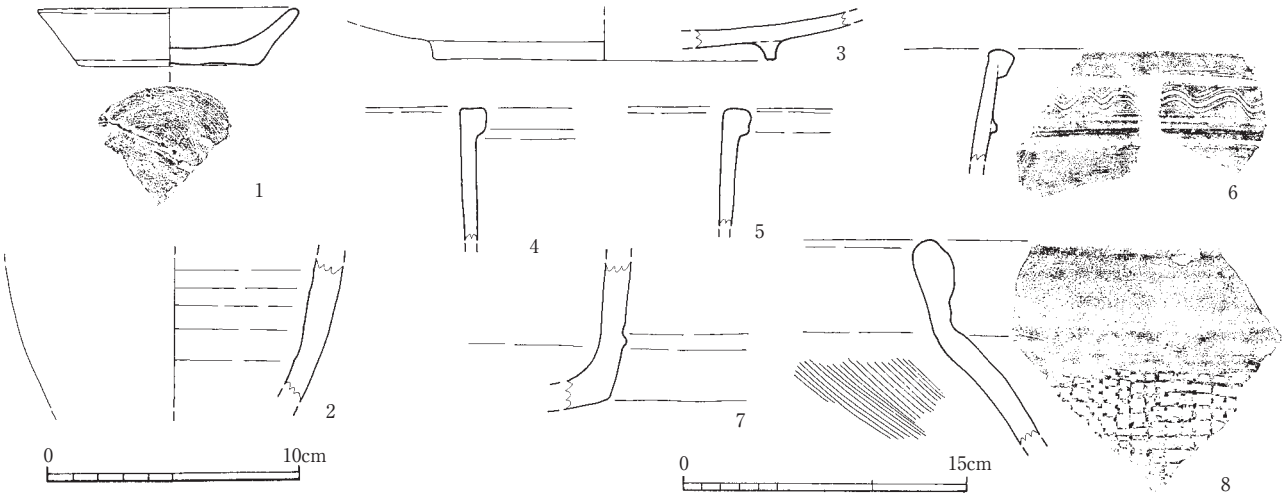
調査区北東部で検出した平面円形の土坑である。内部には10～30cm大の石が充填されており、ほぼ自然石であるが五輪塔の火輪等も出土している。深さ2.2ｍまで掘り下げたところで危険と判断して以下の掘削を中止した。平面形はほぼ円形で、上縁部で径1.3～1.5ｍ、中位で1.1ｍ程度となる。底部まで検出していないものの、遺構の形状から判断すると井戸跡である可能性が高い。

出土遺物（図版10、第12図）

1は土師器皿で、復元口径10.2cm、器高2.2cm。2は陶器壺であろう。器壁は厚く露胎。3は土師質土器の盤と考えられる。復元高台径18.2cm。4～8は瓦質土器である。4～7は火鉢。4・5は口縁部外面を肥厚させる。6は口縁部下の区画に櫛状工具による波状文を施文する。7



第11図　1～3号土坑実測図（1/30）



第12図　1号土坑出土遺物実測図（1・2：1/3、3～8：1/4）

は体部下位に１条の突帯が巡る。８は甕で、体部外面には格子目の叩打痕が残り、内面はハケメ後ナデ調整。

２号土坑（図版８、第 11 図）

調査区中央西寄りに２・３号土坑が 0.5 mの間隔で２基並んだ状態で検出し、２号土坑はその北西側の土坑である。形状は平面円形で、上縁部で径 0.9 ～ 1.0 m、底部で 0.7 m、深さ 0.4 m、内部には５～ 20cm 大の自然石が充填されていた。図示できる遺物の出土はない。

３号土坑（図版８、第 11 図）

２号土坑の南東側にある。平面形状は円形であり上部で径 1.05 m、深さ 0.55 m。内部には上位から 15 ～ 30cm 大の自然石数点が出土した。遺構の埋没の過程で混入したものと考えられる。図示できる遺物の出土はない。

溝

１号溝（図版９、第 10・13 図）

調査区東寄り部分を南北に縦断する。調査区内で 36.5 m分検出し、南側はさらに調査区外に延び、北側については現状では調査区境付近で途切れている。ほぼ直線的であるが、形状は大きく乱れており、幅は一定せず両端で 0.5 m程度だが中央部付近では西側が広がって 3.5 m程になる。深さは最大でも 0.2 m程度である。調査区南半部で２号溝および３号溝とほぼ直角に交わる。また、１号溝の２・３号溝と交差する部分を中心に石列を 15 m分検出している。ほとんどは溝の西側のみに存在し、10 ～ 60cm 大の不揃いな自然石を東側に面を揃えて粗く並べているが、南側 5.7 m分では東側にも同様の石列が存在しており、内法は幅 40 ～ 50cm 程度になる。この石列は、後述する３号溝の石敷の上位に存在している。

出土遺物（図版 10、第 14 図）

１は陶胎染付の火入である。体部外面から口縁部内面まで施釉し、釉は灰色で貫入が入る。内面は釉が垂れた痕跡が残るが、本来露胎であろう。２は土師質土器鍋で、体部外面は火を受けたためか赤変しており、また内面は器面が剥離している。３は瓦質土器甕で、底径 17.0cm。

２号溝（図版９、第 10・13 図）

調査区の南半部にある東西溝で、東側は調査区外に延び、すぐ南側の３号溝とほぼ平行して並んでいる。19 m分を検出し、中央やや東側で１号溝と直交し、この東側で遺構の形状が乱れている。西側部分で幅 1.3 m、深さ 0.2 m程度、東端部で幅 2.3 m、深さ 0.5 m、中央東の最大部分が幅 3.7 m、深さ 0.4 ～ 0.5 m。交差部分から東側は当初の遺構検出作業では周囲の遺構面との区別が明瞭でないために発見できず、１・３号溝等を掘り進める過程で検出した。したがって両者の切り合い関係は明瞭ではないが、３条の溝の埋土は基本的に灰色～灰褐色粘質土であるのに対して、２号溝の東半部では褐色粘質土で明らかに相違し、この部分が最も古く埋没しているものと考えられる。

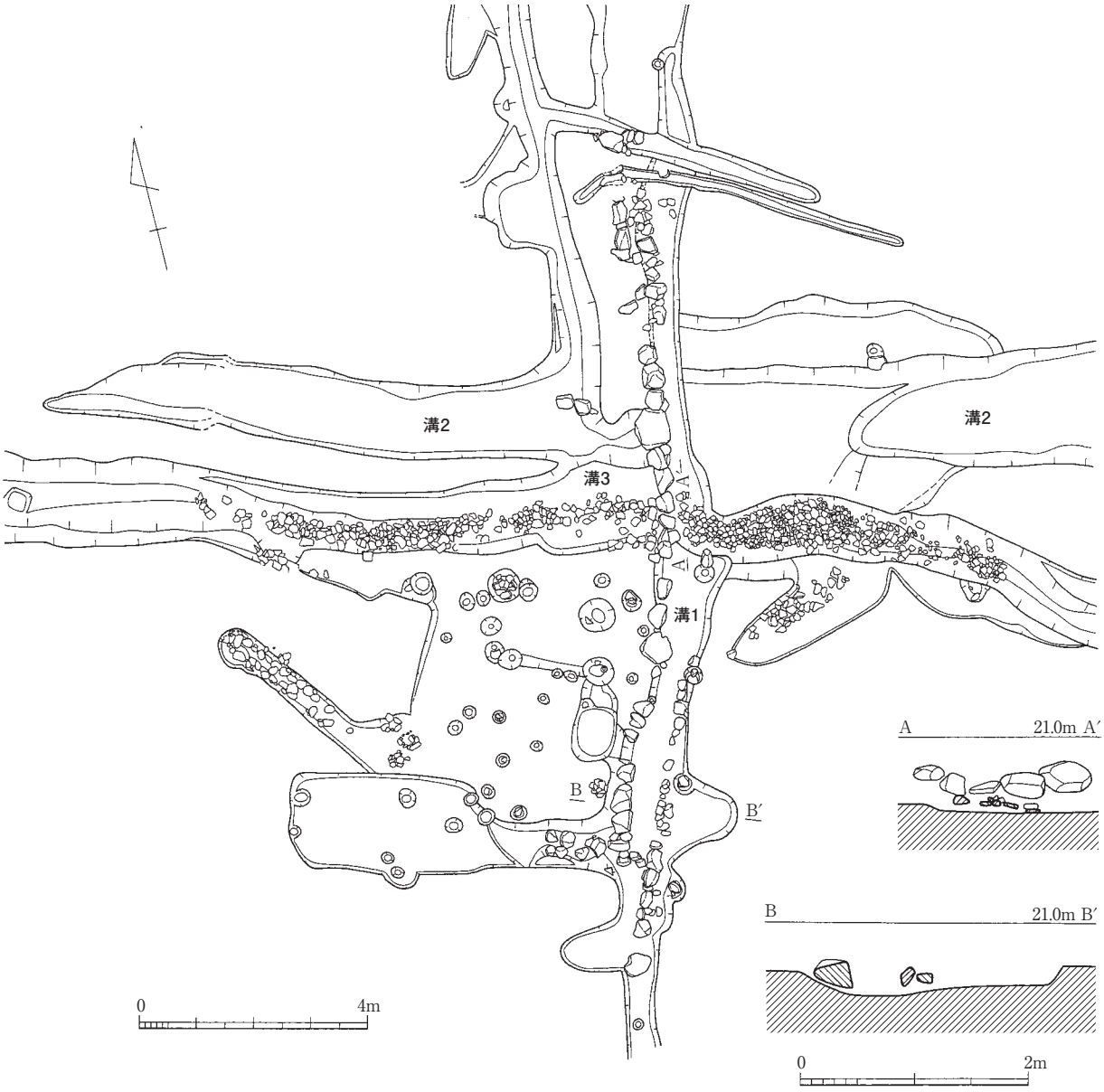
出土遺物（図版10、第14図）

４～８は陶器椀である。４・６・８は褐色釉が掛かるが、４は全面に施釉しており、６は釉の風化が目立ち、畳付部のみ釉を掻き取り、８は外面下位は露胎である。４は胎土が茶灰色の炻器質であり、復元口径12.0cm、高台径5.4cm、器高6.2cm。５は全面白化粧土を掛け、外面体部上位は波状刷毛目を施す。７は胎土が良好であるいは焼成不良の磁器の可能性もある。高台部以外に白色釉を掛け内面見込は蛇の目状に釉剥ぎする。

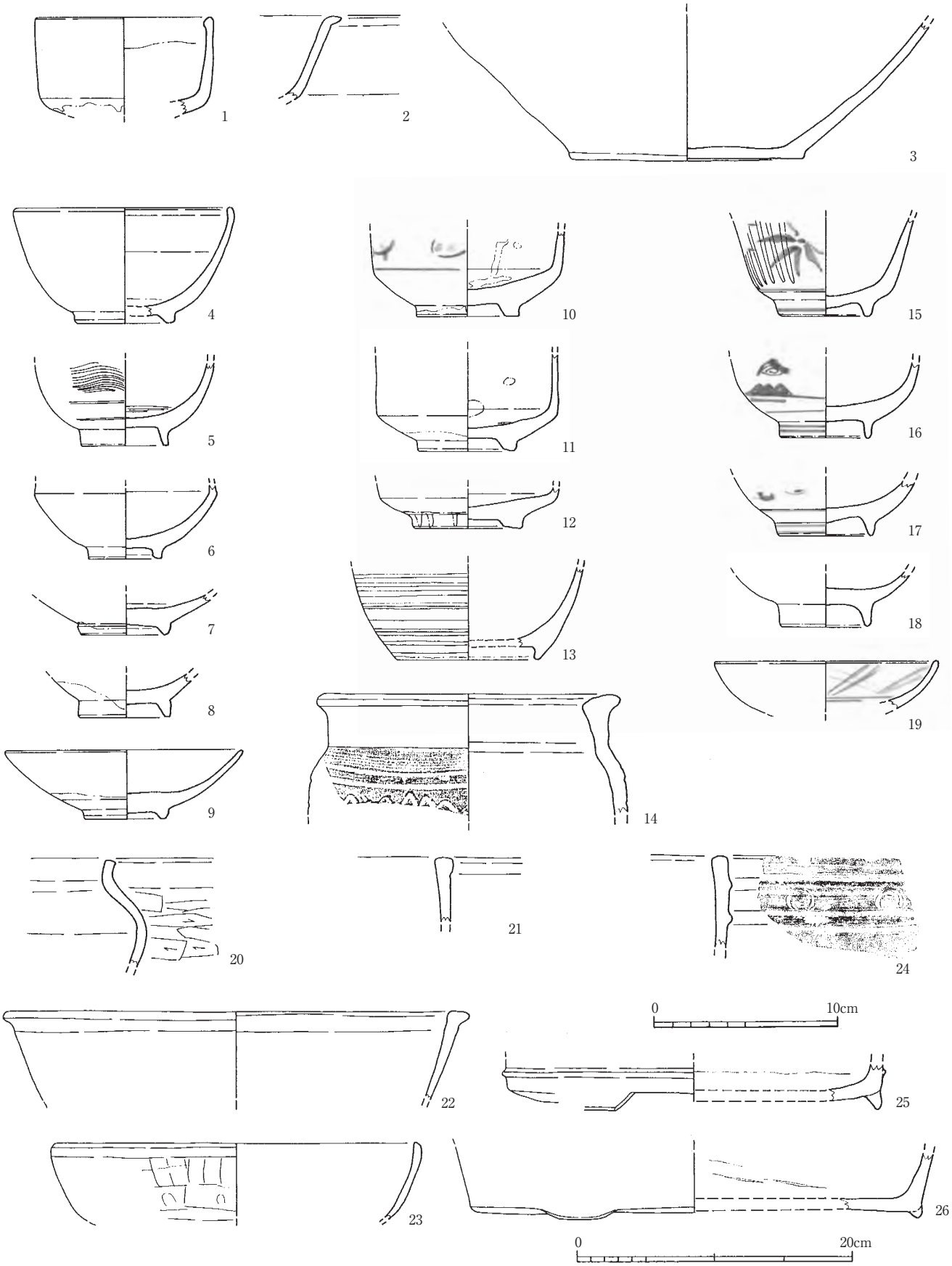
９は陶器皿で、内面と口唇部までを銅緑釉、体部外面には透明釉を掛け分け、内面見込みは蛇の目釉剥ぎを行なう。復元口径12.9cm、高台径4.4cm、器高3.7cm。

10～12は陶胎染付の火入。３点とも体部が直立する器形で、外面のみ灰色釉を掛け貫入が目立ち、高台部と内面は露胎である。10は文様が残る。11の釉はややは緑がかる。

13は瓶類で、体部は球形に近く、刳り底となる。畳付部以外の外面に施釉し、体部は白化粧土



第13図　１～３号溝実測図（1/120、1/60）



第 14 図　1・2 号溝出土遺物実測図（1・4 ～ 19：1/3、2・3・20 ～ 26：1/4）

の横刷毛目の上に透明釉を掛ける。底径 7.8cm。

14 は陶器の小型甕で、肩部には 2 条の沈線と波状文が見られる。全面に光沢のない褐色釉を掛ける。復元口径 16.2cm、肩部径 17.2cm。

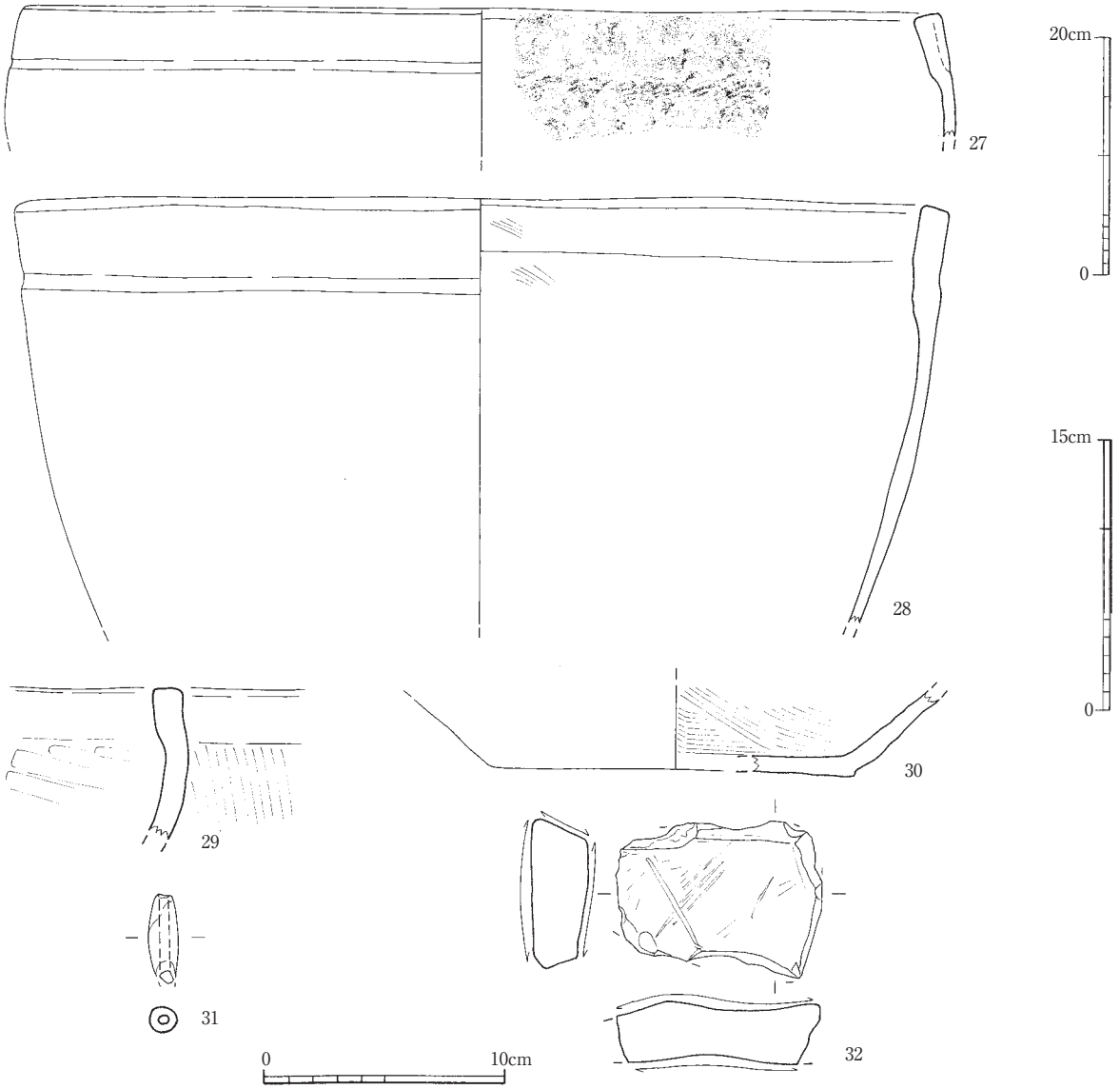
15 ～ 18 は染付椀である。15 は体部が直線的に立ち上がり、外面に鎬が入り、天目形椀と思われる。釉は全面に施すが高台畳付部のみ釉剥ぎし、内面は青磁釉であろうか。また外面は風化が目立つ。文様は笹文か。16 ～ 18 は体部に丸味を持ち、高台畳付部の釉を剥ぎ取る。16･17 は胎土が灰色でやや粗く、呉須は 16 が暗緑灰色、17 が黒色に発色し、17 は釉が白濁して厚く掛かる。粗製の磁器であろう。

19 は染付皿で、格子文を描き呉須は暗緑灰色に発色する。復元口径 12.0cm。

20 は瓦質土器釜であろう。口縁部と体部の境が不明瞭で、体部外面はヘラケズリ調整で仕上げる。

21・22 は瓦質土器鉢。２点とも口縁部外面を肥厚させ、上面に平坦部をつくる。22 は復元口径 34.0cm。

23 は土師質土器焙烙で、口縁部をわずかに内彎させる。体部外面はヘラケズリ調整で、器面は



第 15 図　2 号溝出土遺物実測図（27：1/6、28 ～ 30：1/4、31・32：1/3）

黒変しており、口縁部外面には煤が付着している。復元口径 27.0cm。

24 ～ 26 は瓦質土器火鉢。24 は口縁部下の２条の突帯の間にスタンプ施文する。25・26 は底部に脚を有する。

27 ～ 30 は瓦質土器甕である。27 は大形品で内面は青海波状の当具痕が残り、後ナデ調整。30 はハケメ状の板状工具によるナデ調整、それ以外はナデ調整で仕上げる。27 は復元口径 76.6cm、28 は 51.8cm。

31 は土錘で、端部を欠失するが、現状で長さ 3.6cm、径 1.2cm、重さ 4.0g。

32 は砥石。砂岩で、４面を砥面として使用した痕跡がある。

３号溝（図版９、第 10・13 図）

２号溝のすぐ南側にあるこれとほぼ平行する東西溝で、調査区東寄り部分で１号溝と交差し、東側調査区境を越えてさらに調査区外に延びる。23 m分を検出し、幅 1.2 ～ 1.5 m、深さは最大 0.3 m程である。溝の両端を除く約 14m 分の溝底には 10 ～ 20cm 大の自然石が敷き詰められていた。遺構検出の段階では１・３号溝は埋土も灰色～灰褐色と同様であり先後関係は不明瞭であったが、３号溝の石敷きが直交する１号溝の石列の下位にあることから、３号溝が先行すると考えられる。

出土遺物（図版 11・12、第 16・17 図）

１～４は陶器椀。１は全面に透明釉を掛け、高台畳付部のみ掻き取る。復元口径 12.0cm、器高 7.6㎝。２は高台周辺以外の内外面に白色の釉を施すが、釉は粗く光沢もなく、胎土も含めて焼成不良である。復元口径 11.7cm、器高 6.8cm。３・４はいずれも白化粧土によって、３の体部内面は打刷毛目、見込は同様の工具で菊花状に、外面下位は横刷毛目で中位の文様は九曜か。４は内外面とも洗練された波状刷毛目を施す。

５は陶器皿。内面と外面上位に施釉するが、灰色～灰白色化しており焼成不良のものである。

６は陶器鉢。底部は刳り底で、内面と外面上半部に褐色釉を施す。復元口径 11.3cm、器高 5.9cm。

７も鉢であろうか。内面のみ黄褐色釉を掛け、外面は露胎となる。

８は陶器火入であろうか。残存部では内外面とも露胎であるが、暗緑色釉が飛散した痕跡がことに内面に多く残る。

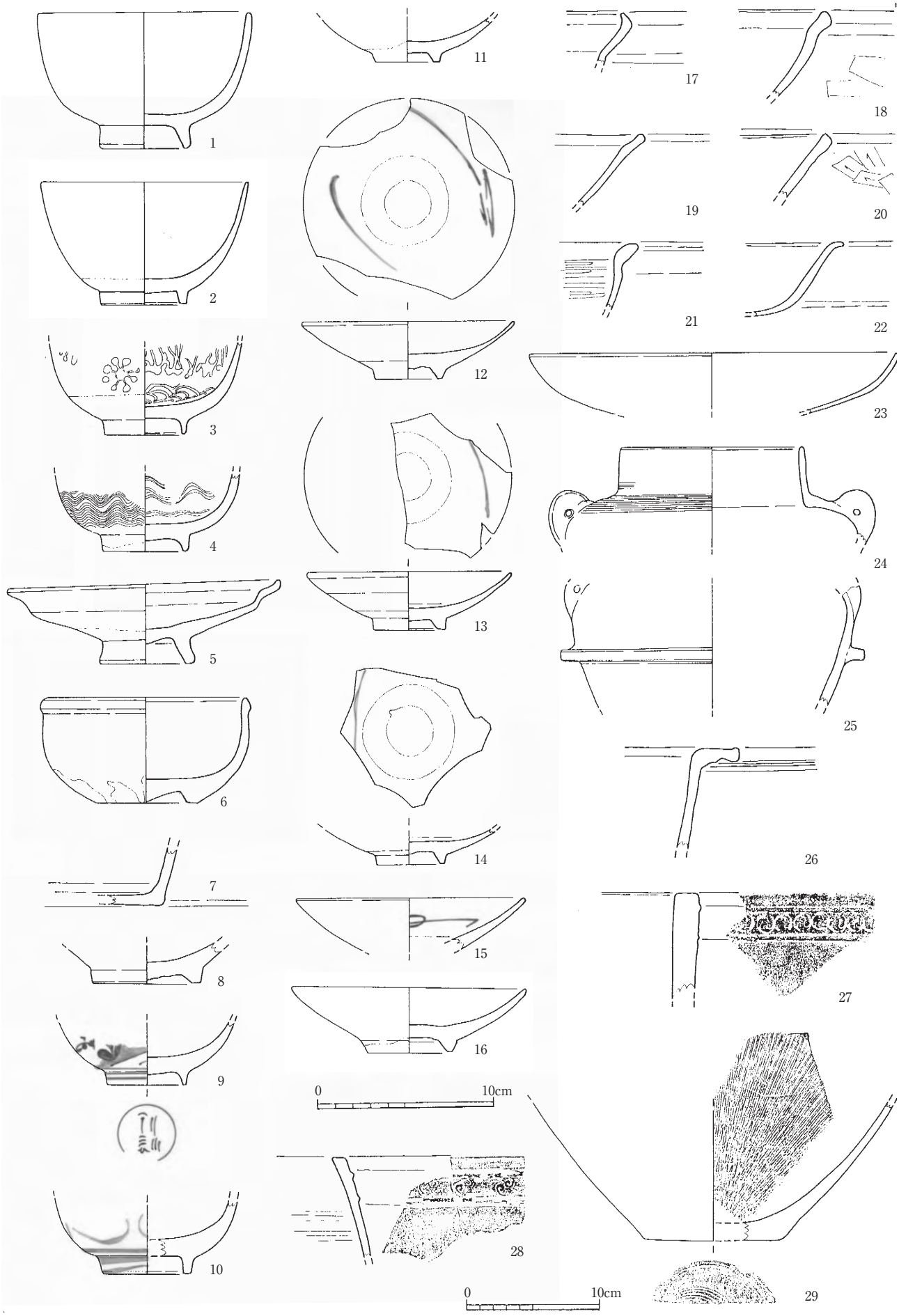
９・10 は染付椀で、９はいわゆる「くらわんか椀」、10 は陶胎染付か。

11 ～ 16 は磁器皿で、6 点とも見込を蛇目釉剥ぎする。11 ～ 14 は呉須はやや緑がかって発色する。12 ～ 14 は文様からセットかと思われる。12 は口径 11.9cm、器高 3.2cm、13 が復元口径 11.5cm、器高 3.2cm。15・16 は胎土が灰白色で、釉は黄色がかった白色であるが焼成が悪く光沢がない。2 点はやはりセットである可能性がある。15 は復元口径 12.8cm、16 は口径 13.0cm、器高 3.6cm。

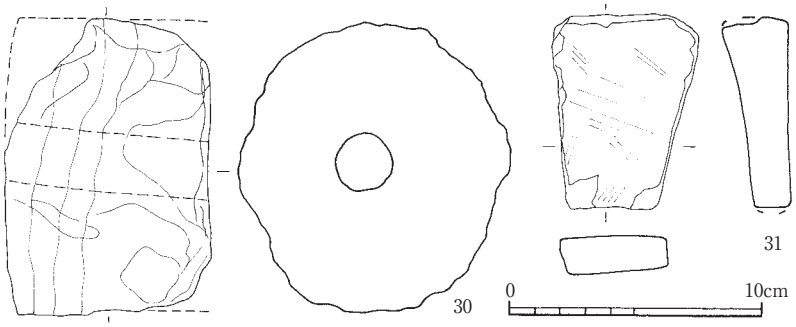
17 ～ 22 は土師質土器鍋で、すべて外面には煤が付着する。18・20 は体部外面にヘラケズリ調整が明瞭に残る。19 は体部外面上半部はナデ調整、下半部はヘラ・22 ケズリ調整か。21 は体部外面をヘラケズリ調整の後ヨコナデ調整で仕上げ、内面にはヘラミガキ状の調整痕が残り、比較的丁寧な作りで、焼成も良好である。

23 は土師質土器で外面全体に煤が付着しているが、器形的に浅く、焙烙であろう。内面ナデ調整、外面ヘラケズリ調整。復元口径 28.0cm。

24・25 は瓦質土器釜である。24 は口縁部が高く立ち上がり、体部にはカキメ状の調整痕が残る。



第16図　3号溝出土遺物実測図①（1～16：1/3、17～29：1/4）



第17図　3号溝出土遺物実測図②（1/3）

復元口径13.9cm。25は軟質で器面の風化が激しく、外面には煤が付着する。復元体部径21.4cm。

26は瓦質土器鉢であろう。全面ヨコナデ・ナデ調整で仕上げる。

27・28は瓦質土器火鉢で、27は器壁が厚く口縁部が直立し、角火鉢かと思われる。28は薄く内傾し、焼成が土師質である。2点とも口縁部下の2条の突帯の間に二つ巴文をスタンプ施文する。

29は肥前系の摺鉢で、底部は糸切りで内面全面に櫛状工具による細かい条線が重複しながら密に入る。復元底径10.4cm。

30は鞴羽口である。外径が11.5cmと大形であるのに対して内径は2.2cmと小さい。先端部は高熱のため黒変して溶融が若干見られ、また鉄滓状の融着物がある。鍛冶に関わる遺物であろう。

31は砥石で、石英斑岩製。長辺4面と、小口部の一部にも砥面として使用した痕跡がある。

4号溝（図版7、第19図）

調査区東端部にある南北溝で、調査区内で約20m分を検出し、幅30～50cm、深さ10cm以下の小溝である。現状では両端部は形状が乱れて広がり東側調査区外に延び、全体はわずかに弧状を呈する。図示できる遺物の出土はない。

4　まとめ

今回の調査で検出した主な遺構は、土坑10基以上と溝4条などであった。現地は現在まで宅地などとして利用されてきており、明らかに現代の物が出土する掘り込みは攪乱として除外したが、それ以外に一応遺構としている中にも近現代に属するものも含まれているものと思われる。

このうち、井戸跡かと思われる1号土坑は出土遺物からは概ね16世紀代に納まりそうである。一方1～3号溝については16世紀から18世紀前半までの遺物が出土しており、比較的長期間存続したものと思われる。遺構の性格については、立地や遺物の組成などから、屋敷地あるいはその周縁の施設である可能性が高いが、今回の調査範囲では建物跡やこれに直接伴う遺構を検出することが出来なかった。1～3号溝も用途は不明瞭で、区画溝といえるものでもない。

大村湯福遺跡一帯は鈴木谷と呼ばれ、天平12（740）年の藤原広嗣の乱に加わったとされる上毛郡擬大領の紀宇麿の邸宅があったとの伝承が残る。しかしながら、今回の調査範囲では関連する遺構・遺物は発見されず、それに代わって中世末から近世前期のこの地の人々の生活の痕跡と土地利用の一端を確認することができたといえる。

Ⅴ　鬼木鉾立遺跡２次調査

１　調査の経過

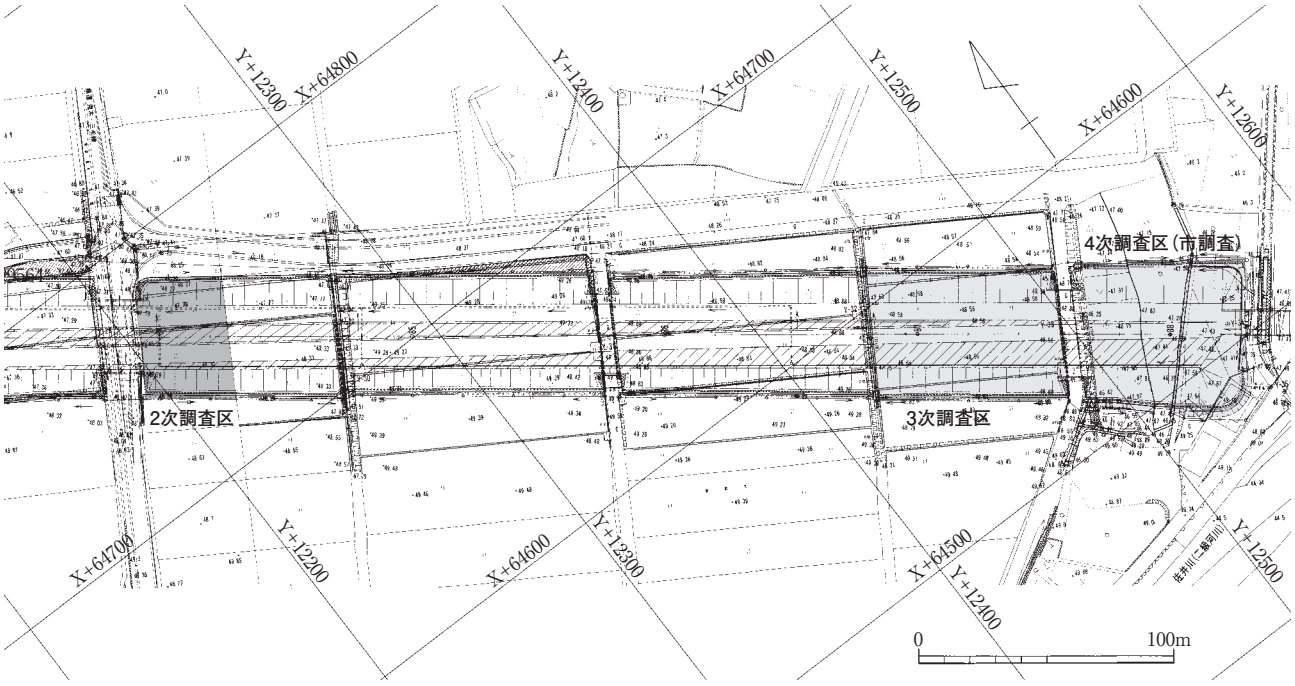
鬼木鉾立遺跡２次調査区は、中津工事事務所第 32 地点にあたり、豊前市鬼木 482 ～ 484 に所在する。佐井川と岩岳川に挟まれた標高 48 mほどの低台地上に立地し、現状は水田として利用されてきた。豊前市教育委員会が調査を行なった鬼木鉾立遺跡１次調査区は、今回の調査区の南東に隣接するが、奈良時代を中心とした掘立柱建物跡と溝等を検出しており、溝からは弥生時代の銅矛の耳が出土している。また、北東に接する久路土樋掛遺跡では奈良･平安時代の掘立柱建物跡、溝、木棺墓と、落とし穴状土坑等を検出している。

西日本高速道路株式会社中津工事事務所からの依頼を受け、平成 23 年 10 月 18・19 日に九州歴史資料館が実施した試掘調査の結果、文化財の存在が確認された箇所のうち県道鬼木・三毛門線沿いの 1,000m^2 について、鬼木鉾立遺跡２次調査として発掘調査を実施した。

２　調査の概要

調査は、平成 24 年４月 26 日から重機による表土掘削作業を開始し、５月 16 日から手作業による検出および掘削作業、７月５日にラジコンヘリによる空中写真撮影を行ない、８月３日に全ての作業を終了した。

遺構面は礫層に灰褐色～褐色土が入り込んだ土壌で、現地表面から 20 ～ 40cm で到達した。現



第 18 図　鬼木鉾立遺跡２次調査位置図（1/3,000）

第19図　鬼木鉾立遺跡２次調査遺構配置図（1/300）

地は水はけが悪く、また周囲からの湧水も激しかった。このため調査は連日ポンプ・手作業による排水作業と併行して行なわねばならず、梅雨の時期とも重なって水には悩まされた。
今回の調査で検出した主な遺構は、土坑10基以上、溝２条などだが、遺構に伴う遺物が僅少で、性格および時期の特定は困難である。

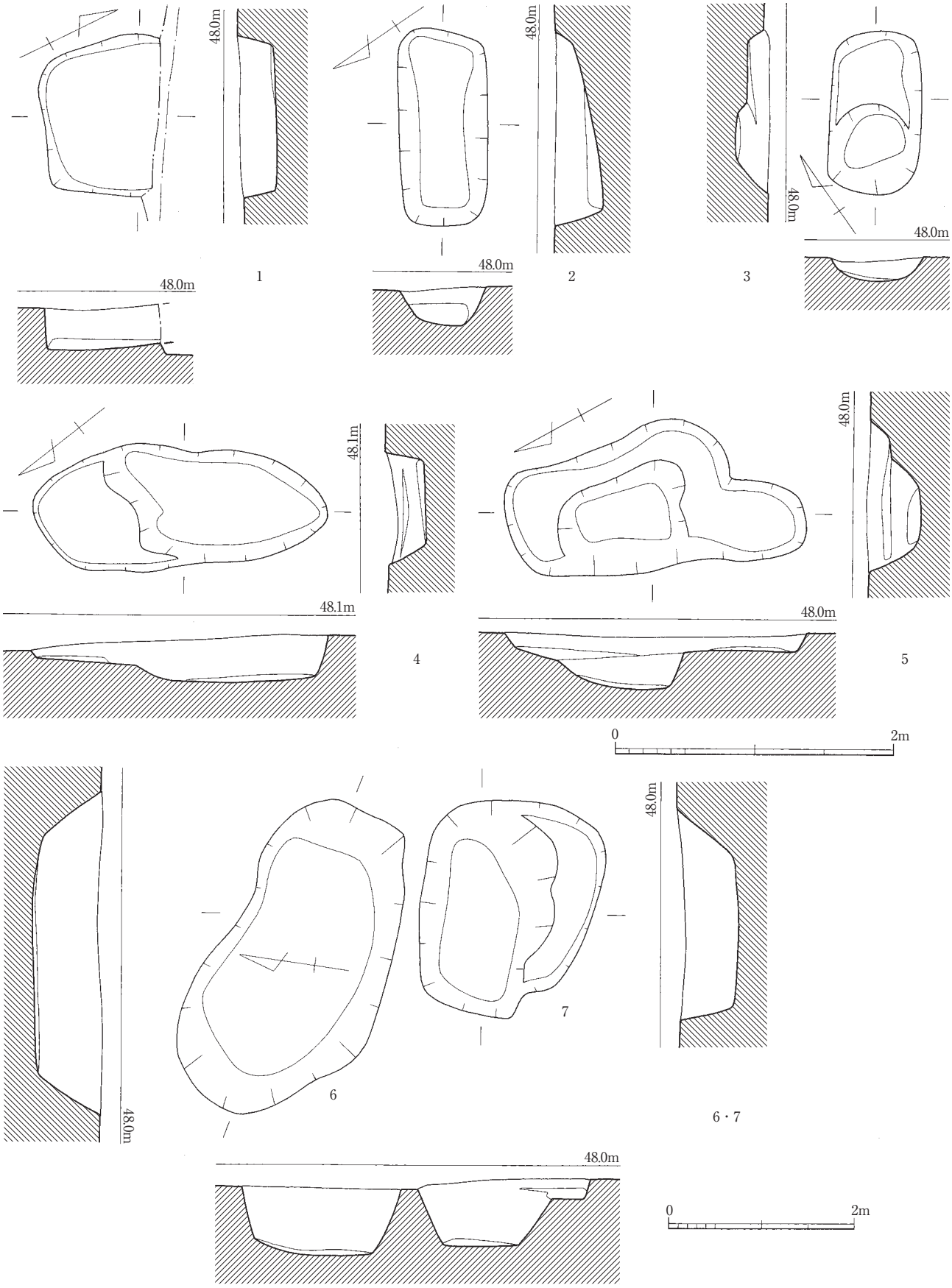
３　遺構と遺物

土坑

今回の調査では10基以上の土坑状の掘り込みを検出したが、何れも遺物の出土がなかった。埋土は暗褐色土あるいは黒褐色土で大差ないが、人為的でない可能性のあるものも含まれていると考えられる。ここでは形状等から判断して、ある程度確実に遺構と考えられるもの７基について記述する。

１号土坑（図版14、第20図）

調査区西寄り部分に１～３、５号土坑が比較的密集している。１号土坑はその中で最も東に位置する。遺構の北東側の過半部は現代の耕作に伴う削平で失われているが、平面形状は隅丸方形と考えられ、底面はほぼ水平となる。現状で1.2ｍ×0.9ｍ以上、深さ0.3ｍ。



第20図　1～7号土坑実測図（1/40、1/60）

２号土坑（図版 14、第 20 図）

１号土坑の南西にある。平面隅丸長方形で、底面は南東側が 20cm 以上高く傾斜する。長軸長 1.4 m、短軸長 0.65 m、深さ 0.1 ～ 0.35 m。

３号土坑（図版 14、第 20 図）

２号土坑の北にある。平面形状は丸味の強い隅丸長方形で、底部は南西側約半分がさらに一段 10cm 程低い二段掘り状になる。長軸長 1.2 m、短軸長 0.65 m、深さは最深部分で 0.25 m。

４号土坑（図版 15、第 20 図）

調査区ほぼ中央にある。平面形状はやや崩れた楕円形で、底部は南西側過半部が 10cm 以上低い二段掘り状になり、下段部底面はほぼ水平となる。長軸長 2.1 m、短軸長 0.9 m、深さは最深部分で 0.3 m。

５号土坑（図版 15、第 20 図）

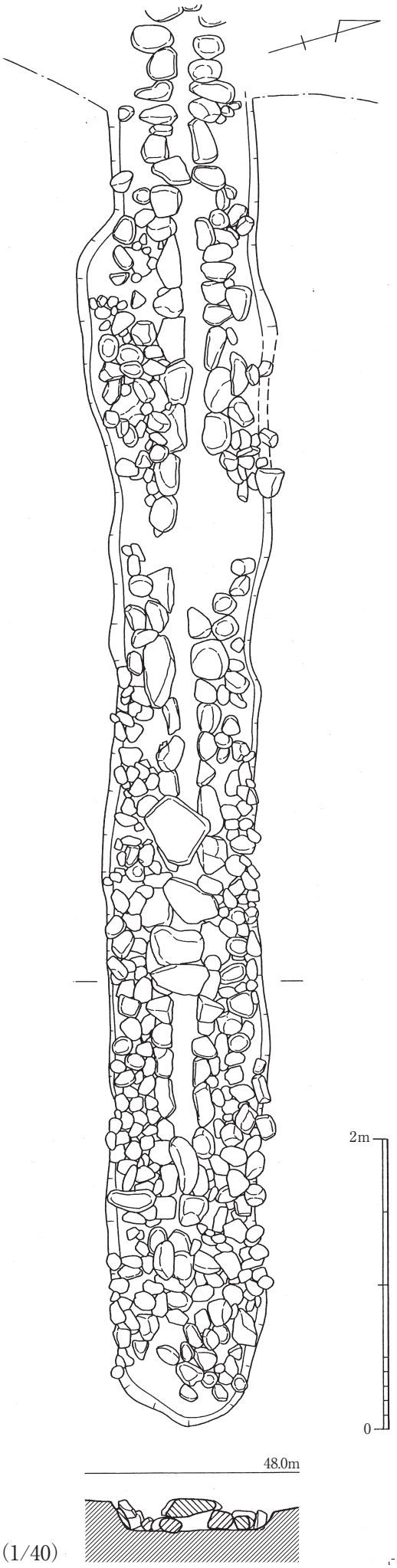
２号土坑の南にある。平面は隅丸長方形の南東側長辺中央部が広がった形状で、底部の一部が 25cm 程低い二段掘り状を呈し、上段底面は水平に近い。長軸長 2.15 m、幅は北東端部 0.75 m、中央部 1.05 m、南西端部 0.5 m、深さは上段部 0.1 ～ 0.15 m、下段部 0.35 m。

６号土坑（図版 15、第 20 図）

調査区西隅部近くで６・７号土坑が 0.1 mの間隔で並んでおり、６号土坑はそのうち北側にある比較的大形の土坑である。平面形状は不整形に近い楕円形で、長軸長 2.35 m、短軸長 1.3 m。底部はほぼ水平で、深さ 0.5 m。

７号土坑（図版 15、第 20 図）

６号土坑の南側に近接する。隅丸方形に近い不整形で、長軸長 1.6 m、短軸長 1.25 m。底部は北西側過半部が 0.3 m程深い二段掘り状で、下段部底面は水平に近く、深さ 0.45 m。

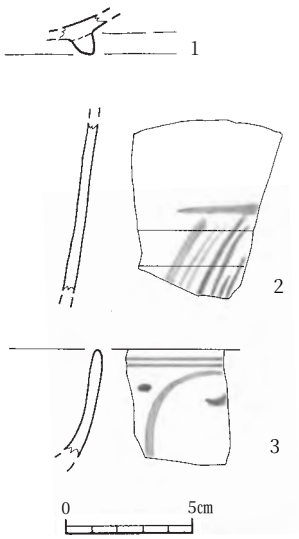


第 21 図　１号溝実測図（1/40）

溝

1号溝（図版16、第21図）

北西側調査区境の中央部付近から東側に延びる石組溝で、調査区内で9.8ｍ分検出した。堀形はほぼ直線的に掘られ、幅1.0～1.1ｍ、深さ0.1ｍ程度と浅い。石組には遺構面地山に含まれるのと同様な自然石河原石を使用し、20～30cm大の石を堀形中央部に内面に面を揃える形で0.1～0.15ｍの間隔で二列一段に並べて水路とし、周囲には比較的小形の石を充填する。溝の一部では長辺40cm程度の扁平な石を水路部に被せている状況が確認できることから、暗渠といえる。



第22図　鬼木鉾立遺跡２次調査出土遺物実測図（1/3）

2号溝（図版13、第19図）

調査区中央部やや南西にある。形状は乱れており幅も0.3～1.0ｍで一定していないが、大きくは直線的で南北方向に延び、長さ9.7ｍ、深さ0.1ｍ程度。埋土は１号溝と同様の黒灰色土で、方向はほぼ直角になる。

出土遺物（図版16、第22図）

２号溝からは３点の土師器片が出土しているが、図示出来るものは１点のみである。１は土師器椀の高台部であろう。高台はやや外方に開く。

その他出土の遺物

２は調査区北半部の遺構検出中に出土した。陶器の甕あるいは壺の体部と考えられる。器壁は薄く、胎土は灰色で、外面にのみオリーブ色の透明釉をかける。

３は表土掘削作業中に出土した。染付椀であるが、胎土が粗く充分に磁器化していない。内外面とも貫入が細かく入る。

４　まとめ

今回の調査で検出した主な遺構は、土坑７基以上と溝２条などである。これらのうち土坑については遺物が全く出土しておらず、時期、性格とも不明と言わざるを得ない。

２条の溝は端部が近接しており、方向は概ね直角となる。２号溝からは数点の土師器破片が出土しているが、図示でき、またある程度時期を特定し得るものはわずかに１点であった。それは土師器椀の高台部で、小破片であるが８世紀後半から９世紀初頭頃の時期が考えられる。

隣接する鬼木鉾立遺跡１次調査および久路土樋掛遺跡では、ともに８～９世紀代の掘立柱建物跡、溝等を検出しており、それは先述の土師器の時期と整合する。しかしながら、上記２遺跡の溝と今回調査をした２条の溝とでは方向が合わず、また土器破片１点で遺構の時期を決めることにも躊躇する。いずれにしても、位置から考えて隣接する２遺跡と関連する遺構が含まれていることは確実と思われ、集落の一部を確認した可能性があるというに留めておきたい。

Ⅵ　鬼木鉾立遺跡３次調査

１　調査の経過

調査対象地の地点名は中津 32 である。試掘・確認調査は平成 23 年 10 月 18・19 日に実施し、一部遺構を確認したため、本調査の必要ありと判断した。本調査の着手届は「24 九歴第 308 号－18」、調査期間は平成 24 年８月 23 日～平成 25 年２月８日までで、調査面積は 3,500m^2 である。埋蔵物発見届は「24 九歴第 1605 号－ 22」、出土遺物の量は７箱である。

なお、鬼木鉾立（おんのきほこたて）遺跡第１次調査は、豊前市教育委員会による県営圃場整備事業に伴う発掘調査（平成 13 年４月 25 日～平成 14 年３月 22 日、約 17,000m^2）であり、報告書は平成 25 年に刊行された（豊前市教育委員会 2013『鬼木鉾立遺跡・久路土樋掛遺跡』豊前市文化財調査報告書第 31 集）。

日誌抄

平成 24 年	８／23	重機掘削開始、西半部着手
	９／４	建機搬入、作業員投入
	９／６	１号土坑検出
	10／３	１号溝掘削
	10／９	トレンチ調査（１～４号）
	10／24	埋戻し（～ 31）
	11／１	東半部北側重機掘削開始
	11／９	掘立柱建物跡２棟確認
	11／12	１号竪穴住居跡検出
	11／13	１号土坑墓調査
	12／４	空中写真撮影
	12／11	埋戻し（～ 14）
	12／17	東半部南側重機掘削開始
	12／25	１号土器棺墓検出
平成 25 年	１／９	２号住居跡掘削開始
	１／30	空中写真撮影
	２／８	調査終了

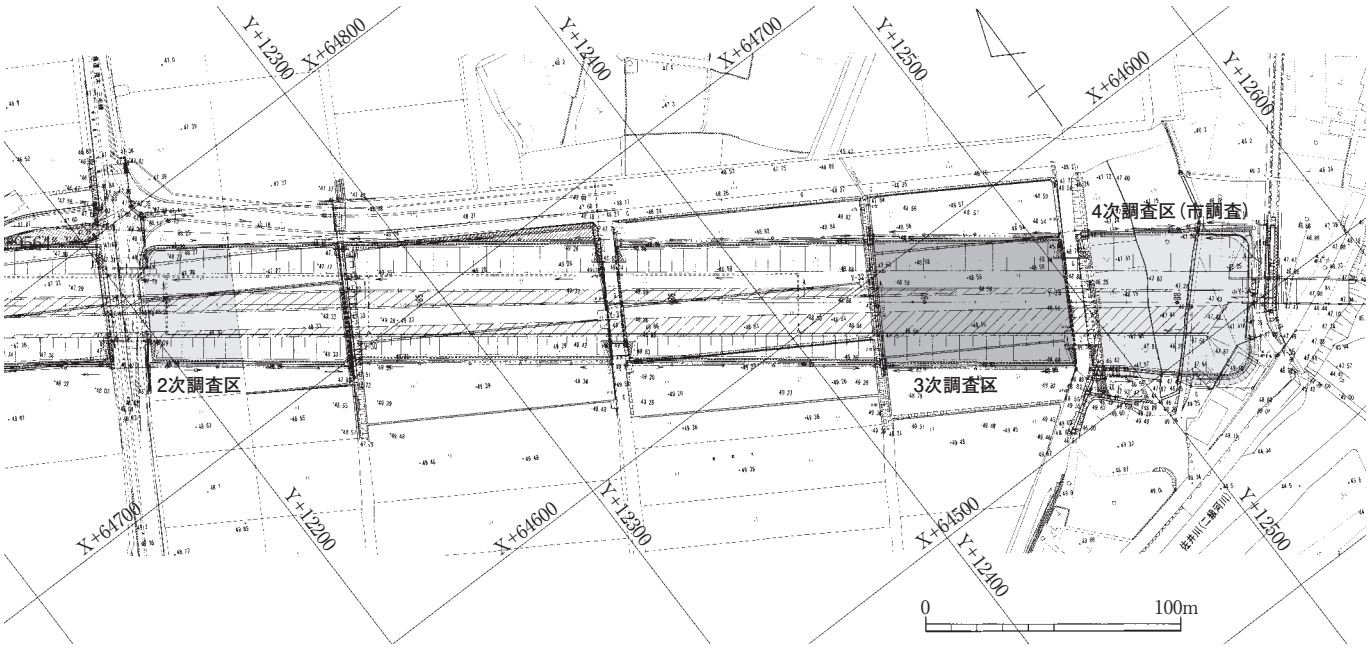
２　調査の概要

概要

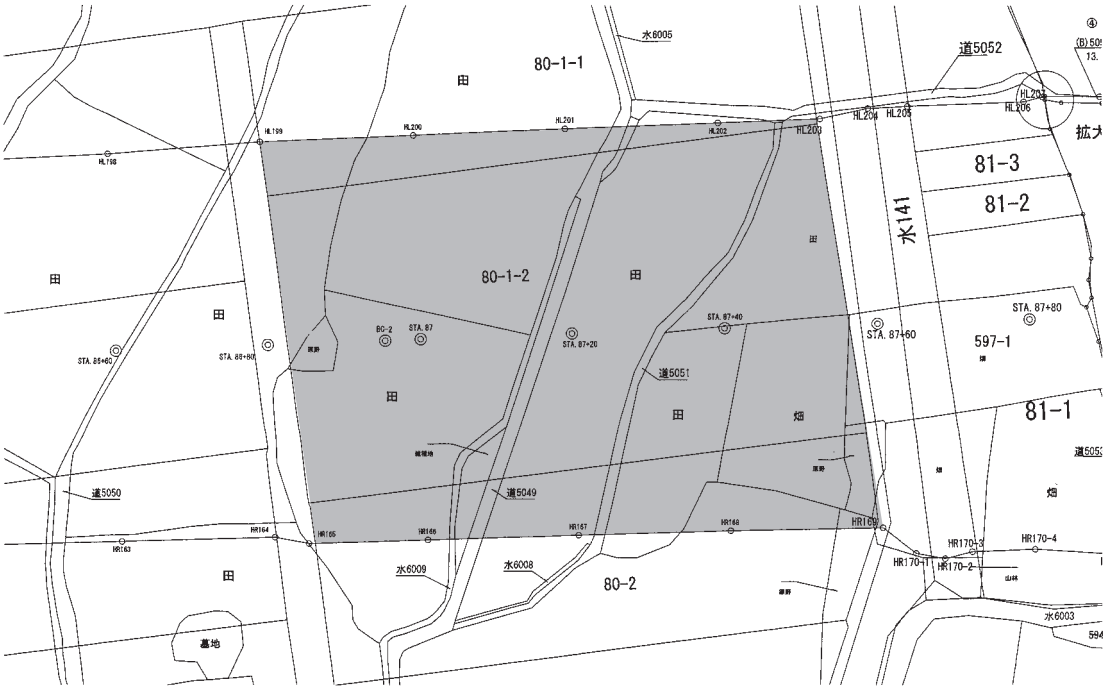
調査対象地は佐井川左岸に位置し、標高約 49 ｍの岩岳・佐井川扇状地に立地する。東九州自動車道関係の発掘調査は、３次調査区の北西 260 ｍの位置に第２次調査区、農道を挟んで南東側に４次調査区（豊前市の調査）が隣接する。

調査は排土移動などのため、西半部・東半部に分け、東半部はさらに南北に分割して実施した。西半部は、表土・圃場整備による客土の下位が黄褐色土と拳大～人頭大の礫の地山である。西半部東側は礫を多く含む暗茶褐色～黒褐色土によって埋没した埋没谷を検出した。この埋没谷は西半部と東半部の境まで幅約 20 ｍあり、南西～北東方向に伸びる。埋没谷の上面では圃場整備前の暗渠を検出した以外、検出された遺構はなく、埋没谷以外の部分も遺構分布は稀薄である。

東半部は、北側の地山は黄褐色土、南側はほとんど礫である。遺構密度は北側が高く、南側の礫地帯では稀薄である。調査区内で広範囲に分布する礫は地形的にみても佐井川の氾濫による堆積であり、遺構が検出できた範囲は若干標高が高い場所である。

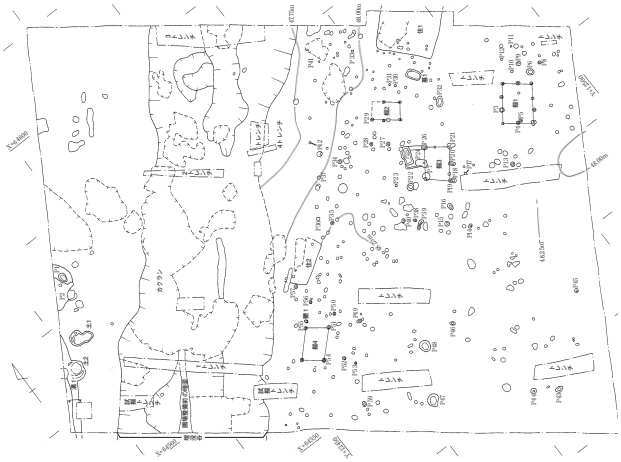


1. ２～３次調査区位置図（１/3,000）



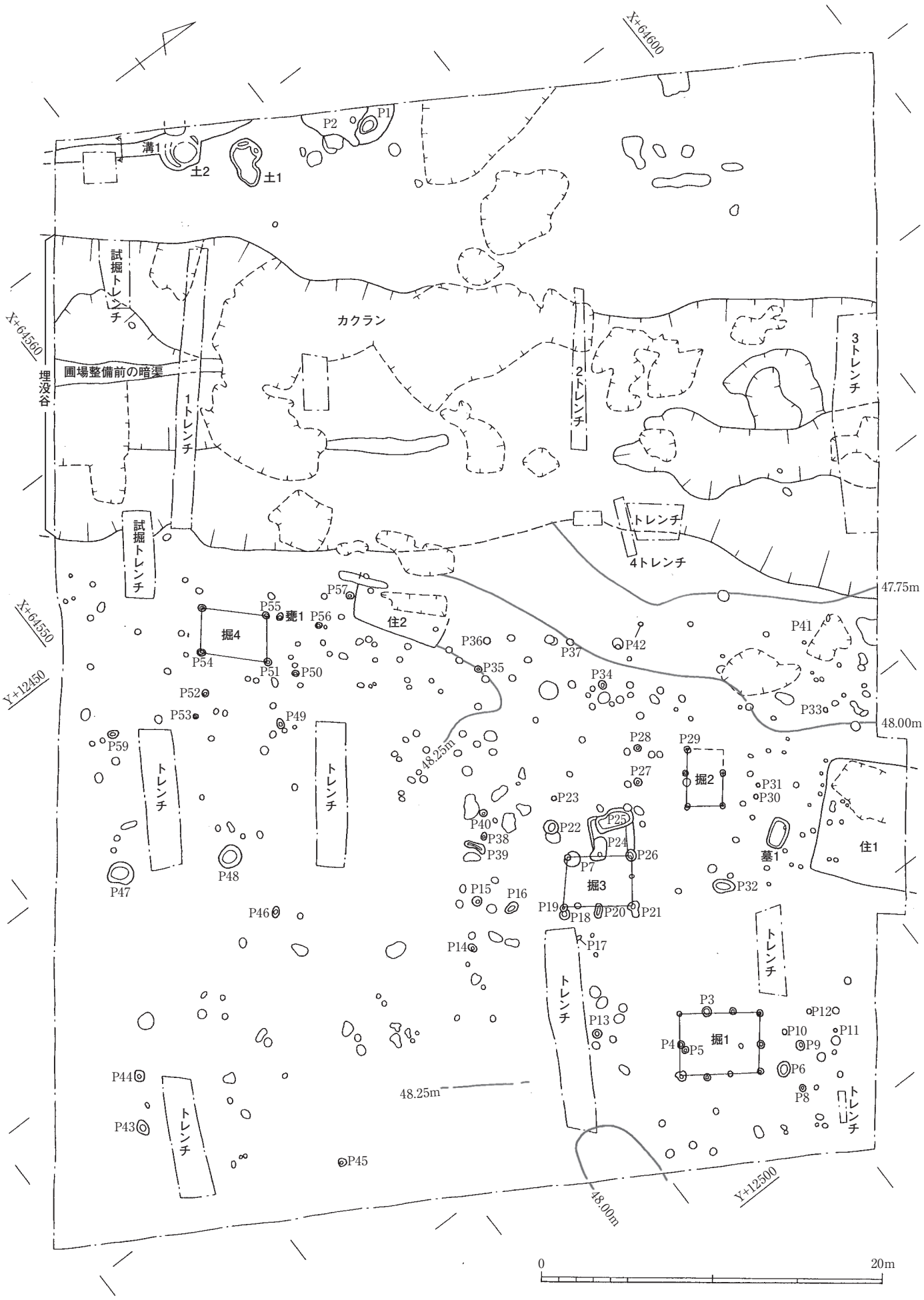
2. ３次調査区と
圃場整備前の地割①
（1/1,000）

0　30m



3. ３次調査区と
圃場整備前の地割②

第 23 図　鬼木鉾立遺跡調査区位置図（１/3,000、1/1,000）



第 24 図　鬼木鉾立遺跡３次調査遺構配置図（1/300）

トレンチ（第 25 図、図版 18・19）

旧地形や地盤の状況を確認するためにトレンチを４箇所設定した。この内１～３号トレンチについて所見を述べる。

１号トレンチ

調査区東半部南側に設置した。長さは 16.7m である。トレンチ東側･中央部分では攪乱が見られ、トレンチ中央部分では人頭大の礫が多く見られた。トレンチ西側は埋没谷の肩である。

２号トレンチ

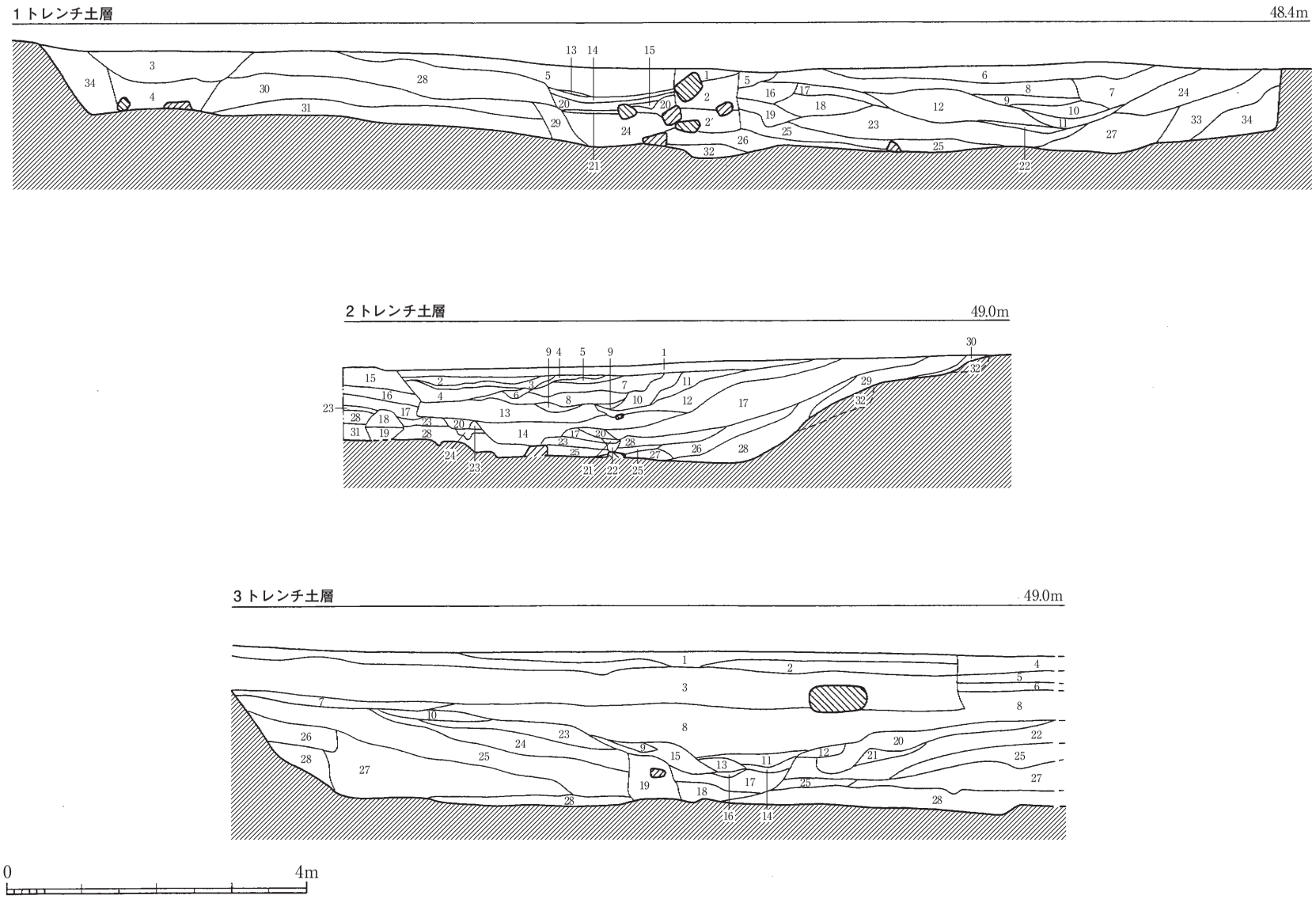
調査区東半部中央に設置した。長さは黒褐色土の落ち際から９m である。埋没谷の肩の傾斜は緩やかであり、地表下約 0.55m のところで鉄分を多く含む層になる。

３号トレンチ

調査区北東壁に沿って設置した。長さは 11m である。トレンチの西側では、３層にコンクリート片等が混入し、１・２層由来の土がブロック状に混入していた。圃場整備時の客土と考えられ、調査区各所で見られる攪乱も同様のものであると考えられる。トレンチ西端から約５m の所に地形の落ち込みが見られ、下部は礫が混入し、28 層では礫が主体となる。８層の上面は遺構検出面と同様の色調を呈しており、トレンチ内では土器が出土した。

第２表　１号トレンチ土層断面注記一覧

層番号	土層名	土色	特徴
1	黒色粘質土	7.5YR2/1	粘性やや弱。
2	黒褐色粘質土	7.5YR3/1	粘性強。灰黄褐色砂が混じる。2' は若干色調明るい。
3	黒色粘質土	10YR2/1	粘性やや強。5 ～ 20cm の礫少し。
4	黒褐色砂礫	7.5YR2/2	締まり無し。2 ～ 5cm の礫が密に混じり、下部には 10cm の礫有り。
5	黒褐色粘質土	10YR3/2	粘性弱。粒子が少し粗く小礫も混じる。弥生土器・姫島産黒曜石有り。
6	黒褐色砂質土	7.5YR3/1	粘性やや弱。灰黄褐色土が部分的に混じる。粒子粗い。
7	黒褐色砂質土	7.5YR3/2	粘性弱。3cm の礫極少量。
8	灰黄褐色砂質土	10YR4/2	粘性極弱。きめが細かい。
9	にぶい黄褐色砂	10YR4/3	締まり無し。川砂に似る。
10	暗褐色砂	10YR3/4	締まり無し。粒子粗い。
11	黒褐色砂質土	10YR3/2	粘性やや強。
12	褐色砂質土	10YR4/4	粘性弱。3 トレンチ 2・3 層と同。
13	黒褐色粘質土	7.5YR3/1	粘性強。黄褐色土・炭化物・鉄分が極少量。
14	灰黄褐色砂質土	10YR5/2	粘性無し。締まり無し。13 層と同質の土と互層状に堆積。極度に磨滅した土器包含。
15	灰黄褐色砂質土	10YR5/2	黒褐色土が 14 層より多く、斑点状に混じる。
16	黒褐色砂	7.5YR3/2	締まり無し。粒子が粗い。1cm 以下の小礫多、3 ～ 5cm の礫極少。遺物有り。
17	褐色砂質土	10YR4/4	粘性やや弱。1 ～ 3cm の礫有り。粒子粗い。
18	黒褐色砂	10YR3/2	2 ～ 5cm の礫が密。2 トレンチ 7 層と同。土器片有り。
19	黒褐色砂質土	10YR3/2	粘性やや強。礫は極少。粒子細かい。
20	黒褐色粘質土	7.5YR3/2	にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土がマーブル状に混じる。14 層と似るが、砂質土少。
21	黒色粘質土	10YR2/1	粘性強。粘土に近い。遺物有り。
22	黒褐色砂	10YR2/2	締まり無し。粒子細かい。
23	暗褐色砂礫	10YR3/4	1 ～ 7cm の礫多し。下部には 15cm の礫多。
24	黒褐色砂礫	10YR2/2	2 ～ 5cm の礫多し。砂の粒子は粗い。土器片有り。
25	黒色粘質土	10YR2/1	粘性やや弱。2 トレンチ 17 層と同。
26	灰褐色粘質土	7.5YR4/2	粘性強。礫無し。
27	にぶい黄褐色粘質土	10YR4/3	粘性強。灰黄褐色（10YR4/2）に近い。3cm の礫有り。3 トレンチ 27 層と同。
28	黒色粘質土	10YR2/1	25 層と同。
29	黒褐色砂質土	10YR3/2	粘性強。5 ～ 20cm の礫多し。
30	褐色砂礫	10YR4/6	20 ～ 30cm の礫多く、2cm の礫有り。褐色粘質土が極僅かに混じる。
31	褐色砂礫	10YR4/6	締まり強。30 層より 2 ～ 5cm の礫少、1cm 以下の砂礫と褐色粘質土多し。30 層より明るい。
32	暗褐色砂質土	10YR3/4	砂粒粗い。
33	黒色粘質土	10YR2/1	粘性強。1cm の小礫多、20 ～ 50cm の礫混じる。粘質土少。2 トレンチ 29 層と同。
34	にぶい黄褐色砂質土	10YR4/3	粘性極弱。3 ～ 5cm の礫がほとんど。砂礫は粒子が粗い。



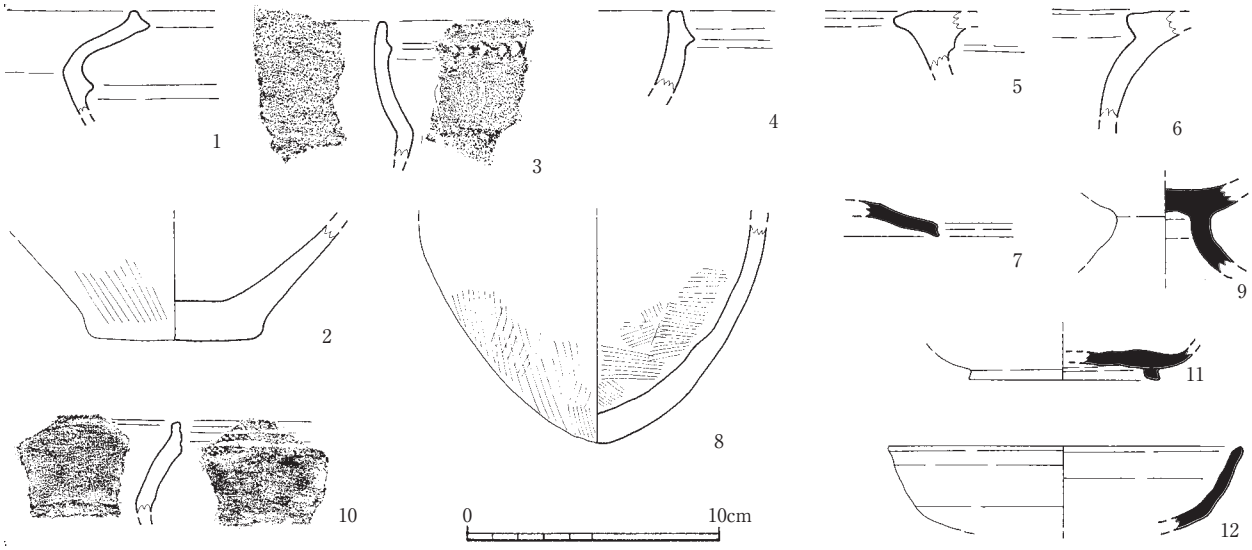
第25図　1～3号トレンチ土層断面実測図（1/80）

第３表　２号トレンチ土層断面注記一覧

層番号	土層名	土色	特徴
1	黒褐色粘質土	10YR3/2	粘性弱。やや砂質。橙色を呈する鉄分の沈着物有り。
2	暗褐色砂質土	10YR3/3	粘性極弱。きめ細かい。
3	灰黄褐色砂	10YR4/2	粘性極弱。きめ細かい。流水による堆積砂。
4	黒褐色粘質土	10YR3/2	粘性中。やや砂質。1 層より色調明るい。下部には粘質土が疎らに混じる。弥生土器包含。
5	黒褐色土	7.5YR3/1	粘性極弱。灰黄色砂が斑状に混じる。
6	灰褐色砂	10YR4/1	粘性極弱。3 層より粒子やや大。
7	黒褐色土	7.5YR3/1	粘性弱。下部に灰黄褐色（10YR5/2）粒が斑に混じる。
8	褐灰色砂質土	10YR4/1	粘性極弱。13 層との境界面付近に須恵器高坏有り。
9	褐灰色砂	10YR4/1	8 層より締まり弱。水分多し。上部に鉄分の沈着物有り。
10	灰黄褐色砂質土	10YR5/2	粘性中。黒褐色土極少、下部に疎らに灰黄褐色粘質土有り。
11	黒褐色粘質土	7.5YR3/1	粘性弱。脆い。下部は色調やや明るい。
12	暗褐色砂	10YR3/3	部分的に粒子が粗い箇所有り。
13	黒褐色砂礫	10YR2/2	拇指大礫 85%、人頭大礫 5%、砂 10%。砂は鉄分のためか若干赤味を帯びる。遺物多し。
14	灰黄褐色砂礫	10YR4/2	13 層とほぼ同様。砂の色のみ異なる。遺物多い。
15	にぶい黄褐色粘質土	10YR4/3	粘性弱。
16	黒褐色粘質土	10YR3/2	15 層より粘性強。
17	黒色粘質土	2.5YR2/1	粘性強。調査区内の地形変換点の黒色はこの層に由来。遺物包含層。
18	黒褐色砂	10YR3/2	粒子大。脆い。川砂に似る。19 層と一連の層。
19	暗褐色砂	10YR3/3	2 ～ 10mm の小礫多し。川砂に似る。
20	褐灰色砂	10YR4/1	9 層に似る。
21	褐灰色砂	10YR4/1	20 層に似るが、やや暗い。
22	暗灰色粘質土	10YR3/3	粘性強。下部に鉄分の沈着物有り。
23	黒褐色粘質土	10YR2/2	粘性やや強。きめ細かい。部分的に同色粘土が帯状に入る。
24	灰黄褐色砂質土	10YR4/2	粘性弱。下部に鉄分が沈着し硬化する。
25	灰黄褐色砂質土	10YR4/2	24 層と似る。
26	にぶい黄褐色砂質土	10YR4/3	粘性やや強。石英粒混じる。
27	暗灰色砂質土	10YR3/3	粘性極弱。脆い。2 ～ 5cm の礫が 50%占める。
28	灰黄褐色砂質土	10YR5/2	粘性弱。きめ細かい。
29	黒色砂礫	2.5Y2/1	17 層と同色。1cm ～拳大の礫が 90%を占める。
30	褐色粘質土	7.5YR4/4	粘性やや強。拳大～人頭大礫多し。調査区北西側の遺構検出面。
31	灰黄褐色砂質土	10YR5/2	28 層に似るが、2mm の砂粒多し。
32	黄褐色砂礫	10YR5/6	地山。拳大～人頭大の礫多し。2 ～ 5mm の小礫が間隙に入る。

第４表　３号トレンチ土層断面注記一覧

層番号	土層名	土色	特徴
1	黒色粘質土	10YR7/1	耕作土。
2	にぶい黄褐色土	10YR5/3	床土。1 層や黄褐色（10YR5/3）が僅かに混じる。
3	-	-	圃場整備時の客土。人頭大～ 1m 大の礫多し。コンクリート片混じる。
4	褐色粘質土	10YR4/4	旧耕作土。色調は黄褐色（10YR5/6）も混じる。
5	灰黄褐色	10YR4/2	旧耕作土。色調は黒褐色（10YR3/2）も混じる。
6	黄褐色土	10YR5/6	旧床土。一部黒褐色（10YR3/2）が入る。
7	褐色粘質土	10YR4/4	旧床土。粘性弱。下部に灰黄褐色粘質土（10YR4/2）が混じる。
8	黒褐色粘質土	7.5YR3/1	粘性強。礫ほぼ無し。調査区南西側の遺構検出面。北西側では消失。
9	暗褐色砂質土	10YR3/3	粘性弱。にぶい黄褐色砂（10YR4/3）がマーブル状に入る。
10	黒褐色粘質土	10YR2/2	粘性強。礫無し。
11	にぶい黄褐色砂	10YR5/3	きめ細かく、脆い。粘性弱の灰黄褐色粘質土（10YR4/2）がマーブル状に混じり、 粘性やや強の黒褐色粘質土（10YR3/2）が混じる。
12	灰黄褐色砂質土	10YR4/2	粘性中。黒褐色（10YR3/3）やにぶい黄褐色（10YR4/3）が疎らに混じる。
13	黒褐色砂質土	10YR3/2	粘性極弱。黄褐色を呈する鉄分が筋状に混じる。
14	黒褐色粘質土	10YR3/2	粘性弱。黒色土（10YR2/1）が僅かに斑状に混じる。
15	暗褐色砂質土	10YR3/3	粘性極弱。黒色粘質土（10YR2/1）が極僅かに混じる。
16	灰黄褐色砂	10YR5/2	赤褐色（2.5YR4/8）の鉄分の固着物有り。上位層の砂や砂質土に比して粒子が粗く、脆い。
17	黒褐色砂礫	5YR3/1	2 ～ 5cm の礫がほとんど。2 ～ 20cm の礫の間隙に黒褐色砂（5YR3/1）が入る。 下部に赤褐色の鉄分が沈着する。
18	黒褐色砂礫	10YR2/3	15 ～ 20cm の礫が大半。ほぼ礫。礫の間隙に砂入る。
19	にぶい黄褐色砂	10YR2/3	締まり無し。黒褐色（7.5YR3/1）～黒色（7.5YR2/1）粘質土が 3 ～ 5cm のブロック状に 部分的に混じる。
20	黒褐色砂質土	7.5YR2/2	粘性弱。5cm 礫が極少量。弥生土器包含。
21	黒褐色砂質土	10YR2/2	20 層と似るが、粘性やや弱く、茶色味を帯びる。
22	暗褐色砂質土	10YR3/3	粘性やや強。0.5 ～ 1mm の砂粒が多い。
23	褐色砂質土	7.5YR4/3	粘性やや強。黒褐色土が極少量疎らに混じる。
24	暗褐色砂質土	10YR3/3	22 層と同。
25	黒色粘質土	10YR2/1	粘性強。3 ～ 5cm の礫極少量。遺物包含層。2 トレンチ 17 層と同。
26	黒色粘質土	7.5YR2/1	2cm ～拳大の礫がほとんど。砂粒多し。
27	灰黄褐色粘質土	10YR4/2	粘性弱。下部は砂礫が若干多し。
28	褐色砂質土	10YR4/4	粘性弱。石英多く、粗い。3cm ～人頭大の礫混じる
29	黄褐色砂礫	10YR5/6	ほぼ礫。



第26図　1～3号トレンチ出土土器実測図（1/3）

出土遺物（第26図）

1は壺口縁部である。口縁は跳上口縁であり、頸部やや下方に断面三角形の突帯をめぐらす。調整は内外面ナデ、色調は外面が白黄褐色～茶白褐色、内面が橙白褐色を呈す。2は壺あるいは甕底部であり、平底の底部付近に黒斑がある。調整は外面がハケメ後ナデ、内面がナデである。色調は外面が茶褐色～黒色、内面が暗黄茶褐色を呈す。胎土には雲母・角閃石を含む。3は深鉢か。口縁部は内傾しつつ伸び、ほぼ平坦な口縁端部やや下方に低い刻目突帯をめぐらす。調整は内外面ナデ、色調は外面が暗黄茶褐色、内面が暗黄茶褐色～黒色を呈す。胎土に雲母・角閃石を含む。4は無頸壺か。口縁端部は凹み、やや下方に断面三角形の突帯を貼りつけ、内外面丹塗を施す。調整は内外面ナデ、色調は外面が焦茶～灰黄褐色、内面が灰黄褐色を呈す。胎土に雲母を含む。5は甕か。口頸部は内湾気味である。口縁部は平坦であり、口縁部やや下方外面の屈曲部に粘土を追加し、稜を有した段を付ける。この段の下部に若干丹塗が残る。調整は内外面ナデ、色調は内外面白黄褐色を呈す。胎土に雲母・角閃石を含む。6は壺口縁部である。口頸部は外反し、口縁部は鋤先口縁である。調整は内外面ナデ、色調は灰黄褐色～茶白褐色を呈す。7は須恵器坏蓋である端部は回転ナデによって凹線状に凹み、先端がやや下方に曲がる。調整は内外面回転ナデ、色調は内外面灰色である。8は壺か。底部は尖底気味である。外面に煤が付着する。調整は外面が縦方向ハケメ、内面が横方向ハケメである。色調は外面が灰黄褐色～黒灰色、内面が灰黄褐色を呈す。胎土に雲母･角閃石を含む。9は須恵器低脚高坏である。調整は脚部が内外面回転ナデ、坏部がナデである。色調は内外面灰色である。10は縄文時代後期の磨消縄文土器の浅鉢か。短い文様帯に縄文を施文し、2条の平行する沈線を施す。内外面に条痕がみられ、色調は外面が暗黄茶褐色、内面が暗黄茶褐色～灰色である。胎土に雲母・角閃石を含む。11は須恵器坏身である。口縁の立ち上がりは高台部分からやや外方である。調整は内外面回転ナデ、色調は内外面灰色である。12は須恵器坏身である。口縁端部は短くやや外方に反る。調整は内外面回転ナデ、色調は内外面灰白色
である。断面を含めて、内外面の大部分に暗黄茶褐色の沈着物が付着する。

各土器の時期は、縄文時代後期が10、縄文時代晩期が3、弥生時代中期が1・4～6、2・8は弥生時代後期か、9は古墳時代後期、7・11・12は8世紀代と考えられる。

3　遺構と遺物

竪穴住居跡・土器棺墓

１号竪穴住居跡（第 27 図、図版 19）

調査区東側に位置し、主軸はＮ－ 40°－ Ｗである。北東隅部分が調査区の外に伸び、また、住居の北側１／３は圃場整備前の暗渠や水路による攪乱を受けている。規模は一辺 680cm 四方、平面形は方形で、残存する深さは 30cm であり、約 10cm 貼床を施す。主柱は４本であり、検出した主柱穴は北東部を除く３基である。柱痕跡はなく、柱穴の規模は径約 30cm、深さは約 60cm である。屋内遺構は、壁際溝が四周し、住居南東辺中央に深さ約 15cm の土坑がある。また、住居中央に粘土塊の集中箇所があり、下位からは土器が出土した。焼土があるため、炉跡であろう。

出土土器から弥生時代後期の竪穴住居跡であると考えられる。

出土土器①（第 28 図、図版 25）

１は東南側主柱穴から出土した壺の頸部～底部付近である。外面下半には微量の煤状の付着物がみられる。調整は外面がナデ、内面は工具によるナデである。色調は外面が灰黄褐色～暗黄茶褐色を呈し、胴部下半は焼成時の黒斑があり、内面は明赤褐色を呈す。胎土に角閃石を含む。

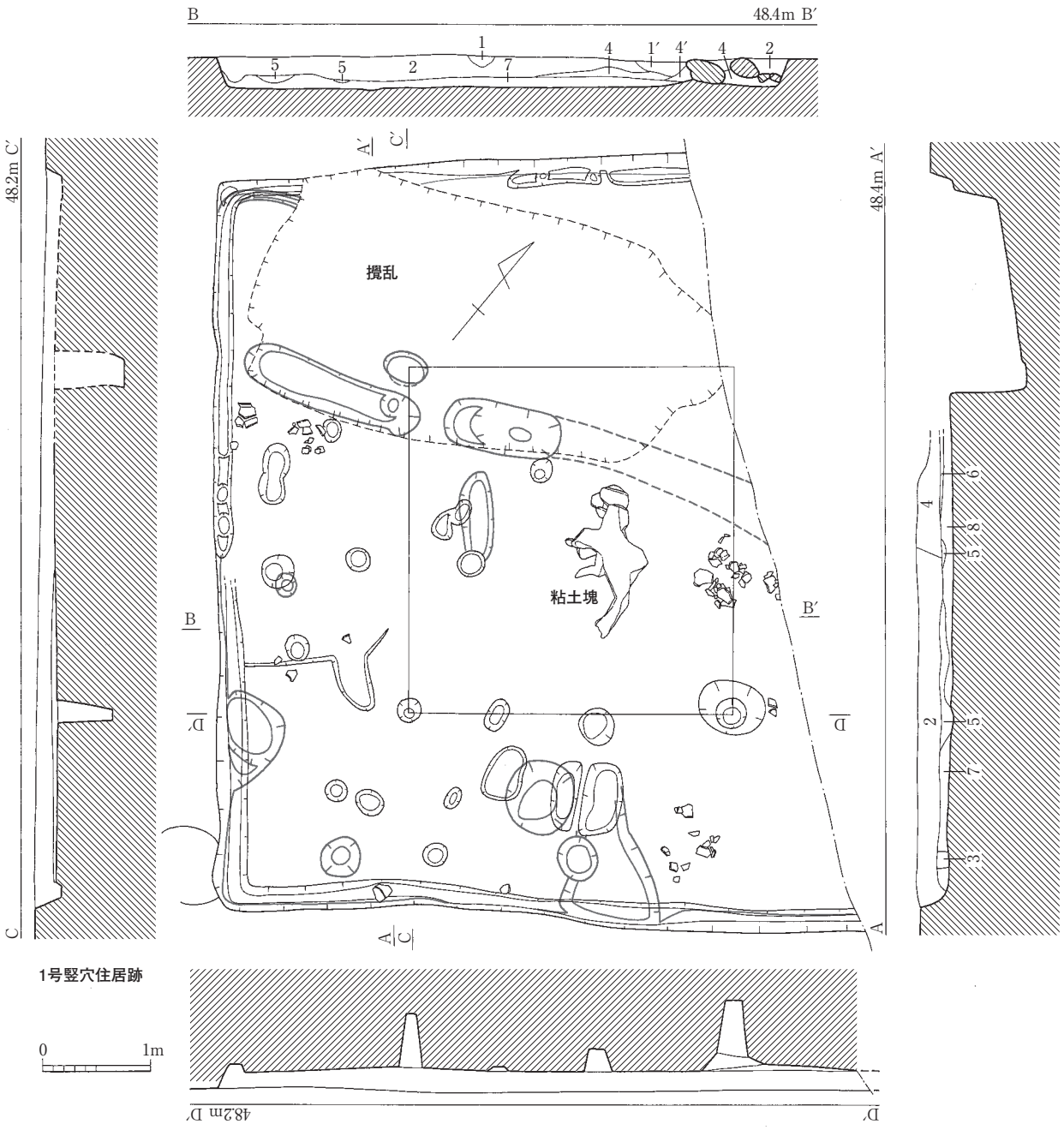
２は炉跡横から出土した甕の口縁部～胴部である。口縁は直線的に外反し、端部は平坦である。胴部内面には幅約５cm の粘土帯の継ぎ目が残存している。調整は外面がナデ、内面が横方向の工具によるナデである。色調は外面が暗黄茶褐色で、一部焼成時の黒斑があり、内面は明赤褐色を呈す。胎土に角閃石・赤褐色粒を含む。

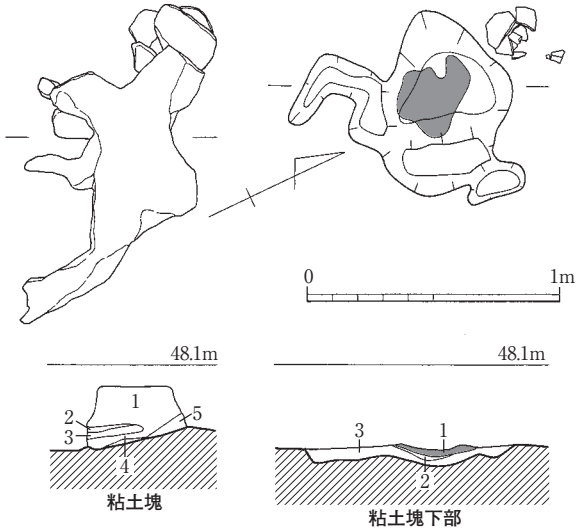
３～５は貼床直上で出土した甕である。３は口縁は直線的に外反し、端部はほぼ平坦である。胴部内面には幅約５cm の粘土帯の継ぎ目が残存している。調整は口縁部が内外面ヨコナデ、胴部は内外面ナデである。色調は暗黄茶褐色～焦げ茶色を呈す。胎土に雲母・角閃石・赤褐色粒を含む。４は口縁部が外反気味に伸び、端部は平坦である。胴部最大径は口縁部径より大きい。調整は口縁部が内外面ヨコナデ、頸部に縦方向のハケメが若干残る。胴部は外面が縦方向ハケメ、内面は縦方向ナデだが、調整不足で凹凸が激しい。色調は外面が茶褐色、内面が淡赤褐色を呈す。胎土に角閃石・赤褐色粒・雲母を含む。５は底部付近である。底部のは断面が磨滅しており、底部穿孔かどうかは不詳である。調整は外面が縦方向ハケメ、内面ナデである。色調は外面が茶褐色、一部焼成時の黒斑があり、内面は明赤褐色を呈す。胎土に雲母・赤褐色粒・角閃石を含む。

６～ 12 は埋土中の遺物である。６は高坏の口縁部である。口縁は受部から外反し、端部は平坦である。調整は内外面ナデ、色調は内外面白黄茶色～茶褐色を呈し、口縁部外面には焼成時の黒斑

第５表　１号竪穴住居跡土層断面注記一覧

層番号	土層名	土色	特徴
1	暗褐色粘質土	7.5YR3/3	黒褐色土が少量混じる。後世の小穴か。1' は４層に似るが色調やや暗い。
2	黒褐色粘質土	7.5YR3/1	住居埋土。粘性弱。灰褐色（7.5YR4/2）が斑に混じる。
3	黒褐色粘質土	10YR3/2	住居に伴う小穴（住 1pit01）
4	黒褐色粘質土	10YR2/2	住居埋土。黒褐色粘質土を主に褐色粘質土（10YR4/4）や 灰黄褐色土（10YR4/2）がマーブル状に入る。4' 色調やや異なる。
5	暗褐色粘質土	7.5YR3/3	褐色（7.5YR4/4）が斑点状に混じる。
6	明褐色砂質土	7.5YR5/6	貼床。粘性弱。締まり強。
7	褐色砂質土	10YR4/4	貼床。粘性弱。砂粒やや大。
8	黒褐色粘質土	7.5YR2/2	貼床。褐色（7.5YR4/4）が斑に混じる。
9	黄褐色土	10YR5/6	地山。





粘土塊

層番号	土層名	特徴
1	灰色粘土	
2	暗灰色粘土	黒褐色混じる。
3	黒褐色粘質土	粘性弱。
4	灰色砂	川砂に似る。
5	黒褐色粘質土	3層と1層の混土。

粘土塊下部

層番号	土層名	土色	特徴
1	暗赤褐色土	5YR3/6	粘性弱。硬い。 2mm大の黒色斑点、 3mm大暗褐色角ブロック 少量混じる。
2	暗褐色粘質土	7.5YR3/3	やや赤みを帯びる。
3	褐色砂質土	7.5YR8/4	粘性やや弱。 締まりやや弱。

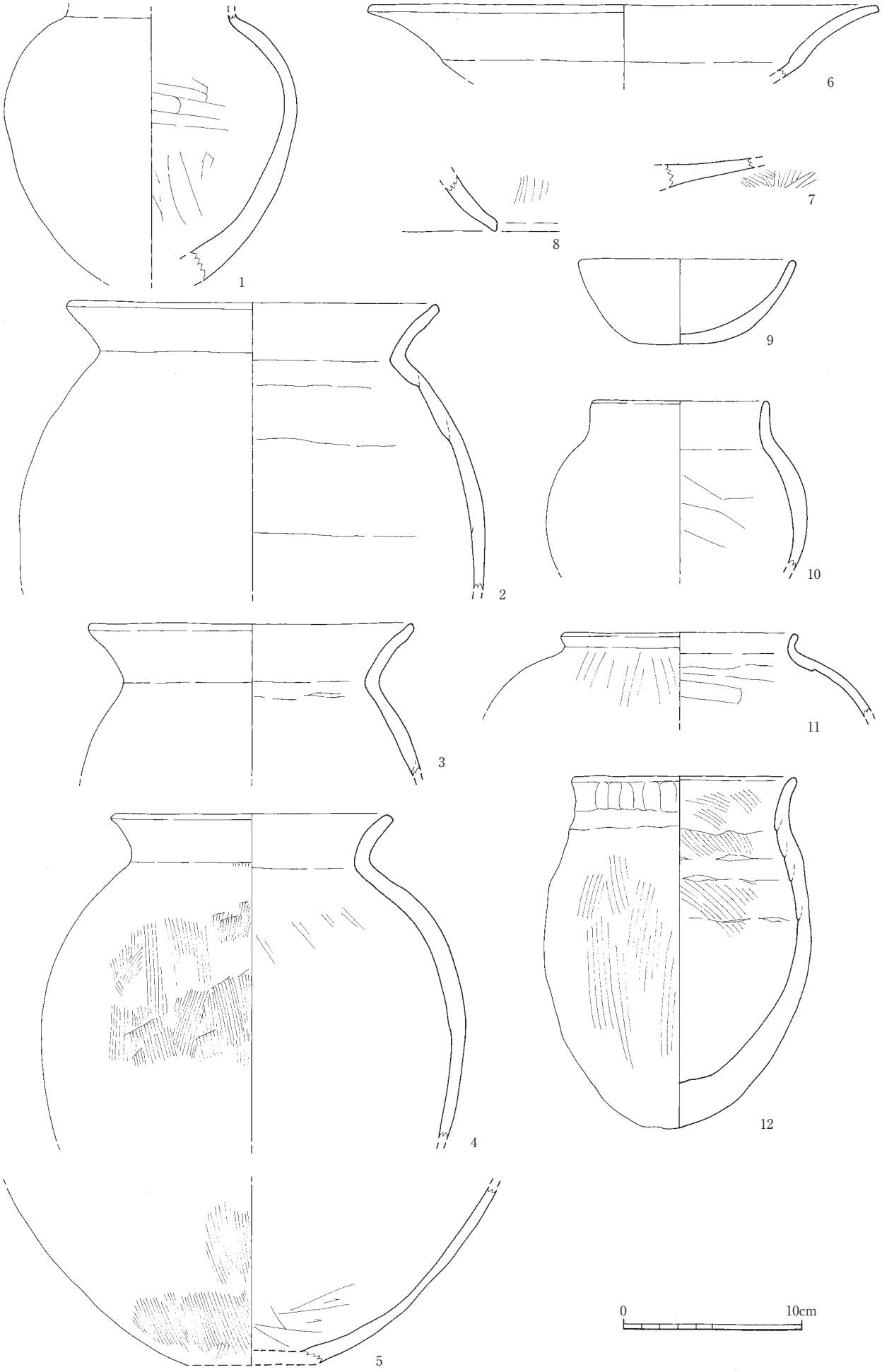
第27図　1号竪穴住居跡実測図（1/60、1/30）

がみられる。胎土には角閃石を含む。７は高坏の坏部である。調整は外面が放射状のミガキ、内面はナデである。色調は内外面茶褐色を呈す。胎土には雲母・角閃石を含む。８は高坏の脚裾部である。内外面磨滅が著しく、調整は不詳である。色調は内外面灰黄褐色～明赤褐色を呈す。胎土に砂粒が多く混じる。９は小型の鉢である。底部は凸レンズ状気味の平底で、口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸い。調整は内外面ナデで、特に口縁部内面は丁寧にナデが施されている。色調は内外面灰黄褐色～淡い焦げ茶色を呈し、外面には焼成時の黒斑がみられる。10・11は短頸壺である。10は口縁部が直に立ち上がり、端部は丸い。調整は内外面ナデである。色調は内外面灰黄褐色を呈し、外面に焼成時の黒斑がみられる。胎土に角閃石・雲母を含む。11は口縁部がやや外反するように短く伸び、端部はやや平坦である。調整は内外面ナデであるが、内面は表面が平滑であるものの頸部には粘土帯の継ぎ目が若干残っている。色調は内外面灰黄茶褐色である。胎土に雲母・赤褐色粒を含む。12は甕である。口縁部はやや外反する程度で端部は丸い。胴部の張りはさほどなく、丸底の底部は厚く作っているため、重量感がある。胴部外面の上位～中位にかけて煤が若干付着する。調整は口縁部外面がナデ、胴部外面は縦方向のハケメ、内面は口縁部にユビオサエがみられ、また口縁部～胴部中位までハケメがあり、以下はナデである。全体的に調整が粗く、頸部外面や胴部内面に粘土帯の継ぎ目が残り、器面に凹凸が多い。色調は内外面橙褐色を呈す。胎土に赤褐色粒・角閃石が混じる。

出土土器②（第29図）

１～７は埋土中の遺物であり、甕である。１は口縁部がやや外反し、端部は平坦である。調整は口縁部外面がナデ、内面は横方向ハケメ後ナデ、胴部外面は縦方向ハケメ後ナデ、頸部内面はユビオサエ後ナデ、胴部内面は斜方向の条線後ナデである。色調は外面が茶褐色～灰黄褐色、内面が白黄褐色を呈す。胎土に砂粒が多く含まれ、粒径が５mm大のものもある。２は口縁部がやや強く外反し、端部は平坦である。調整は口縁部外面がナデ、内面が横方向ハケメ後ナデ、胴部外面が縦方向ハケメ、内面が横方向ハケメである。頸部内面には粘土の継ぎ目が残る。色調は内外面灰黄褐色、外面は焼成時の黒斑がみられる。胎土には雲母が若干混じる。３は口縁部片であり、端部は跳上げる。調整は内外面磨滅しており不詳である。色調は内外面灰黄色である。胎土に赤褐色粒を含む。４は平底の底部であるが、若干上げ底気味である。調整は内外面磨滅しており不詳である。色調は内外面暗黄茶褐色を呈す。胎土には雲母・角閃石が混じる。５は口縁部がほぼ屈曲せず、端部は丸い。胴部は張らず、底部に向かってすぼまる。調整は内外面ハケメ後ナデで、全体的に丁寧にナデが施される。色調は内外面暗黄茶褐色～焦げ茶色を呈す。胎土には雲母・角閃石・赤褐色粒を含む。６は口縁部が強く外反し、端部は平坦である。頸部には断面三角形の突帯が廻る。調整は内外面磨滅しており不詳である。色調は内外面赤褐色を呈す。胎土には角閃石を密に含む。７は小型の甕であり、口縁部はほとんど欠損している。調整は外面が横方向タタキ、内面がナデである。内面には粘土の継ぎ目が残る。色調は内外面灰黄褐色を呈す。胎土には雲母が若干含まれる。

８・９は住居跡内の攪乱から出土した。８は須恵器の甕である。肩部に円形浮文が貼りつけられる。調整は外面がタタキ、内面が回転ナデである。色調は内外面灰色である。９は青磁である。体部～口縁部と見込みの大部分が欠損しており、文様は不詳である。全面施釉し、全体的に貫入があり、畳付のみ露胎する。高台は短く、先端は丸い。畳付内寄りに砂が付着する。色調は断面白色、釉調は緑白色を呈す。



第28図　1号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）

第 29 図　1 号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）

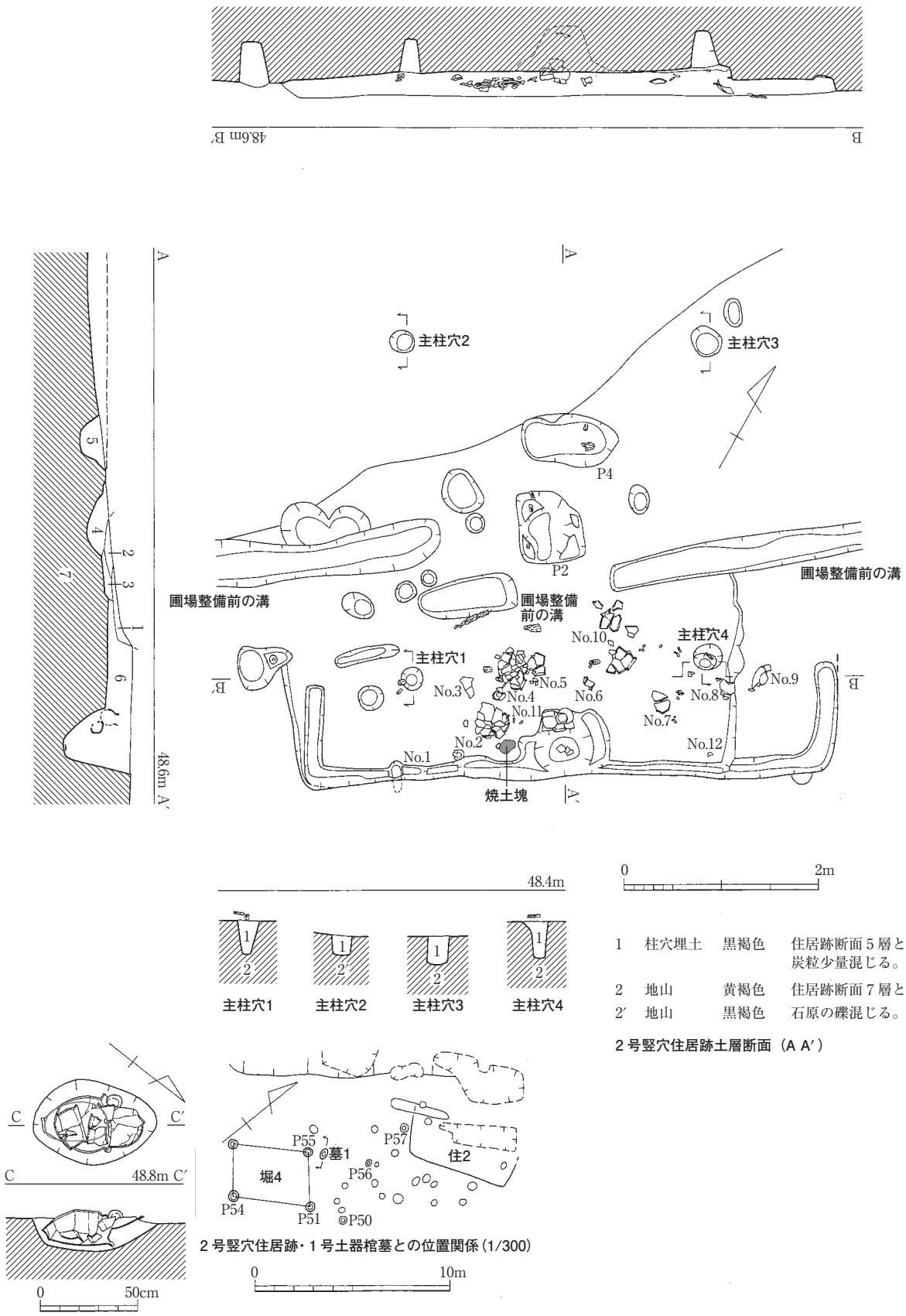
２号竪穴住居跡（第 30 図、図版 20）

調査区ほぼ中央に位置し、１号土器棺墓の北方に位置する。北半部は攪乱を受け、主柱穴が残存するのみであり、南側も圃場整備前の水路が重複するなど、残存状態が良いのは南側１／３である。主軸はＮ－ 30°－ Ｗで、規模は推定一辺 540cm、残存する深さは約 25cm、平面形は方形である。貼床はない。主柱は４本で、主柱穴は径約 20cm、深さは約 40cm である。柱痕跡はない。住居内東側には地山ブロック土を含む土で構築されたベッド状遺構があり、床面との比高差は約 10cm である。壁際溝は全周せず、東西辺は中央付近に達しない。屋内遺構は住居南壁に接して P1 があり、入口に関連する土坑か、貯蔵穴の可能性がある。P2 は住居中央に位置し、炭粒や焼土の存在から炉跡と考えられる。P2 の北には性格不明の P4 がある。住居南辺の壁際溝には斜めに穿たれた小穴２基があり、垂木を固定した穴の可能性があり、住居内には径約 10cm の炭化材が散在する。元位置を保つ遺物は床面から若干浮くため、住居廃絶後の埋没過程で投棄されたと考えられる。

出土土器から弥生時代後期の竪穴住居跡であると考えられる。

第６表　２号竪穴住居跡土層断面注記一覧

層番号	土層名	土色	特徴
1	溝埋土	灰色	圃場整備前。新しい。石原の礫混じる。
2	溝埋土	黒褐色	圃場整備前。新しい。5 層に似る。1 層の粒斑に混じる。
3	溝埋土	黄褐色	圃場整備前。新しい。7 層に似る。1・2 層の粒斑に混じる。
4	住居内 Pit02 埋土	黒褐色	炭粒・焼土粒斑に混じる。
5	住居内 Pit04 埋土	黒褐色	4 層に似るが炭粒少なく、焼土粒無し。
6	住居埋土	黒褐色	4・5 層に似る。壁際溝。
7	地山	黄褐色	小礫混じる。



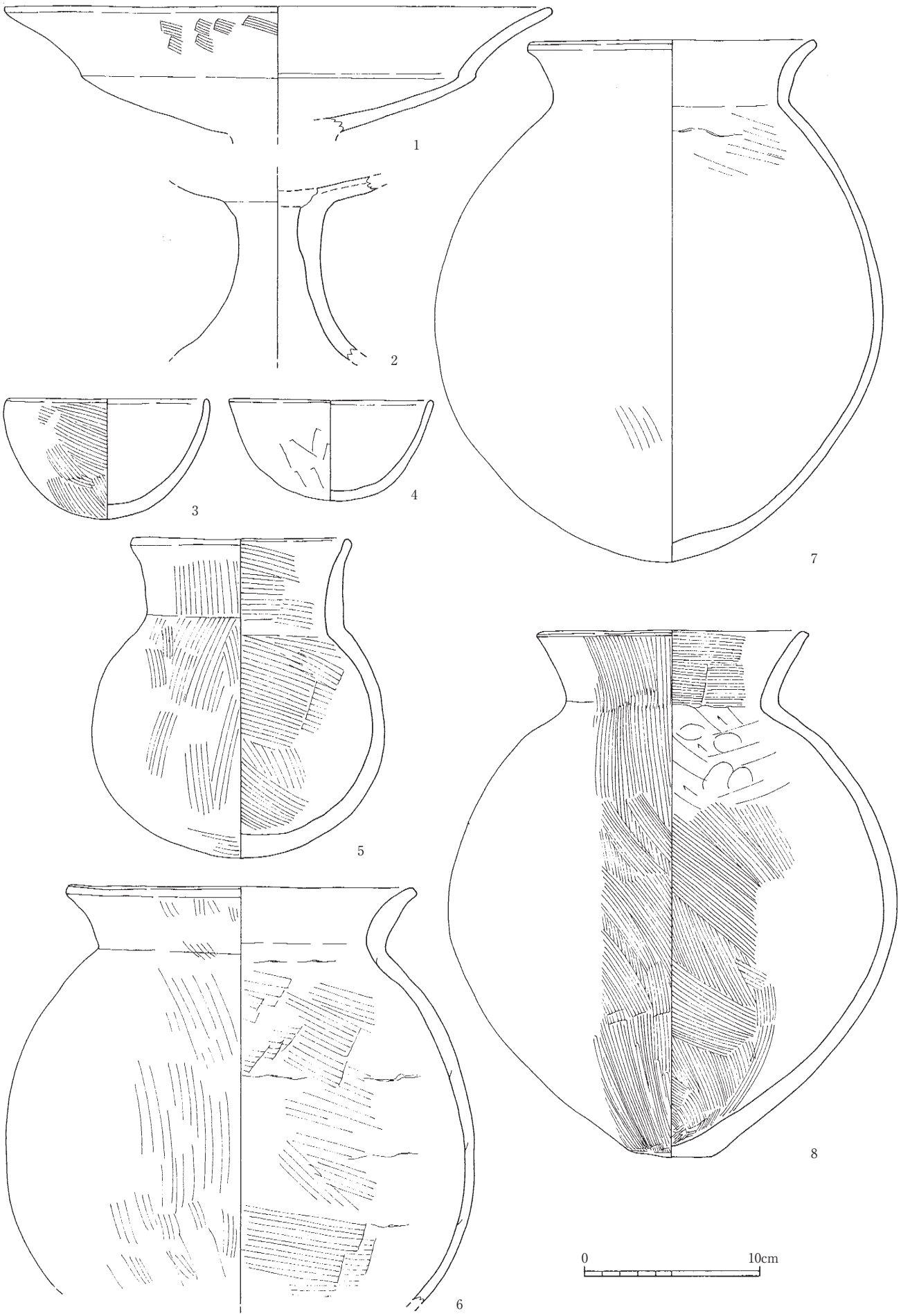
第30図　２号竪穴住居跡・１号土器棺墓実測図（1/60、1/30）

出土土器①（第 31 図、図版 25・26）

1 は高坏の坏部である。口縁部は受部から外反し、端部は丸い。調整は口縁部外面が斜方向のハケメ、内面・受部外面はナデである。色調は外面が暗黄茶褐色、内面が暗黄茶白褐色～茶褐色を呈す。胎土は精良だが、やや大きめの砂粒が若干含まれる。2 は高坏の脚部である。坏部との接合は充塡法であり、脚部から裾部にかけては緩やかに開く。調整は全体的に磨滅しており不詳であるが、脚部内面には絞り痕が確認できる。色調は内外面茶白褐色～灰黄褐色を呈す。外面には若干丹塗が残存しており、本来は全体に丹塗が施されていたと考えられる。胎土には雲母を含み、砂粒が密に混じる。3・4 は小型の鉢である。3 はやや内湾する口縁で、端部は丸い。底部は丸底であるが自立する。調整は外面が横方向ハケメ、内面が丁寧なナデである。色調は内外面灰褐色を呈す。胎土には砂粒を密に含む。4 は口縁部が外上方へ伸び、端部は丸い。底部は丸底であるが自立する。調整は口縁部外面がヨコナデ、体部～底部はナデであるが、器面の凹凸が著しく、調整不足である。内面は丁寧なナデである。色調は内外面灰茶褐色を呈し、底部付近に焼成時の黒斑がみられる。胎土は精良で砂粒は少ない。5～8 は壺である。5 は口縁部が若干外反し、端部は外面をナデることにより先端が細くなる。胴部から底部にかけては球形を呈し、底部は丸底である。調整は外面が縦方向のハケメ、内面が横方向のハケメであり、口縁部はハケメ後ナデである。色調は外面が黒褐色、内面が茶褐色を呈す。胎土に雲母を若干含む。6 は胴部過半以下を欠損する。口縁部は外反し、端部は丸い。胴部最大径付近では煤が若干付着する。調整は外面が縦方向ハケメ後ナデ、内面が横方向ハケメ後ナデである。内面は粘土の継ぎ目が残り、粘土帯の幅は約 4 cm である。色調は内面が褐色、外面が褐色～焦げ茶色を呈し、外面の頸部付近に焼成時の黒斑がみられる。胎土には雲母が含まれる。7 は口縁部が外反し、端部が丸、若干赤色顔料が残る。胴部最大径は胴部中位よりやや下位にあり、底部は丸底である。調整は外面が縦方向ハケメ後ナデ、内面が横方向ハケメ後ナデである。頸部内面には粘土の継ぎ目が残る。色調は内外面褐色を呈し、胴部中位～下位に焼成時の黒斑がみられる。8 は口縁部が外反し、端部は平坦である。頸部から胴部は緩やかに膨らみ、胴部中位が最大径となる。底部は平底である。調整は外面が縦方向ハケメで、胴部中位は斜方向ハケメ、口縁部はハケメ後ナデである。内面は底部～胴部までが縦方向あるいは横方向ハケメ、肩部はユビオサエによる凹凸が残り、口縁部は横方向ハケメである。色調は内外面橙褐色～黄橙色を呈し、胴部中位内面と胴部下位外面に焼成時の黒斑がみられる。胎土には砂粒が多く含まれる。

出土土器②（第 32 図、図版 26）

1 は長胴の甕である。口縁部の歪みが大きく、平面形は長軸 22cm、短軸 19.5cm の楕円形を呈す。口縁部は短く外反し、端部は丸い。胴部最大径は口縁部径とほぼ同じで、底部は丸底である。調整は外面が口縁部はハケメ、胴部中位以上は横方向タタキ、胴部下位～底部はタタキ後縦方向ハケメである。内面は口縁部～胴部中位がハケメ、胴部下位～底部はナデである。色調は内外面黄褐色であり、胴部外面には焼成時の黒斑がみられる。胎土は雲母・赤褐色粒を含む。2 は埋土中の遺物であり、甕か。口縁部は直線的に外反し、端部は平坦である。頸部の屈曲は大きくないが、内面にはやや稜が付く。調整は外面が縦方向ハケメで頸部から口縁部まで一括で施す。内面は口縁部が横方向ハケメ、頸部は斜方向ハケメ後横方向ハケメである。色調は外面が暗黄茶褐色、内面が茶褐色を呈す。胎土には雲母・角閃石を含む。



第31図　2号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）

１号土器棺墓（第 30 図、図版 20・21）

調査区中央南寄りに位置し、４号掘立柱建物と２号竪穴住居跡の間に位置する。主軸はＮ－ 36°－ Ｗで、墓壙の規模は長軸約 65cm、短軸約 47cm、残存する深さは約 25cm で、平面形は楕円形を呈す。合わせ口の小児棺で、北西側に上甕、南東側に下甕を配し、合わせ目に扁平な円礫を咬む。上半分は後世の攪乱により破壊され、下半分のみ残存する。埋土は暗茶褐色～黒褐色土である。
位置関係から２号竪穴住居跡に伴う遺構であり、弥生時代後期の土器棺墓と考えられる。

出土土器（第 32 図、図版 26）

３は上甕である。口縁部は跳上口縁であり、胴部最大径は口縁部径より小さい。調整は口縁部が内外面ヨコナデ、胴部は内外面ナデで、内面は特に丁寧なナデである。色調は内外面白黄褐色を呈す。胎土には角閃石・雲母・赤褐色粒が含まれる。４は下甕の口縁部～胴部である。口縁部はやや跳上気味で、胴部最大径は口縁部径とほぼ同じである。調整は口縁部がヨコナデ、胴部はは内外面ナデである。色調は外面が暗黄茶褐色、内面が黄橙色を呈す。胎土には砂粒が多く、雲母・赤褐色粒を含む。５は下甕の底部である。底部は平底である。調整は外面ナデ、内面は磨滅しており不詳である。色調は外面が淡橙褐色、内面が焦げ茶色を呈す。胎土は４と同様である。

掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（第 33 図、図版 21）

調査区東端に位置する。梁行２間・桁行３間の側柱建物跡である。主軸はＮ－ 38°－ Ｅで、規模は桁行総長 472cm、梁行総長 384cm である。柱間寸法は桁間約 150cm、梁間約 190cm である。柱穴の規模は径 40cm、深さ 80cm である。柱痕跡はなく、埋土は焼土混じりの黒褐色土である。
出土遺物はなく、時期は不明である。

２号掘立柱建物跡（第 33 図、図版 21）

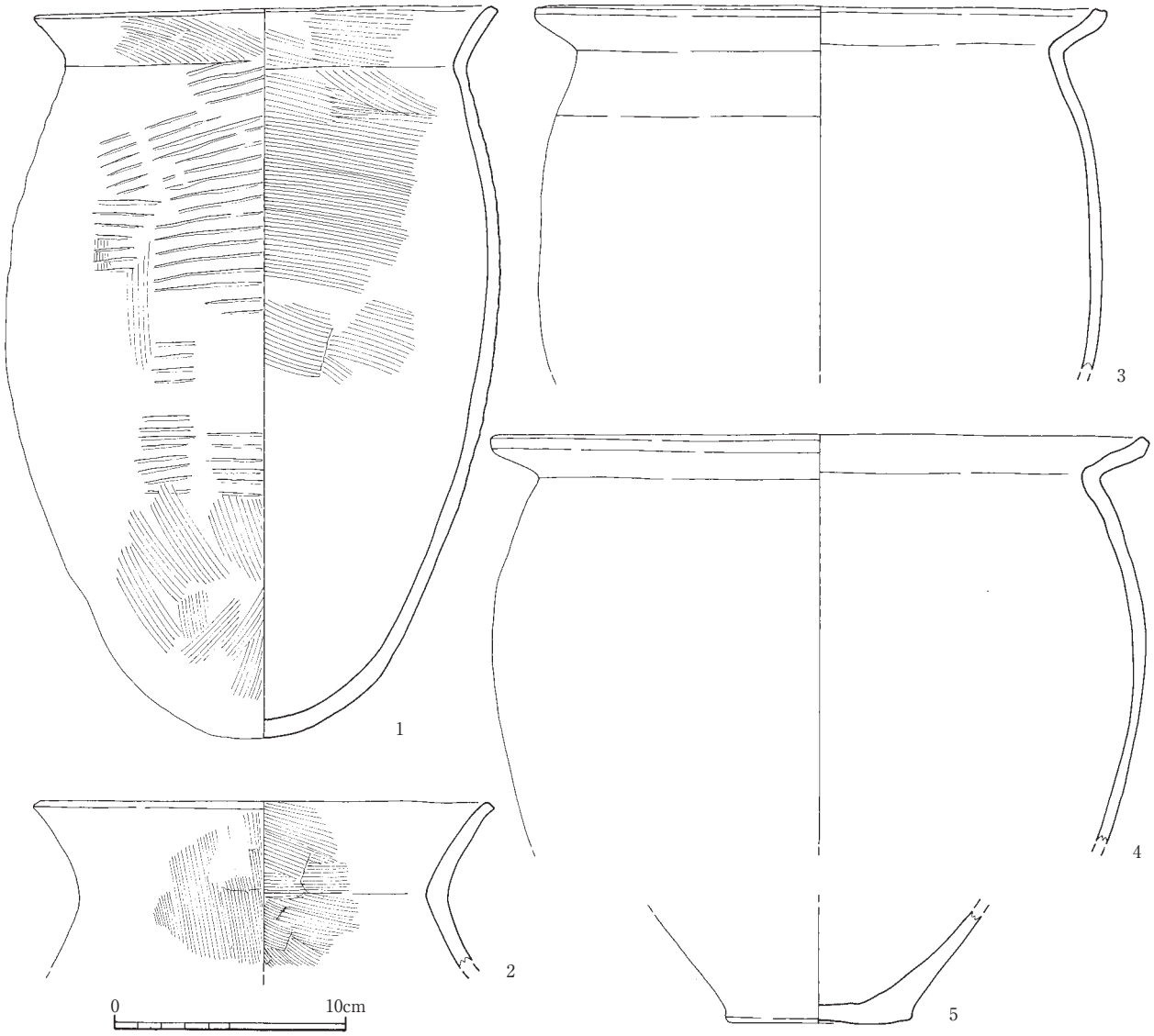
調査区東側の１号竪穴住居跡と３号掘立柱建物跡の中間に位置する。北東の柱穴は検出できなかったが、梁行１間・桁行２間の側柱建物跡である。主軸はＮ－ 52°－ Ｗで、規模は桁行総長 340cm、梁行総長 216cm である。柱間寸法は桁間約 180cm、梁間約 210cm である。柱穴の規模は径約 40cm、深さ約 48cm である。柱痕跡はなく、埋土は黒褐色土である。
出土遺物はなく、時期は不明である。

３号掘立柱建物跡（第 34 図、図版 22）

調査区東側に位置する。１・２号掘立柱建物跡の間に位置する。桁行２間・梁行２間の側柱建物跡である。個々の柱穴は２基ずつ重複しており、建替えが認められる。主軸はＮ－ 35°－ Ｅで、規模は桁行総長 400cm、梁行総長 292cm である。柱間寸法は桁間約 230cm、梁間約 200cm である。柱穴の規模は径約 50cm、深さ約 80cm である。柱痕跡はなく、埋土は黒褐色土である。
出土遺物に弥生土器が含まれるが、該期の遺構とは特徴が異なる。中世か。

出土土器（第 36 図、図版 26）

１～３は P7 最下層から出土した。１・２は壺あるいは甕の底部である。１は外側に張出す平底で、板圧痕が残る。調整は内外面ナデである。色調は外面が橙褐色、内面が暗灰色を呈す。胎土

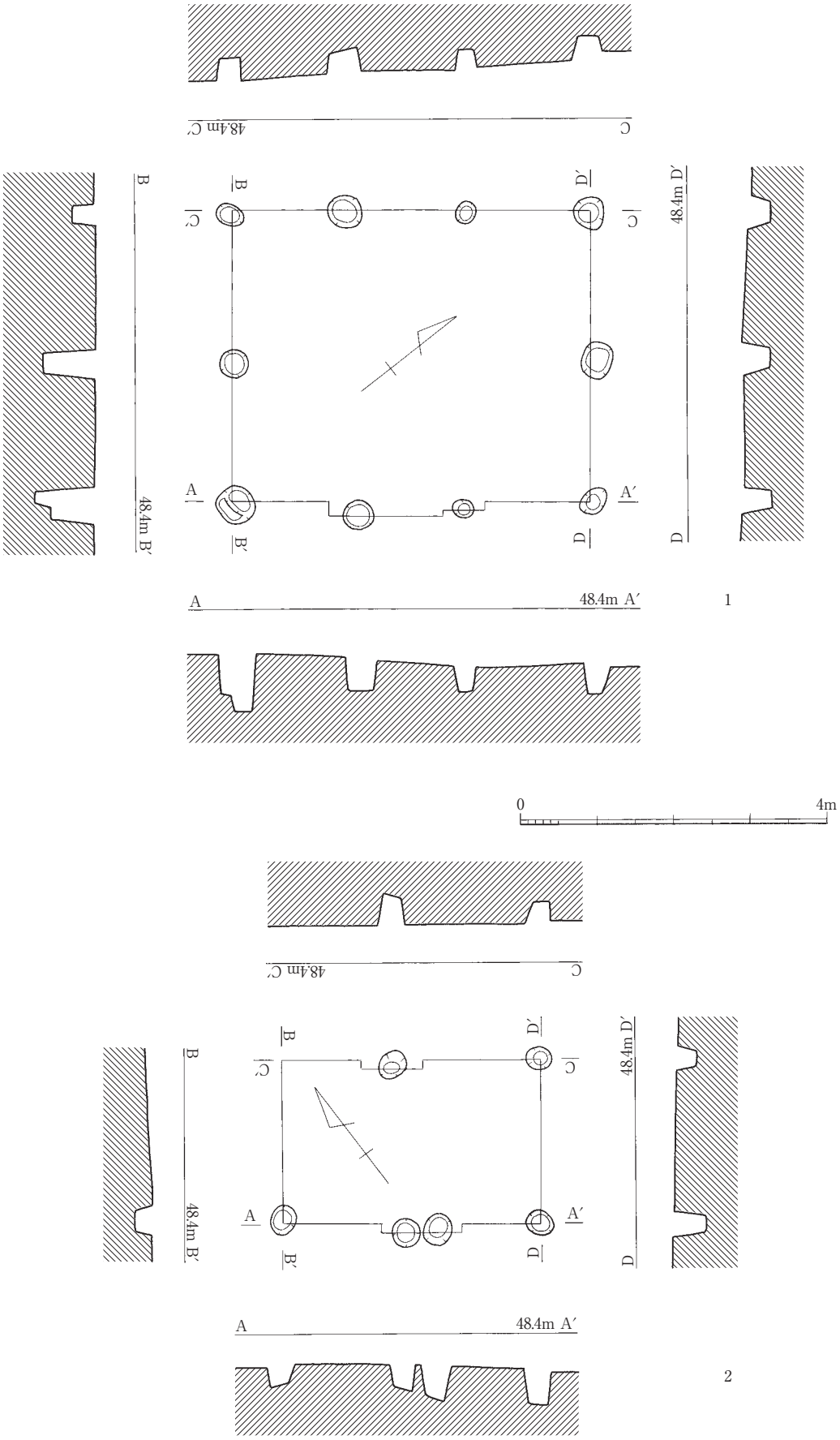


第 32 図　２号竪穴住居跡出土土器実測図②・１号土器棺出土土器実測図（1/3）

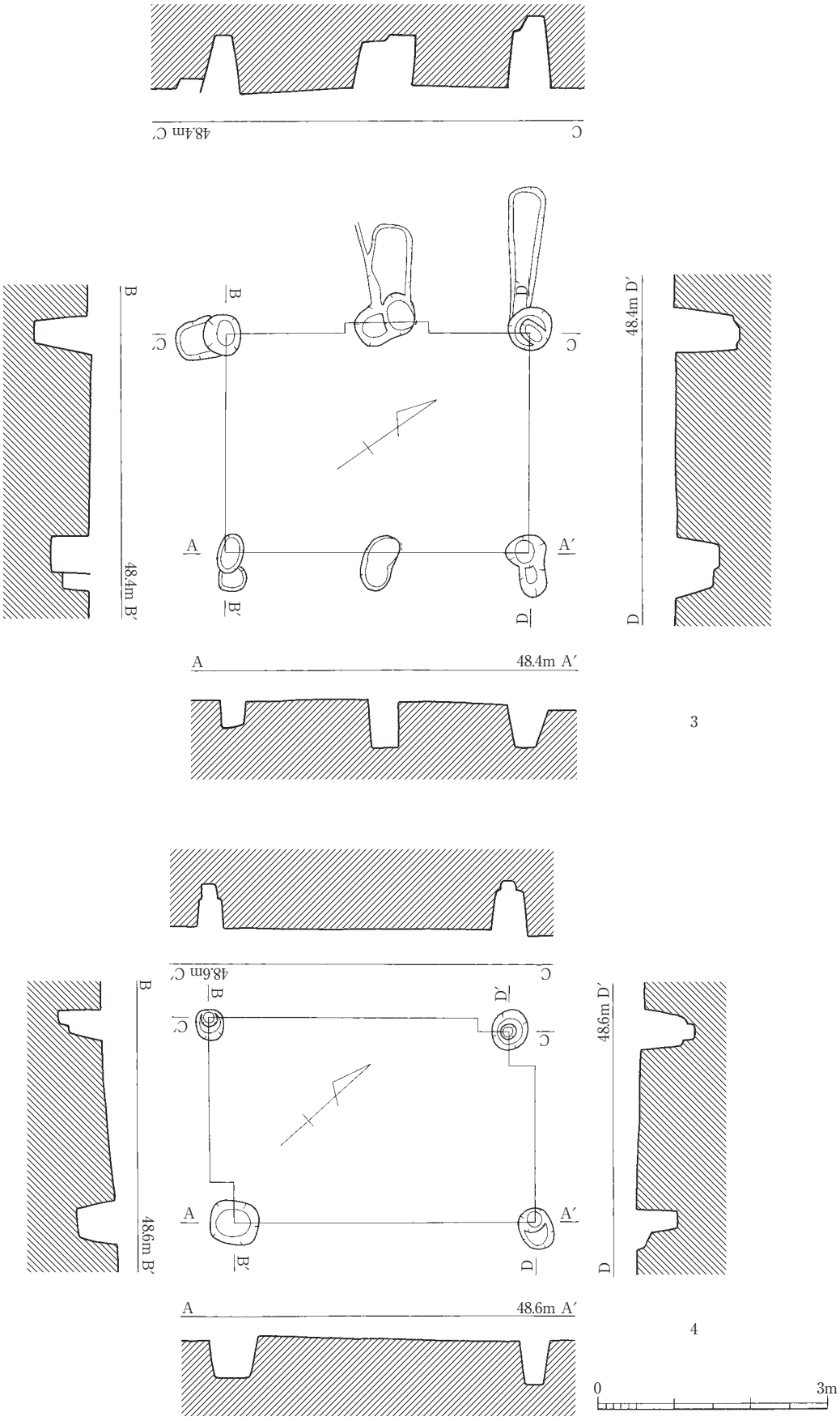
には砂粒を密に含む。２はやや張出す平底である。内面は剥離しており不詳である。調整は外面がナデである。色調は外面が橙褐色～灰黄褐色を呈す。胎土には砂粒を密に含む。３は器種不明、口縁部か、端部は平坦である。円弧が緩く、径は大きい。内外面丹塗が残る。調整は内外面ヨコナデである。色調は赤茶色～灰黄色を呈す。胎土に砂粒が少ない。

４号掘立柱建物跡（第 34 図、図版 22）

調査区中央南側に位置し、１号土器棺墓に近接する。桁行１間・梁行１間の側柱建物跡である。主軸はＮ－ 48°－Ｅで、規模は桁行総長 400cm、梁行総長 270cm、柱間寸法も同値である。柱穴規模は径約 50cm、深さ約 80cm で、柱痕跡はなく、埋土は黒褐色土である。
出土遺物はなく、時期は不明である。



第33図　1・2号掘立柱建物跡実測図（1/80）



第34図　3・4号掘立柱建物跡実測図（1/80）

土坑墓・土坑・溝

１号土坑墓（第 35 図、図版 22・23）

調査区東側に位置し、２号掘立柱建物と１号竪穴住居跡の間に位置する。主軸はＮ－ 33°－ Ｗで、規模は長軸 164cm、短軸 84cm、平面形は長方形を呈す。墓壙中央の床から約 15cm 上位に 30cm 大の扁平な石３個が水平に並ぶ。北西隅付近では、石の下位の埋土中から土師器椀が２点出土した。埋土はにぶい黄褐色土である。

出土土器から平安時代後期（11 世紀代頃か）の土坑墓と考えられる。

出土土器（第 36 図）

４・５は土師器椀である。４・５ともに体部が丸味をもち、口縁端部は丸い。底部は糸切痕が確認できる。４は高台は短くやや外向きで、５は外側に張出す。調整は磨滅のため不鮮明であるが、ナデであろう。色調は内外面白黄茶色を呈す。胎土には赤褐色粒を多量に含む。

１号土坑（第 35 図、図版 23）

調査区西端に位置する。主軸はＮ－ 56°－ Ｗで、規模は長軸 284cm、短軸 140cm の不成形土坑である。削平を受けており、堆積が薄いが、最下層から黒色土器坏が出土した。

出土土器から９世紀代以降に埋没した土坑であると判断できるが、性格は不明である。

出土土器（第 36 図）

６は黒色土器（内黒）椀である。体部は開き口縁端部は丸い。高台はやや長く、外側に張出す。調整は外面がヨコナデ、内面がミガキである。色調は外面が灰褐色、内面が黒色を呈す。胎土には雲母・角閃石を含む。

２号土坑（第 35 図、図版 24）

調査区西端に位置し、１号溝状遺構と重複し、後出する。拳大～人頭大の礫が中央に集中するが、人為的な配置は認められず、土とともに堆積したと考えられる。

出土土器から時期は判断し難く、性格も不明である。

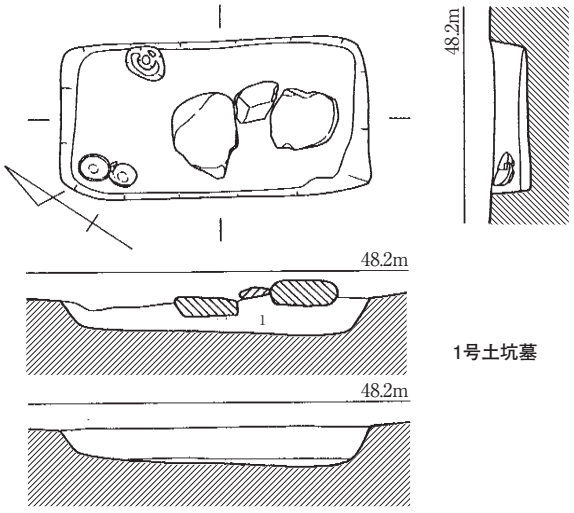
出土土器（第 36 図７・８）

７は平底の底部である。調整は内外面磨滅のため不詳である。色調は外面が淡橙褐色、内面が灰黄色を呈す。胎土に角閃石、雲母を含む。８は土師器の高台付底部である。調整は高台部分はナデ、その他は磨滅のため不詳である。色調は内外面淡橙褐色を呈す。胎土に雲母を含む。

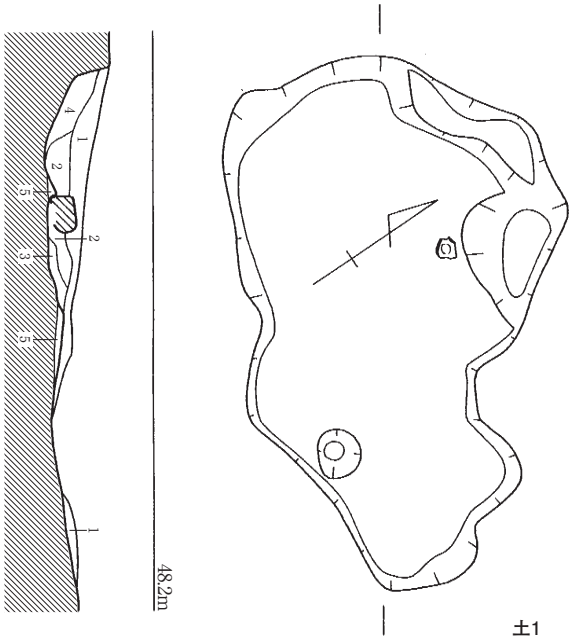
１号溝（第 35 図、図版 24）

調査区西端に位置し、１号土坑と重複し、先行する。約６ｍ分検出したが、両端は調査区外に伸びる。主軸はＮ－ 32°－ Ｅで、規模は幅約 50cm、深さ約 30cm である。

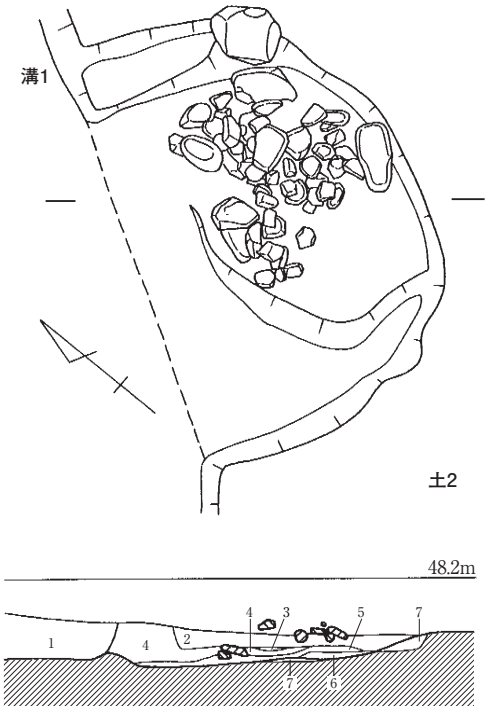
圃場整備前の水田の用水路の可能性がある。



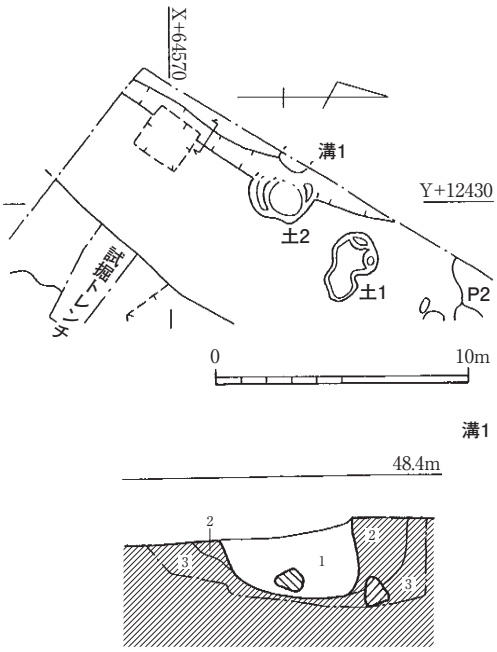
1　にぶい黄褐色粘質土　　10YR4/2
　粘性やや強。きめ細かい。
　黒褐色（10YR3/2）が混じる。
　擬固した鉄分（黒色）が　少量混じる。



1　黒褐色粘質土　床土下位。須恵器包含。
2　黒褐色粘質土　粘性弱。1層よりやや茶色味が強い。
3　黒褐色粘質土　明褐色粘質土が混じる。1・2層より粘性強。
4　褐色粘質土　3層に似る。粘性弱。
　この層の下位で黒色土器杯が出土。
5　黄褐色粘質土　地山。拳大～人頭大の礫多し。



1　1号溝埋土
2　黒褐色粘質土　7.5YR3/1　拳大の礫多し。
　平面図の礫はこの層中。
3　暗褐色粘質土　7.5YR3/3　粘性弱。砂粒多し。
　褐色粘質土混じる。
4　黒褐色土　7.5YR2/2　粘性弱。2層よりやや明るい。
　砂粒多し。1～5cmの礫あり。
5　黒褐色粘質土　7.5YR3/1　灰褐色（7.5YR4/2）が
　マーブル状に混じる。礫少ない。
6　褐色粘質土　10YR4/4　粘性弱。黒褐色土が斑に混じる。
7　にぶい黄褐色砂礫　10YR4/3　地山。やや灰色味を帯びる。
　1cm以下の礫多い。硬い。



1　暗褐色粘質土　10YR3/3　粘性強。
　1～2.5cmの礫少量。
2　褐色粘質土　10YR4/6　粘性強。地山。
3　灰黄褐色砂礫　10YR4/2　地山。1cm以下の礫多い。
　大きいものは3cm程度。
　褐色砂礫が部分的に混入。

0　2m

第35図　1号土坑墓、1・2号土坑、1号溝実測図（1/40、1/300）

その他の遺構出土土器・遺構外出土土器（第 36 図）

ピット出土土器（9：P14、10：P15、11・12：P1、13：P2、14：P41）

9・10 は弥生時代中期の土器である。9 は上面は平坦で鋤形口縁であり、外面は口縁部の下位に段を設ける。調整は内外面ナデである。内外面に丹塗りを施し、色調は内外面赤茶色～灰黄褐色を呈す。胎土に角閃石・雲母を含む。10 は胴部で外面に 2 条の突帯をめぐらす。調整は内外面ナデである。外面に丹塗りを施し、色調は外面が赤褐色、内面が灰黄色を呈す。胎土に角閃石・雲母を含む。11 は土師器皿か坏である。平安時代後期か。口縁部はやや内湾し、端部は細く丸い。調整は内外面ナデである。色調は内外面白黄茶色を呈す。胎土は精良で砂粒等はほとんど含まない。12 は須恵器壺か。口縁端部は上方へ摘み上がり、頸部は強く湾曲する。調整は内外面回転ナデである。色調は内外面灰黄色を呈す。13・14 は弥生時代後期の土器の甕である。口縁部は外反し、端部は平坦でやや跳ね上げる。調整は 13･14 ともに胴部外面がハケメ後ナデ、他はナデである。色調は 13 が灰黄色、14 が灰黄褐色を呈す。ともに胎土には雲母を含み、14 には角閃石も含む。

表土出土土器（15 ～ 18）

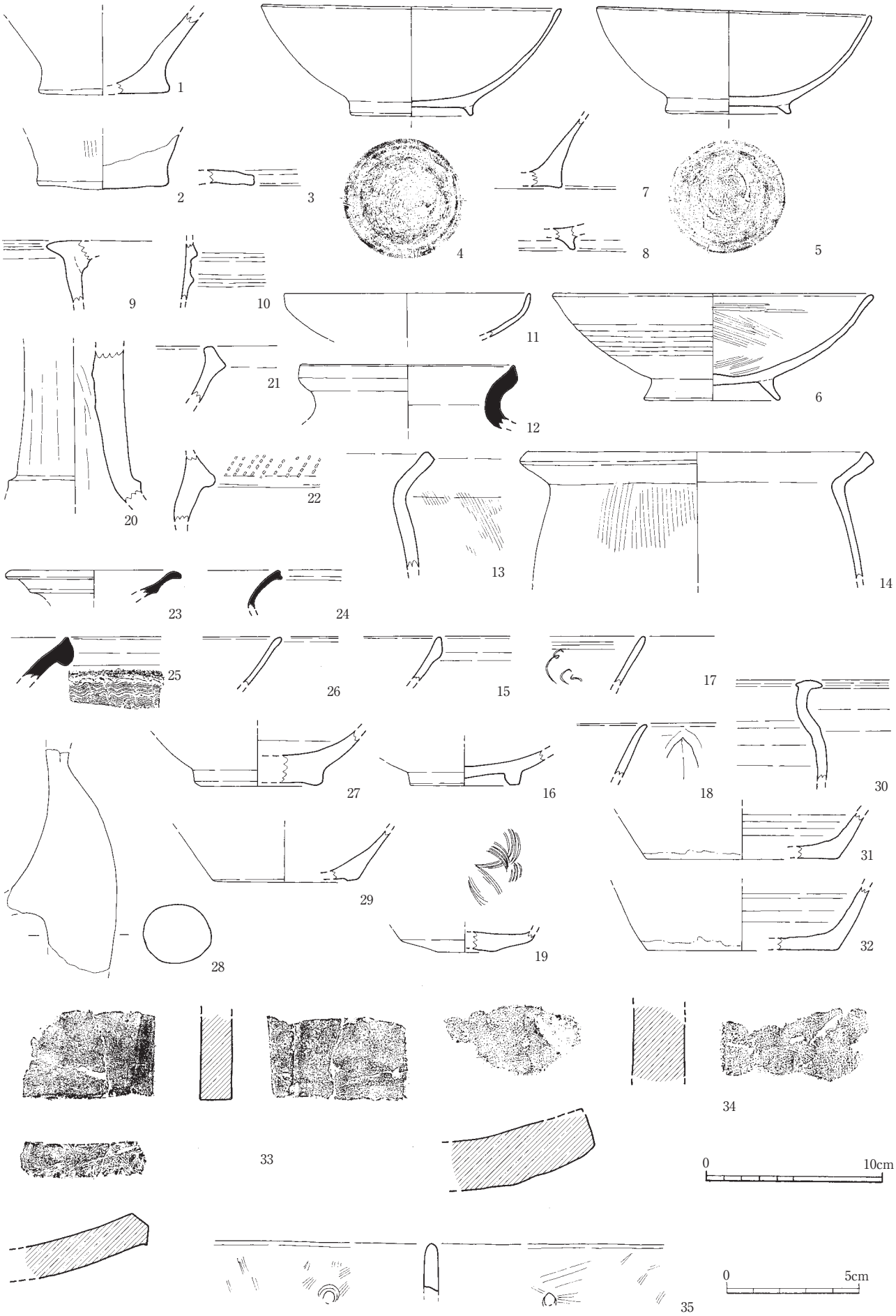
15・1 6 は白磁である。15 は玉縁をもつ口縁である。釉調は灰黄色を呈す。12 世紀前半頃か。16 は底部である。高台は厚く、高台部分は露胎する。17・18 は龍泉窯系青磁である。17 は椀の口縁部である。口縁部内面に片彫りによる 2 条の沈線をめぐらし、その下に草花文を描く。釉調は黄緑色を呈す。時期は 12 世紀後半である。18 は外面に蓮弁を有し、中心に不明瞭ながら稜をもつ。釉調は青緑色を呈す。時期は 13 世紀代か。

検出時出土土器（19）

19 は龍泉窯系青磁の皿である。底部は碁笥底で、見込みの文様は櫛描きである。釉調は黄緑色を呈す。時期は 12 世紀後半である。

遺構外出土土器（20 ～ 32）

20 ～ 22 は弥生時代中期～後期の土器か。20 は高坏脚部である。裾部との境に段を有する。調整は外面が縦方向工具ナデで稜をもち、内面には絞り痕がある。外面には丹塗りが施され、色調は外面が赤褐色、内面が黒灰色を呈する。胎土には雲母・角閃石を含む。21 は器種不明の口縁部であり、端部は平坦である。口縁部外面に断面三角形の突帯をめぐらす。調整は内外面ナデ、口縁部内面から外面にかけて丹塗りが残り、色調は外面が茶褐色、内面が灰黄褐色を呈す。胎土に雲母を含む。22 は壺口縁部であり、瀬戸内系である。口縁部外面に貝殻刺突文をめぐらす。調整は内外面ナデ、文様帯には丹塗りが残り、色調は内外面灰黄褐色を呈す。23 ～ 25 は須恵器である。23・24 は 8 世紀代の壺か。23 は口縁部の屈曲部外面には粘土を追加し、稜をつくる。端部は大きく外反し、先端は丸い。調整は内外面回転ナデである。色調は暗灰色を呈す。24 は口縁は強く外反し、端部は平坦で、やや下方に伸びる。調整は内外面回転ナデである。色調は内外面灰色である。25 は甕か。口縁部は玉縁状を呈し、外面には波状文を施す。調整は内外面回転ナデである。色調は外面が暗灰色、内面が暗灰色を呈す。26 は黒色土器（内黒）椀である。口縁端部はやや外反し、先端は丸い。調整は外面がナデ、内面がミガキである。色調は外面が灰黄色、内面が黒色を呈す。



第36図　3号掘立柱建物跡、1号土坑墓、1・2号土坑、その他の遺構、遺構外出土土器、瓦（1/3）・石器実測図（1/2）

時期は 10 ～ 11 世紀代か。27 は白磁椀の底部である。高台の刳りは浅く、底部が厚い。見込みには体部との境に沈線が廻る。外面は露胎する。釉調は灰白色を呈す。時期は 11 世紀後半～ 12 世紀前半頃か。28 は足鍋の脚部である。調整は内面ナデ、外面は粗いナデである。色調は灰黄褐色、脚部内面は被熱により赤褐色を呈す。胎土に角閃石・黒曜石（姫島産ではない）が含まれる。29 は陶器の底部である。高台の刳りは浅く、畳付はやや広い。高台分と外面底部付近は露胎する。釉調は黄茶色を呈す。時期は近世以降か。30 ～ 32 は小石原焼か。30・31 は同一個体の甕である。30 は口縁部である。端部は外面に大きく、内面に少し張り出す。口縁部以外の内外面に施釉するが焼成不良で発色が悪くザラつく。31 は底部である。底部は露胎する。30･31 ともに胎土は淡褐色、釉調は灰黄色を呈す。32 は甕底部であり、外面に施釉する。胎土は赤褐色、釉調は灰黄色を呈す。

瓦（33・34）

遺構外から出土した平瓦である。33 は側縁と端面を含む破片である。側縁は二面に面取りされる。凹面凸面ともに丁寧にナデが施され、タタキ等の痕跡は不詳である。色調は内外面かおい黄褐色を呈す。胎土は精良で、砂粒は少ない。34 は側縁を含む破片である。側縁はケズリにより面取りされる。凹面凸面ともナデが施されるが、器面の凹凸が残る。また、タタキ等の痕跡はナデにより不詳である。色調は内外面灰色を呈す。胎土にやや大きめの砂粒が少量含まれる。

凹面凸面の状況が不詳ながら古代の瓦と考えられる。

石器（35）

35 は２号土坑から出土した粘板岩製石包丁である。残存長 6.8cm、残存幅 2.5cm、厚さ 0.5cm、刃部は欠損する。孔は１つ残存しており、一方向からの穿孔であり、外径 0.8cm、内径 0.5cm を測る。背は丸く、全体は平滑に研磨されている。この他、姫島産黒曜石の砕片が数点出土した。

4　まとめ

縄文時代は後期～晩期の土器を確認した。当遺跡周辺では佐井川の上流に後期の狭間宮ノ下遺跡が、晩期の河原田塔田遺跡がある。弥生時代中期は丹塗土器の出土が特徴的である。なお、当遺跡の南側には前期末～中期後半の集落遺跡で青銅器が出土した鬼木四反田遺跡がある。弥生時代後期は竪穴住居跡２棟・土器棺墓１基が確認された。小規模集落なのか、集落の周縁部であるのか不明だが、遺跡が立地する平野部の集落分布の一端を窺うことができよう。なお、佐井川下流域には大規模集落である小石原泉遺跡がある。古墳時代は遺構もなく、遺物も少量である。当遺跡から約 800m 北方の岩岳川の右岸にはオンドル状遺構をもつ集落が展開する。掘立柱建物跡については、第１次調査で検出された奈良時代以降の掘立柱建物跡と規模や主軸の方向、柱穴の形状が似ることから、同時期の可能性がある。奈良時代は他に須恵器や瓦が少量出土した。佐井川上流域に由来となる官衙あるいは寺院跡があるのであろうか。平安時代の９世紀代は性格不明の土坑から黒色土器が出土した。１号土坑墓は副葬品から 11 世紀代と考えられる。平安時代後期の 12 世紀代は青磁・白磁が出土し、足鍋の脚部が出土したことから中世の遺物も存在する。近世には小石原焼の可能性がある陶器が出土しており、幅広い時期の遺構と遺物が出土した。

今回の調査では遺構密度は稀薄であったが、当遺跡周辺の扇状地における遺跡分布の在り方や、弥生時代後期の集落の展開、古代の集落遺跡の様相を窺う資料が得られた。また、遺構外出土遺物は遺跡周辺に由来が求められるため、未知の遺跡の存在にも注意を払う必要がある。

図　版

1. 鳥越下屋敷遺跡遠景
（空中写真　南から）

2. 鳥越下屋敷遺跡全景
（空中写真　西から）

図版２

１．１～３号土坑（北から）

２．１号土坑（西から）

３．１号土坑土層（西から）

１．３号土坑（東から）

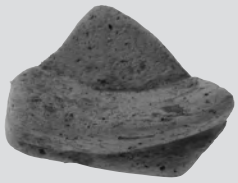
２．４号土坑（東から）

３．１～４号溝（北から）

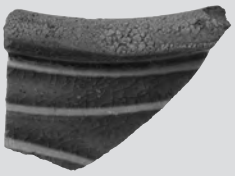
第８図 -1

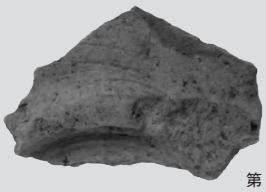
第８図 -2

第８図 -3

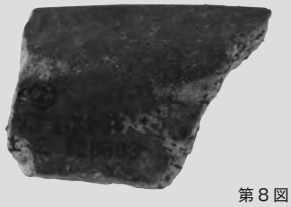

第８図 -4

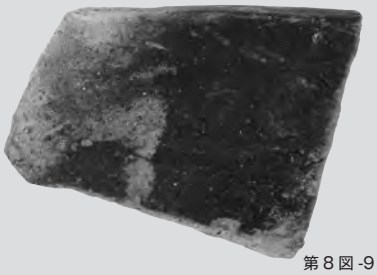
第８図 -5


第８図 -11


第８図 -6

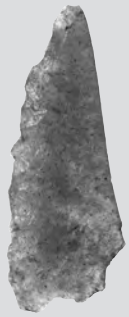
第８図 -7

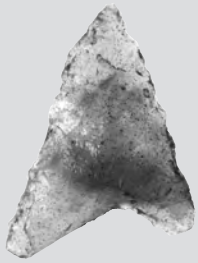

第８図 -8

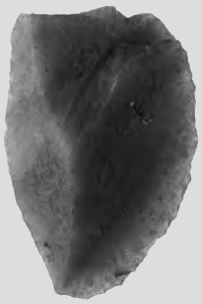

第８図 -9

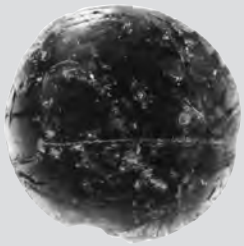
第８図 -10

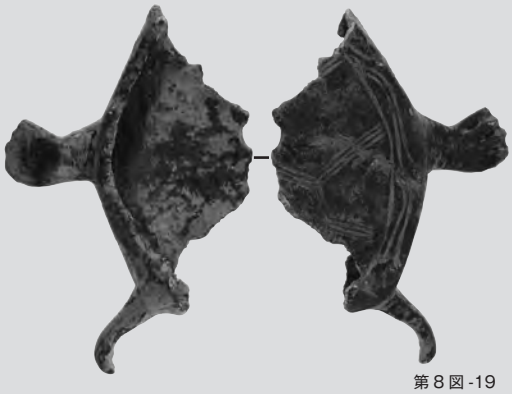
第８図 -14

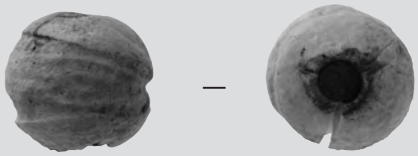

第８図 -16


第８図 -15


第８図 -17


第８図 -22


第８図 -19


第８図 21

第８図 23

鳥越下屋敷遺跡出土遺物

1. 大村湯福遺跡遠景
（空中写真　北から）

大村湯福
2. ~~宝山小出~~遺跡遠景
（空中写真　南から）

図版６

1. 西半部全景
（空中写真　東から）

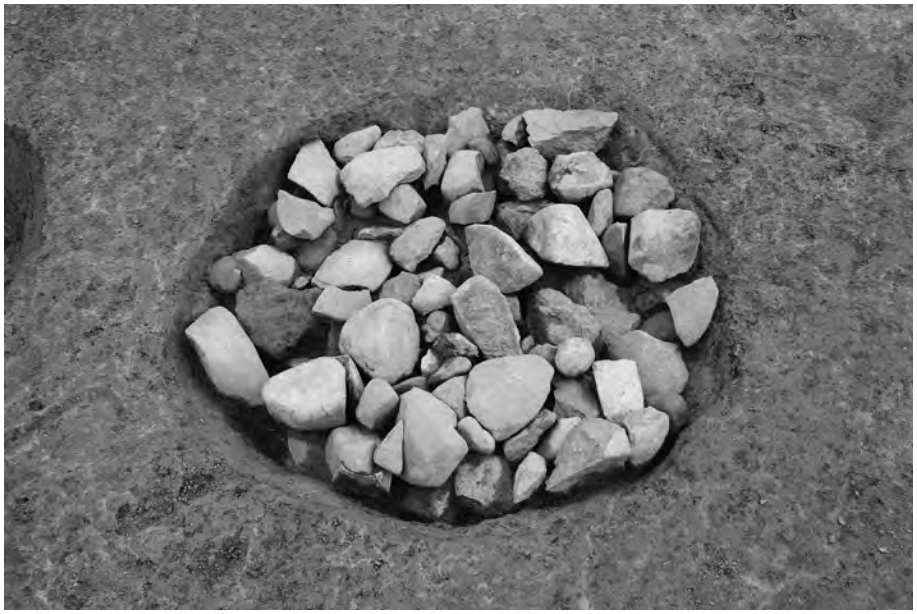
2. 西半部全景（空中写真）

3. 東半部全景
（空中写真　東から）

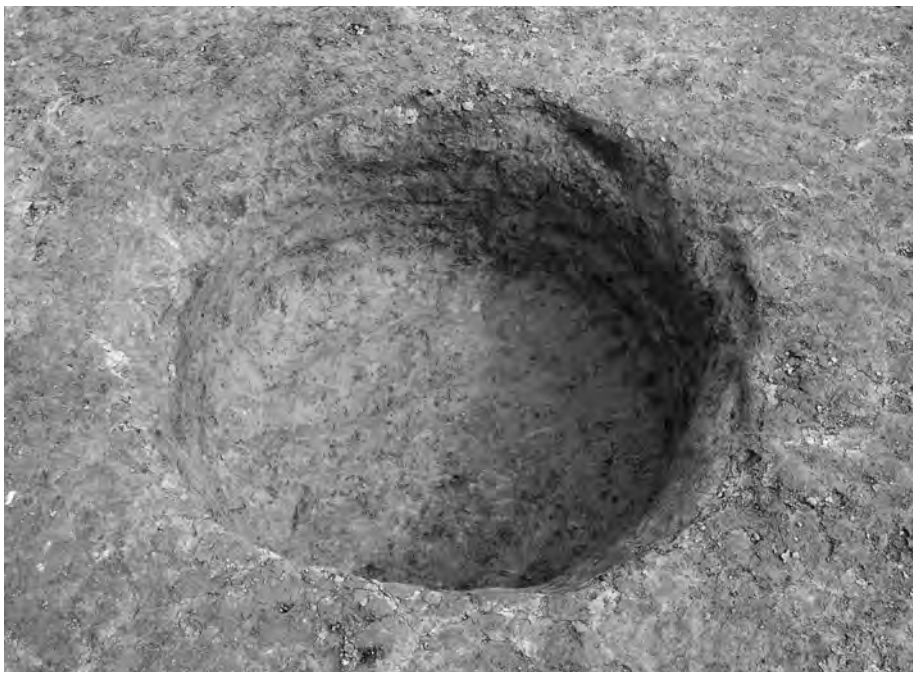
1.東半部全景（空中写真）

2．１号土坑（検出状況　東から）

3．１号土坑（掘削状況　東から）



１．２号土坑（検出状況　南から）



２．２号土坑（掘削状況　西から）

３．３号土坑（南から）

１．１～３号溝（空中写真）

２．１号溝（南から）

３．３号溝（東から）

第 12 図 -1

第 12 図 -3

第 12 図 -6

第 14 図 -4

第 14 図 -5

第 14 図 -9

第 14 図 -10

第 14 図 -11

第 14 図 -13

第 14 図 -15

第 14 図　-17

大村湯福遺跡出土遺物①

第 14 図 -24

第 15 図 -31

第 15 図 -32

第 16 図 -1

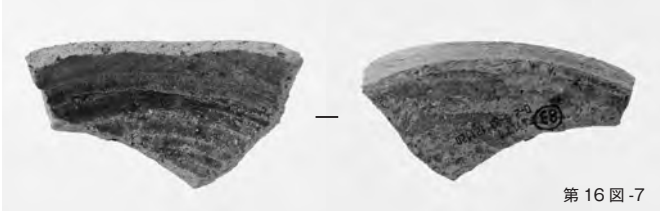
第 16 図 -2

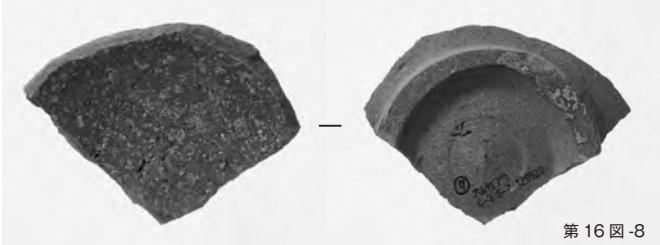
第 16 図 -3

第 16 図 -4

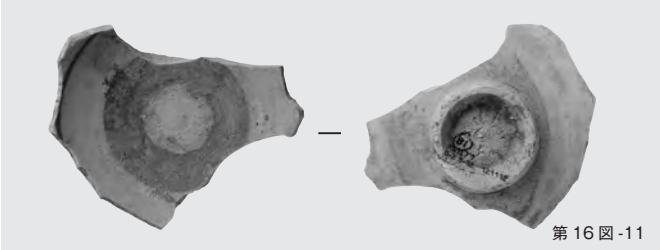
第 16 図 -5

第 16 図 -6

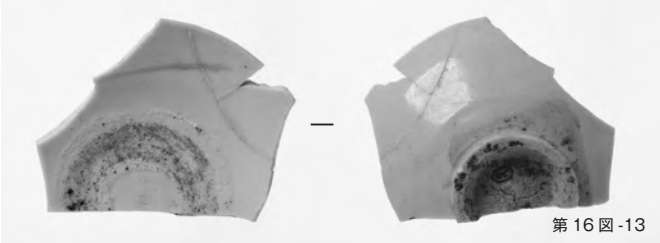

第 16 図 -7

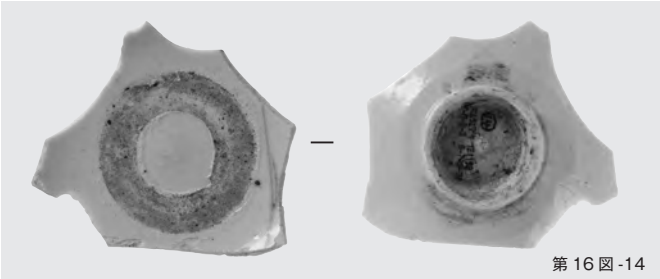

第 16 図 -8

大村湯福遺跡出土遺物②


第 16 図 -11

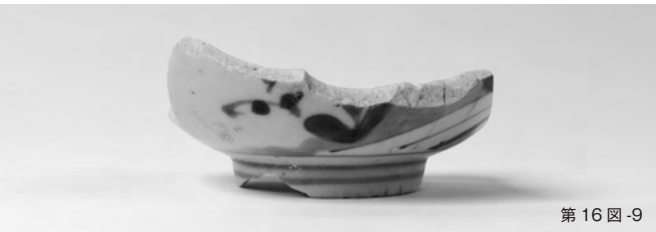
第 16 図 -12


第 16 図 -13


第 16 図 -14

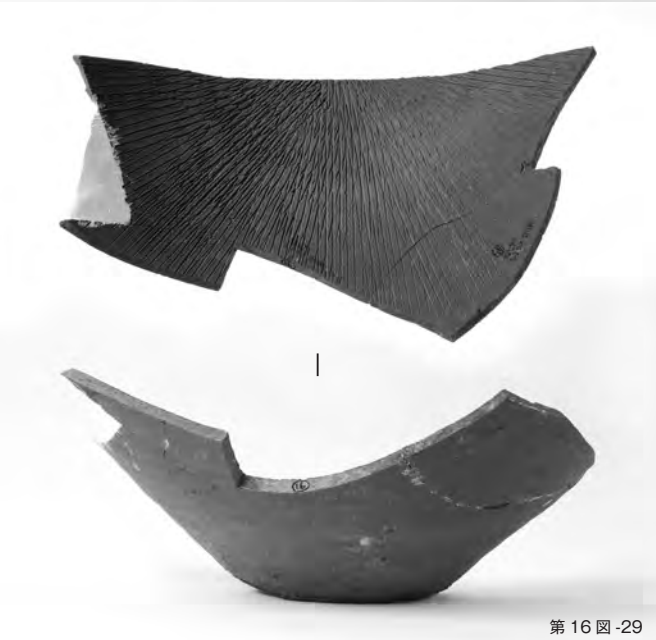
第 16 図 -15

第 16 図 -16

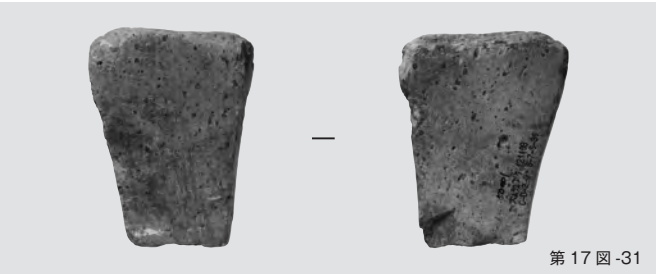

第 16 図 -9

第 16 図 -10

第 16 図 -24

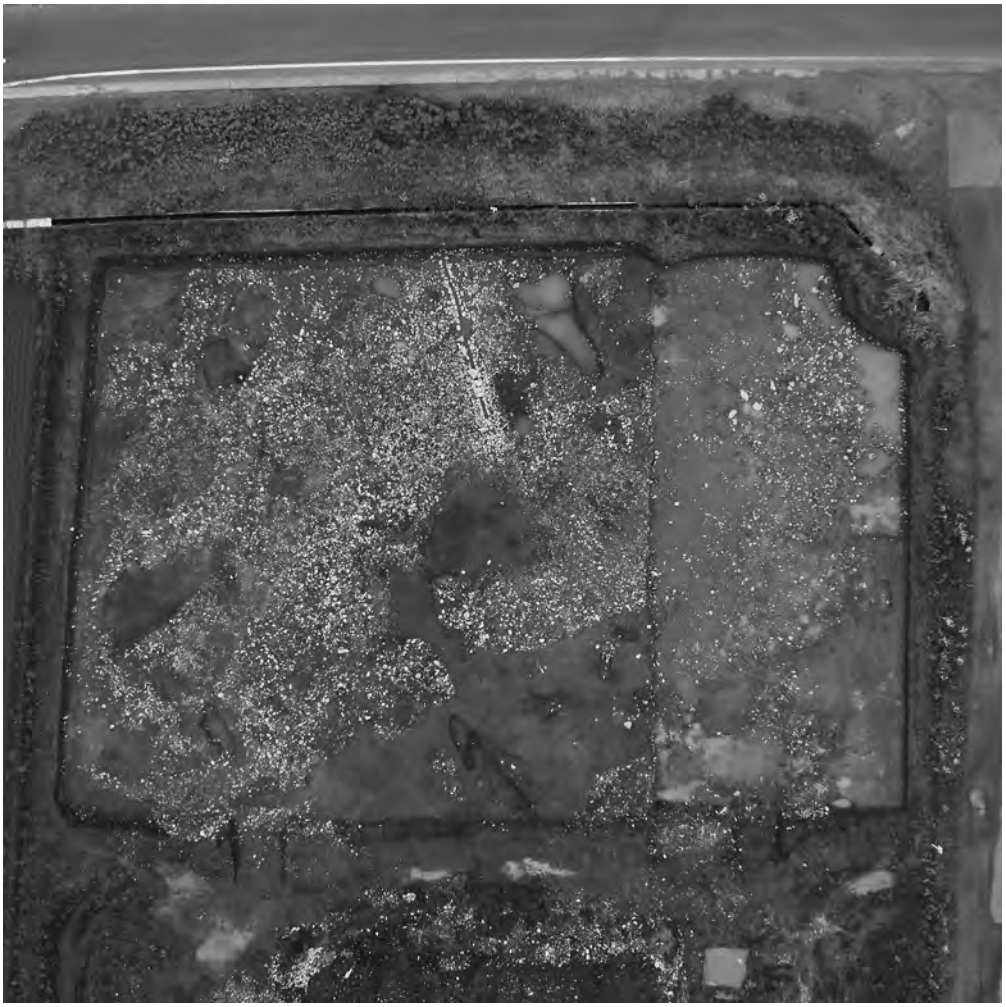

第 16 図 -29

第 17 図 -30


第 17 図 -31

大村湯福遺跡出土遺物③

1. 鬼木鉾立遺跡２次
調査区遠景
（空中写真 北東から）



2. 鬼木鉾立遺跡２次
調査区全景
（空中写真）

1．1号土坑（北東から）

2．2号土坑（南西から）

3．3号土坑（北西から）

1．4号土坑（北西から）

2．5号土坑（西から）

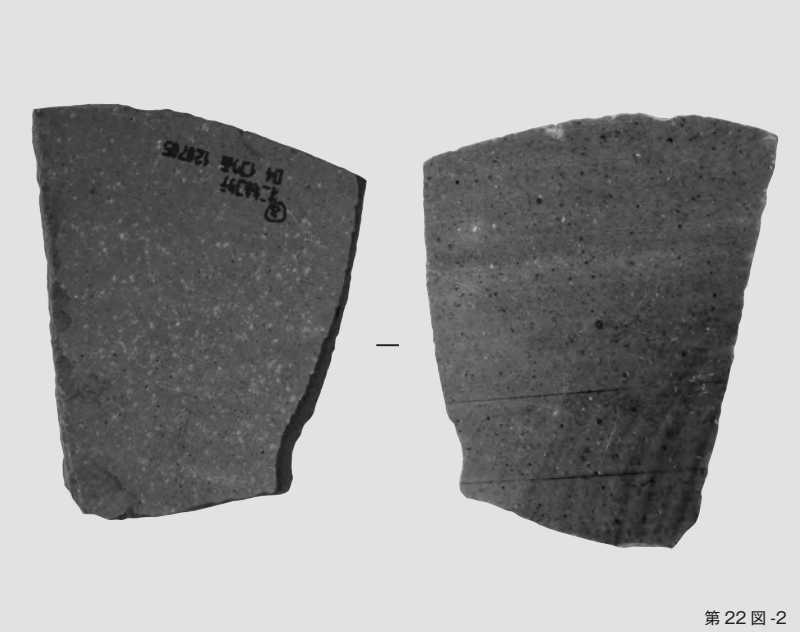
3．6・7号土坑（東から）

1．1号溝（東から）

2．1号溝（東から）

第 22 図 -1

第 22 図 -3



第 22 図 -2

3．鬼木鉾立遺跡２次調査出土遺物

1．鬼木鉾立遺跡３次調査区
西半部全景
（右下が北）

2．鬼木鉾立遺跡３次調査区
東半部南側全景
（左上が北）

3．鬼木鉾立遺跡３次調査区
遠景
（東から）

1．鬼木鉾立遺跡３次調査区
遠景（東から）

2．１号トレンチ土層断面
（北から）

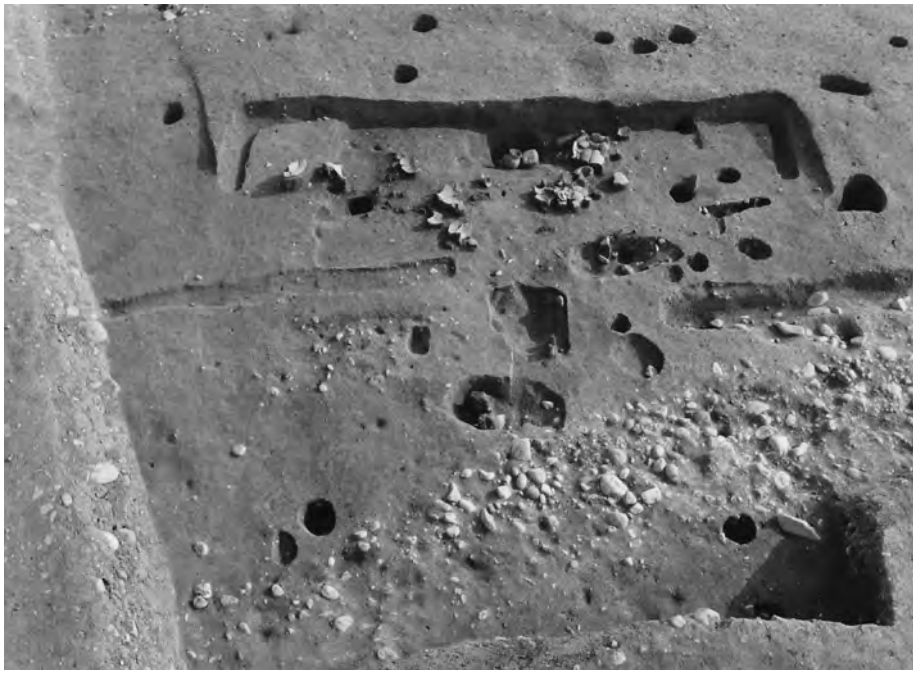
3．２号トレンチ土層断面
（北東から）

1．3号トレンチ土層断面
（南から）

2．1号竪穴住居跡
南北土層断面
南側（東から）

3．1号竪穴住居跡完掘状況
（西から）

1．2号竪穴住居跡
土層断面（南から）



2．2号竪穴住居跡検出状況
（北西から）

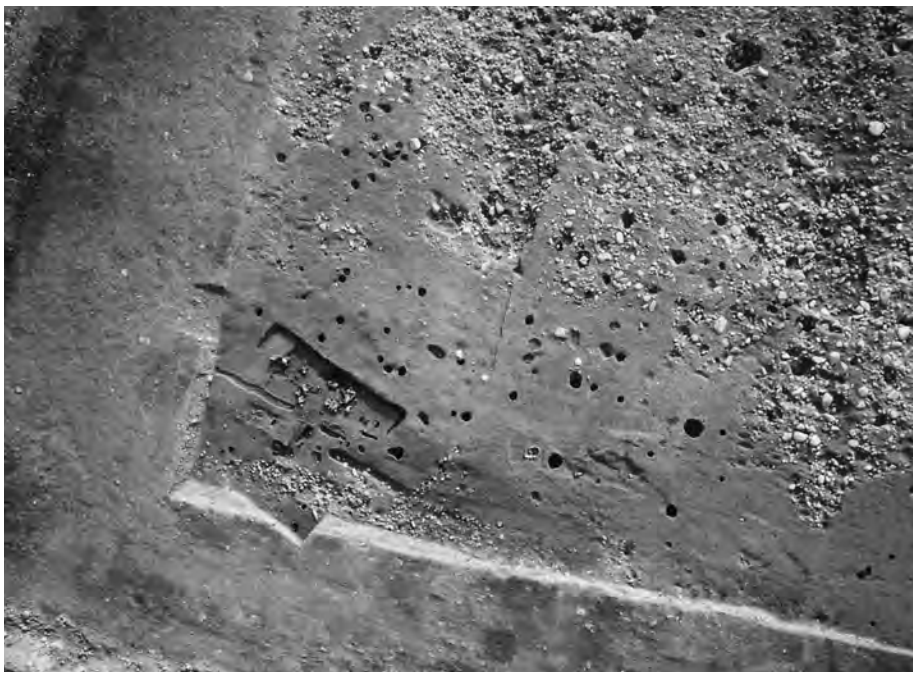
3．1号土器棺墓
（西から）

1．2号竪穴住居跡と
　1号土器棺墓
　（西から）

2．1号掘立柱建物跡
　（東から）

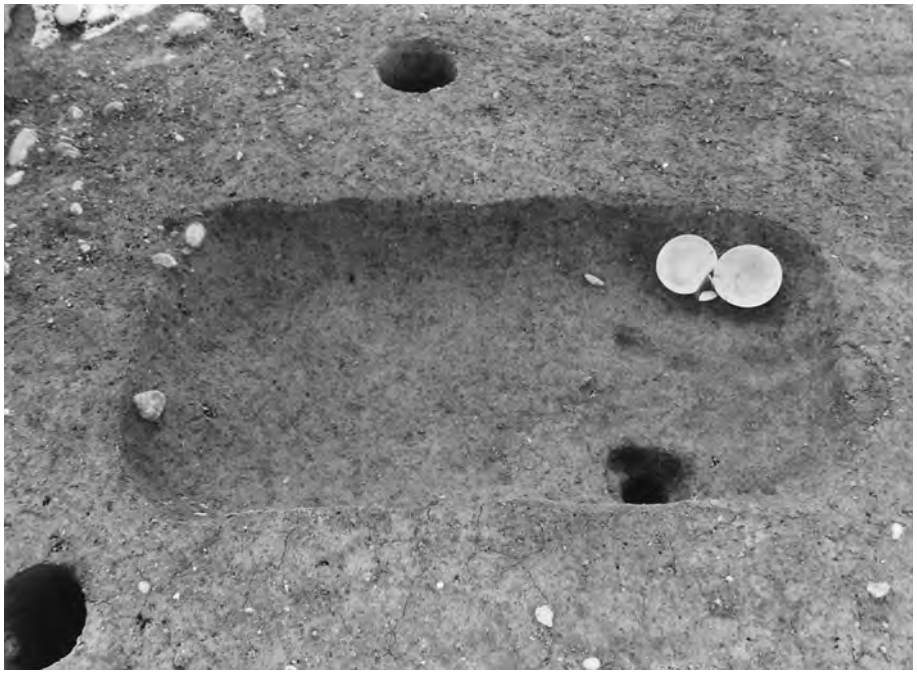
3．2号掘立柱建物跡
　（南から）

1．3号掘立柱建物跡
（西から）



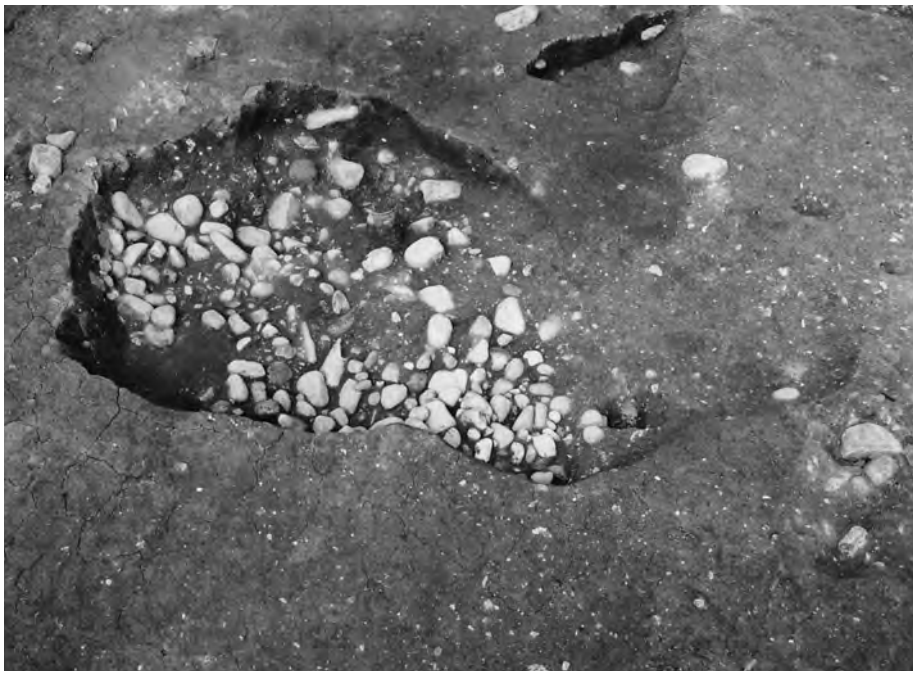
2．4号掘立柱建物跡
（上が北西）

3．1号土坑墓土層断面
（南から）



1．1号土坑墓遺物出土状況
（北から）

2．1号土坑土層断面
（南から）



3．1号土坑完掘状況
（南から）

1．2号土坑検出状況
（南から）

2．2号土坑・1号溝
土層断面（南から）

3．調査区周辺地形
（北東から）

第28図－12

第31図－5

第31図－6

第31図－7

鬼木鉾立遺跡３次調査出土土器①

第31図－3

第31図－4

第36図－4

第36図－5

第32図－1

鬼木鉾立遺跡３次調査出土土器②

報告書抄録

ふりがな	とりごえしもやしきいせき　おおむらゆふくいせき　おんのきほこたていせき
書名	鳥越下屋敷遺跡　大村湯福遺跡　鬼木鉾立遺跡
副書名	
シリーズ名	東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第21集
編著者名	吉村靖徳・小川泰樹（編集）・岡田諭
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒836-0106　福岡県小郡市三沢5208－3　TEL0942－75－9575
発刊年月日	平成27(2015)年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
とりごえしもやしきいせき 鳥越下屋敷遺跡	ふくおかけんぶぜんしとりごえ 福岡県豊前市鳥越	40214	150299	33度36分7秒	131度6分11秒	2012.7.4～2012.8.28	760m²	東九州自動車道建設
おおむらゆふくいせき 大村湯福遺跡	ふくおかけんぶぜんしおおむら 福岡県豊前市大村	40214	150300	3度36分5秒	131度6分2秒	2012.8.20～12.11.20	1,100m²	
おんのきほこたていせき2じちょうさ 鬼木鉾立遺跡２次調査	ふくおかけんぶぜんしおんのき 福岡県豊前市鬼木	40214	150199	33度35分0秒	131度7分54秒	2012.4.26～2012.8.3	1,000m²	
おんのきほこたていせき3じちょうさ 鬼木鉾立遺跡３次調査	ふくおかけんぶぜんしおんのき 福岡県豊前市鬼木	40214	150199	33度34分56秒	131度8分7秒	2012.8.23～2013.2.8	3,500m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鳥越下屋敷遺跡	集落	弥生時代	土坑、流路	弥生土器、須恵器	
大村湯福遺跡	集落	室町時代・江戸時代	土坑、溝	中近世陶磁器、土器	
鬼木鉾立遺跡２次調査	集落	古代	土坑、溝	土師器、陶磁器	
鬼木鉾立遺跡３次調査	集落	弥生時代・古代	竪穴住居跡、墓、掘立柱建物跡、土坑、溝	弥生土器、須恵器、陶磁器	

要約	鳥越下屋敷遺跡：弥生時代、鎌倉時代の集落跡。 大村湯福遺跡：室町時代末から江戸時代前期の集落跡。 鬼木鉾立遺跡２次：古代の集落跡。 鬼木鉾立遺跡３次：弥生時代、平安時代の集落跡。

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 26	登録番号 16

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告
-21-
福岡県豊前市所在遺跡の調査
鳥越下屋敷遺跡・大村湯福遺跡・鬼木鉾立遺跡

平成 27 年 3 月 31 日

発行　九州歴史資料館
〒 838-0106　福岡県小郡市三沢 5208- 3
印刷　石橋印刷株式会社
〒 812-0007　福岡市博多区東比恵 3 -21-10